

絶えず祈れ
(下巻)

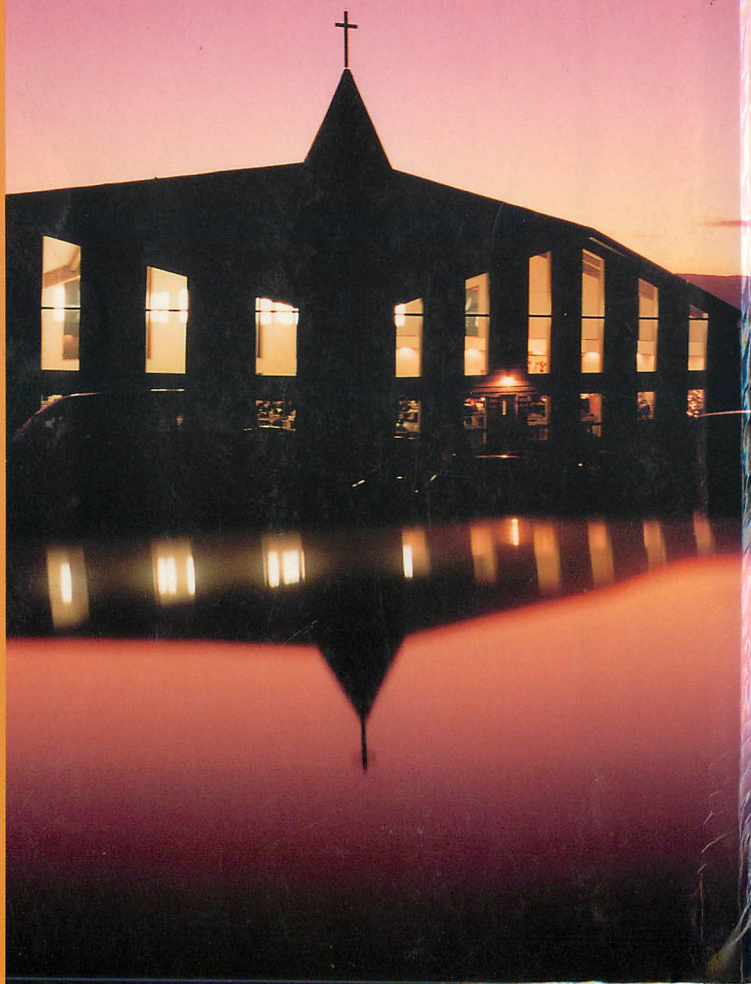
ゴットホルド・ベック 著

絶えず祈れ

(下巻)

ゴットホルド・ベック 著

…キリスト・イエスにあつて神があなたに望んでおられることです。(1テサロケ5・18)





わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、
あなたの知らない、理解を越えた大いなる事を、
あなたに告げよう。

(エレミヤ33・3)

イエス様を信じているひとびとだけでなく、
どなたもお読みいただきたいと心から願っています。

著者 ゴットホルド・ベック

…キリスト・イエスにあつて神があなたがたに望んでおられることです。(1テサロニケ5・18)

絶えず祈れ(下巻)

ゴットホルド・ベック 著

はじめに

ゴットホルド・ベック

「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」

(ルカ 9・62)

主なる神があなたにおあたえになった働きをつづけなさい。

嘘つきには、嘘をつかせておきなさい。

組織や制度がくずされるなら、そのままにしておきなさい。

悪魔には悪事にふけらせておきなさい。

しかし、あなたは、なにもさまたげがはいらないように気をつけて、

ひたすら主なる神がおあたえになった働きをつづけなさい。

主なる神はあなたに、お金持ちになれと命じてはおられません。

主なる神はあなたに、ひとに攻撃されても自分の性格を弁明せよとは求めてはおられません。

主なる神はあなたに、悪魔とその配下があなたについていつわりを言いふらしても、反論せよとは言っておられません。

そのようなことに夢中になれば、あなたはそのほかのことをなにもしなくなってしまう。

あなたは主のためではなく、自分自身のためにことを行なうようになってしまっています。

あなたはただひたすら、主があなたにおあたえになった自分の仕事をつづけなさい。あなたの目標は、空の恒星のように不動のものでなければなりません。

あなたは、攻撃され、非難され、不当なあつかいを受け、こばまれ、傷つくことがあるかもしれませんが。敵があなたをののしり、友があなたを見すて、ひとから軽蔑され、拒否されるようなことがあるかもしれません。しかし、あなた自身の人生の目標と、あなた自身の存在のすべてをかけて、ゆるがない決意と絶えることのない熱意をもって、神があなたにあたえられた目標を追求しつづけることを、いつも第一に考えるようにしなさい。

地上での人生の終わりに、イエス様は父なる神に向かって、おっしゃいました。

「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上でああなたの栄光を現わしました。」
(ヨハネ 17・4)

そのイエス様に似たものとされるまで、あなたも主がおあたえになったわざをつづけるのです。主への忠実こそがすべてです。主がお氣にめしてくださること、たいせつなのはそれだけです。人間的にいくら勤勉であったとしても、永遠の実を結ぶことはありません。

さて、はじめに、まえがきのテーマとなるパウロのことばを、使徒の働きの中から読んでみ

ましよう。

あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。私が出発したあと、狂暴な狼があなたがあたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。ですから目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあつて御国を継がせることができますのです。

(使徒 20・28-32)

聖書に告げられている再臨をまぢかにひかえた現代の特徴とは、聖書にたいするあいまいな怠りどと妥協がどんどんふえてくることです。そのひとつに、みことばだけにより頼み、みことばだけに立つのではなく、人間的な考えで、多くのこととなった考えかた、多くのこととなった霊のクリスチャンたちが集まってひとつの組織をつくりあげようとする大きな動きがあります。これについては日本ではまだ少数のひとしか気がついていませんが、たいへんな危険性をはらんでいるのです。その危険性について、すこしごいっしょに考えてみましょう。

日本の「エホバの証人」の会員数は、このところ急速にふえつづけています。それは多くのひ

とびとがこちらのむなしさをみとめ、内面的なささを求めていることのひとつのあらわれでもあります。しかし、ここで注意しなければいけないのはつぎの点です。

「エホバの証人」でも聖書が使われていますが、「イエス・キリストは神ではなく、神の子どもにすぎない」と教えています。うたがいもなく人間の子は人間であり、動物の子は動物ですから、神の子は神にほかなりません。イエス様が神であることは、聖書ぜんたいから見ても、うたがいのない事実です。

また「エホバの証人」は、「父と子と聖霊」という三位一体を否定しています。たしかに三位一体という言葉は聖書のなかにでてきません。そのあとでつくられた言葉です。しかし聖書はつきりと言っていることは、この世界がどのように創造されたかといえますと、父なる神は、イエス・キリストをとおして、聖霊の力によってすべてをおつくりになったのです。救いについてもおなじことが聖書に書かれています。父なる神は、イエス・キリストをとおして、聖霊の力によって人間ひとりひとりのために、救いのみわざをなされたのです。

聖書にもとづくこの事実を否定するひとびとは、ヨハネ8章44節にあるとおり人殺しである悪魔のとりこになつてゐるのです。ですからその結果として「エホバの証人」のひとびとは、自分たちの熱意やけんめいな努力にもかかわらず、罪が赦されているという確信がもてず、「私たちの国籍は天にあります。(ピリピ3・20)」と証しすることができません。

「エホバの証人」の神である「エホバ」は、かれらの宗教団体がつくりあげた偶像です。「エホバの証人」が意識的に神性を否定した「イエス・キリスト」こそ、まさに聖書に告げられてい

る「まことの救い主、まことの神、永遠のいのち」なのです。聖書は警告しています。

私たちは神からの者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、『まことの神』、永遠のいのちです。子どもたちよ。偶像を警戒しなさい。

(Iヨハネ 5・19～21)

偶像という点では、カトリック教会にもおなじことが言えます。カトリック教会の神は、「マリヤ様」とおしてしか近づくことができない神であり、つまり聖書に立つことをしないでカトリック教会がつくりだした偶像です。しかもカトリック教会は、神のみことばである聖書を自分で読んだひとびとを、数百年にもわたって追いまわしては拷問にかけ殺してきたのです。このことについてカトリック教会は、今日にいたるまで悔い改めをしていません。かつてのあやまちを認めてしまうと当時の法王は誤っていたことになり、ひいては今日の法王もあやまちをおかしていることを認めざるをえなくなってしまうからです。カトリック教会はこのようなことを決して認めようとはしません。たとえば、法王によって教義がすっかり変わってしまったことがあります。「マリヤ様」の死は自然死だったと信者たちは何百年間も信じてきたのですが、四十四年まえに、代わったばかりの法王が、「マリヤ様」は死んだのではなく天空へ肉体のまま昇っていったのだという宣言をだしました。それいらい信者たちはこの教義をぜったいの真理として受け入れざる

をえなくなっています。

法王のことを、イギリスの世界的な伝道者で聖書学者であるスボルジョンは、「悪魔に愛されている者」と呼び、宗教改革者たちは「反キリスト」と呼びました。ところがなんとビリー・グラハムという有名な伝道者は、法王のことを「世界一の伝道者」と呼んでいるのです。このようないどをとる者は、宗教改革の教義、つまり「聖書のみ、信仰のみ、恵みのみ」を放棄してしまっているのです。そしてもちろん、これらの教義を放棄した者は、もはや「聖書に忠実である」とは決して言えません。

つぎの危険は、エクメニカル運動（教会合同運動）です。ビリー・グラハムが世界的な規模で呼びかけを行なうことにより、多くのひとびとはこのエクメニカル運動（教会合同運動）とカトリック主義の危険性についてめくらにされてしまいました。エクメニカル運動とは、スイスのジュネーブに本拠をおき、全世界八十数カ国のプロテスタント教会、英国国教会、正公会など二百十八を数える教会のクリスチャン三億五千万人が所属している組織です。このように、人間によって考えだされ、つくりだされた統一体は、聖霊による一致とはまったく無縁のものです。このエクメニカル運動は、カトリック教会と手をむすんで、にせ預言者を王位につけることさえしかねません。

またビリー・グラハムは、いささかのうたがいもなしに、あるカトリック・セミナーから学位

をもらっています。またカトリックの信者たちに、カトリック教会をはなれないようにとも呼びかけています。また、欧米で大規模な福音伝道が行なわれるばあい、その委員会のメンバーは、純粹に聖書だけにもとづいてはいないひとびとが多数をしめることが最近多くなっています。

たしかに、ビリー・グラハムをとおして多くのひとびとが福音に接し、主に導かれました。ビリー・グラハムは、十字架を恥とはせずに、悔い改めと回心をはっきりと呼びかけています。ビリー・グラハムの言っていることは一見聖書的です。しかし、ビリー・グラハムは、言うべきことを意図的にかくしてもいるのです。つまり、カトリック教会の教義のあやまり、たとえばひとは洗礼を受けて救われる、といったあやまった教えを黙認しているのです。私の友人が「ビリー・グラハム・ミッション九四年」にさきだつて、ビリー・グラハムのカトリック教会との関係について資料を手に入れようとはしました。ところが数日後、「残念ながらご希望にはおこたえできません」と言われました。日本ではそうしたことは公開すべきではないからだそうです。知っていないがら意識してかくし、口をつぐんでいるわけです。

旧約聖書と新約聖書に登場する使徒たちや預言者は、問題をあきらかにし、罪をあきらかにして率直に語ることをおそれませんでした。その結果、かれらの多くは排斥され、追いまわされ、殺されてしまったのです。ビリー・グラハムを肯定する者は、そのことによってカトリック教会をも肯定することになってしまします。

そればかりか、危険なことに、ビリー・グラハムはカリスマ主義のひとつとも協力しています。韓国のチョー・ヨンギをなんども招待し、意見の一致をみているのです。チョーは四次元についての著書のなかで、オカルト心霊術の理論と実践なるものとキリスト思想とをとりまぜて紹介しています。チョーによると、幻想や夢は四次元の言語なのだそうです。なぜなら、聖霊はそういういたものとおして伝わるからだということです。チョーは「信仰」を聖書とはまったくことなつたものとしてとらえています。

「聖書による信仰は、神の約束をかく信頼するものである」はずです。ところがチョーによれば、信仰は「四次元の力」であつて、自分自身の内部で視覚化を行なっていけばその力を増しくわえることができ、その結果、なにかを生起させたり、ものごとに影響をあたえたり、変えたりすることができるようになるということです。チョーはこの「四次元の力」を信徒たちとおなじように使っていることを認めています。しかもチョーは、その力が神からの賜物であると信じています。こうしたチョーの考えかたは、聖書的な信仰を破滅させるものです。ですからチョーは異端者です。このように、ビリー・グラハムを肯定する者は、カリスマ的運動をも肯定することになつてしまいます。

ビリー・グラハムから福音を聞き、導かれ、救われ、どこかの教会に所属しているひとびとはよくつぎのように言います。「主に出会えたことは心から感謝しています。でもいまは、くたぐたに疲れてしまいました。日曜日に教会から帰ると、打ちのめされたようになってしまふので

す」と。これは悲劇です。この逆でなければなりません。「教会に行くまえは、疲れて、苦しんでいましたが、いまはよろこびで満たされています」。なぜこのようなことになるのでしょうか。自分で計画をたて、そのあとで神の祝福を求めているのを見ると、私はとても悲しくなります。計画をたてるまえに、まず、「主よ、あなたはなにをお望みですか」としずまってたずねるべきではないでしょうか。

多くのひとびとが、イエス様の教会を建てようとけんめいにつとめています。しかしイエス様はあらかじめ言っておられます。「わたしは……わたしの教会を建てます。(マタイ16・18)」。しょせん人間にはそのようなことはできないからです。人間的な試みはすべて、主の働きのじやまになります。ひとびとはまったく気がつきませんが、ほんらい主のみからである教会の「かしら」であるべきおかたが「戸の外に立って」おられます。「見よ。わたしは、戸の外に立ってたく。(黙示3・20)」。主イエス様がかたすみけに押しやられ、なにも語られず、傍観者となってしまわれたら、よろこぶのは悪魔です。人間が計画をたてると、資金の面でも人間に依存せねばなりません。このような状態になるとしたら、それはまさに悲しむべき事態です。

甲子園でのミッションで話しあわれた「いままで日本では大きな霊的な覚醒がなかったから、超教派ですすめていこう」、また「みんなでリバイバルのために祈ろう」という計画は、人間の思いからでたものであり、中心となるのは人間です。人間は計画し、お金のために走りまわりま



左からベックさん、故藤本淳之助さん、賢二さん。

すが、しかしその結果ははじめの計画とはまったくちがったものになってしまいました。

たしかに人間的に努力すれば、おおぜいのひとびとを集めることができます。しかし妥協なしには、こうしたことはすべて不可能です。つまり「真理の犠牲のうえに、いつわりの愛が吹聴される」ことになってしまうのです。妥協せず、主にだけ従うひとを、主は祝福してください。たしかにおおぜいのなかになれば信者は安心し、一種の心地よさをおぼえるでしょう。しかし、家族、友人、親族など多くのひとびとがまだ救われていないという事実や、全国の教会の礼拝出席者の平均がわずかに三十七人にすぎないという事実を見つめるなら、一日もはやくこのような夢想から目をさますべきです。自分のまわり、自分の家族、会社のひとりひとりの救いこそが、主が求めておられることであり、すべてはそこからはじまるのです。

さて、「絶えず祈れ」の下巻がようやく刊行のはこびになりました。本書は私のメッセージのテープを編集したものです。いまは天に召され、当時七十四歳だった藤本淳之助さんが一年半をかけてテープを聞きながら一語一語、書きのこしてくださった草稿がそのものになっています。多くのかたがたが主に従って祈りつつづけられるためのはげましとなることを願って、一冊の本として出版したいという思いがつのり、出版にふみきました。

また本書は、「聖霊の第三の波」と称するカリスマ的運動に呑みこまれないようにするための、警告の書ともなっています。

いわゆるカリスマ的運動もまた、たいへん危険なものです。カリスマ的運動は、ながいあいだにわたって、異言やいやしなどの賜物が人間には必要だ、と主張しつづけてきました。「神は病氣をお望みではない」などと言いつづけてきたのです。しかし、聖書をよく読むならば、病氣や労苦や問題を、主は罰としてではなく、愛の証拠としてさづけられたことにうたがいのよちはありません。苦しみがなければ、主のみもとに来るひとはいません。

このカリスマ的運動の大きな流れは「聖霊の第三の波」と呼ばれており、その代表的な人物は、アメリカ人のピーター・ワグナーとジョン・ウインバーです。その危険性をあきらかにするためにかねらの誤った主張を見てみましょう。

・しるしや奇蹟についての「聖霊の第三の波」の誤った主張 その1

「しるしや奇蹟は、使徒の働き時代に過ぎられたものではない、しるしや奇蹟、さらには悪魔ばらいまでも必要だ」と、「聖霊の第三の波」は言っています。しかし主イエスが人間の生活に介入してくだされば、悪魔は退散してしまいます。人間はほかになにもする必要がありません。この世のいろいろなゆるる宗教でも、不思議なこと、しるしや奇蹟のたぐいがよく行なわれることを考えれば、奇蹟が神のみわざだと断言することはできません。新約聖書にあきらかにされているように、世の終わりのときには、「にせ預言者やにせ使徒たちがしるしや奇蹟を行なつて、多くのひとびとをまどわすようになる」のです。多くのひとびとは、しるしや奇蹟によっては救われることができず、逆にまどわされて神のみことばを信じなくなるばかりか、いつわりまでも信じるようになります。

「にせキリスト、にせ預言者たちが現われて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。」 (マタイ 24・24)

不法の人の到来は、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。

(Ⅱテサロニケ 2・9、10)

また、人々の前で、火を天から地に降らせるような大きなしるしを行なった。また、あ

の獣の前で行なうことを許されたしるしをもって地上に住む人々を惑わし、剣の傷を受けながらもなお生き返ったあの獣の像を造るように、地上に住む人々に命じた。

(黙示 13・13、14)

・しるしや奇蹟についての「聖霊の第三の波」の誤った主張 その2

「しるしや奇蹟はどうしても必要である」と、「聖霊の第三の波」は主張しています。しるしや奇蹟によって偏見がとりさられ、教会が成長するということです。福音にたいする反対は、超自然的な現象によって克服されるのだそうです。これは「パワー・イバングェリズム」と呼ばれています。このことは日本ではよく「力の伝道」と言われ、しるしや不思議がともなう伝道、御霊の賜物と奇蹟、いやし、異言による祈りなどが強調されます。また「宇宙レベルの霊的戦い」についても強調されますが、聖書にはその根拠になるような記録は存在しません。

しるしや奇蹟にたいして、聖書のしめすところはまったく逆です。「しるしや奇蹟は、偏見をとりのぞくものではない」と、はっきり書かれています。

イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行なわれたのに、彼らはイエスを信じなかった。

(ヨハネ 12・37)

そしてイエス様ご自身は、つぎのようにおっしゃっています。

「見ずに信じる者は幸いです。」

(ヨハネ 20・29)

「パワー・イバンジェリズム」のうしろにある哲学にたいして、イエス様はつぎのようなきびしい判決をくだしておられます。

「悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。だが預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」

(マタイ 12・39)

ひとびとがいきいきとしたまことの信仰に導かれるのは、しるしや奇蹟によってではなく、ただ神のみことばによるのです。

信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

(ローマ 10・17)

主が病をいやされたので、そのひとがまことの悔い改めと信仰に導かれたということを、私はいちども経験したことはありません。それとはまったく逆に、主の御手からいただいた病氣や死をとおして、病人のひとりひとりが家族とともに強められ、主のもとに導かれることをたびたび経験しているのです。決して「聖霊の第三の波」が言う、いわゆる「パワー」が必要なわけではありません。むしろその逆に「主は弱者を使って御国を建てられる」のです。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というの、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

(Ⅱコリント 12・9)

ああ、私の苦しんだ苦しみは平安のためでした。あなたは、滅びの穴から、私のたまし
いを引き戻されました。あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。

(イザヤ 38・17)

「わたし(イエス様)に向かって、『主よ、主よ。』と言う者がみな天の御国にはいるの
ではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、
大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言を
し、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったで
はありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたが
たを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」

(マタイ 7・21-23)

・啓示のみなもとは聖書だけではなく特別な体験にも求められるという「聖霊の
第三の波」の誤った主張

「啓示のみなもとは聖書だけではなく特別な体験にも求められる」と「聖霊の第三の波」は主
張しています。しかしまことの霊的な目ざめは、聖書だけに立ち返ったときにあたえられるもの

です。主のみことばに従うと聖霊に満たされます。しかし、神のみことばでなくまぼろしや特別な体験を第一にすると、ひとは迷い出てしまいます。私たちの体験が重要なではありません。神のみことばだけがたいせつです。

みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしつかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもつて、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。

(Ⅱ テモテ 4・2-4)

異言を語るといふ体験もまた、聖霊とはなんの関係ありません。ある婦人は、カリスマ的な神に選ばれたと自称する女性から、何時間もピアノを弾きつづけ、賛美するように、そして異言で語るようにと命じられました。この婦人はピアノを習ったことがありませんでしたが、従わないとなぐられたり、足でふみつけられたりしたのです。また多くの年配の婦人たちは、考えられないほど多額のお金をとられています。

「聖霊の第三の波」は、その名まえのなかに聖霊という文字がはいっていますが、神のみことばの権威に百パーセント従っていないので、聖霊によるものであろうはありますがありません。いわゆる「聖霊の第三の波」の運動にくわわっているひとびとは、おくめんもなく「オカルト主義者」と

おなじ力」を使っていると広言しています。

また「聖霊の第三の波」でも、「砕かれる」、「献身」、「従順に従うこと」といった用語が使われていますが、聖書のみことばがしめす内容とはまったくべつのものです。自分自身のためにまだなにかを望み、求めている者は、聖霊の導きのもとにあるとはいえません。十字架が中心にえられていないところでは、主の祝福を期待するわけにはいかないのです。したがって、パウロはつぎのように告白しています。

なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。

(Ⅱコリント 2・2)

しかし、蛇が悪巧みによつてエバを欺いたように、万一にもあなたがたの思いが汚され、キリストに対する真実と貞潔を失うことがあつてはと、私は心配しています。

(Ⅱコリント 11・3)

現在の自分の信仰生活に満足することができず、もっと多くを望み、純粋な動機をもっているクリスチャンほど、この「聖霊の第三の波」にたあいもなく呑みこまれてしまいます。この「聖霊の第三の波」は、「聖書がしめすまことの聖霊とはまったくなんの関係」もありません。

「主よ、私がなにをすることを、あなたはお望みですか？」

このたいどこそが私たちの特徴でなければなりません。さもないと、アブシャロムにまねかれて行つた者たちのようになってしまします。

アブシャロムは二百人の人々を連れてエルサレムを出て行つた。その人たちはただ単に、招かれて行つた者たちで、何も知らなかった。

(Ⅱサムエル 15・11)

聖霊がゆたかに働かれて、主イエス様が私たちのすべてをご支配くださいますように。

また私たちをとおして主イエス様が大きく働いてくださいますように。

そしてすべてのことにおいて、主イエス様が第一となられますように、ここからお祈りします。不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとペリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

(Ⅱコリント 6・14―18)

はじめに

一九九四年十二月十日

主に救われた思い出の日に。

ゴットホルド・ベック

目次

はじめに	ゴットホルド・ベック	9
絶えず祈れ	下巻	
神に近づきなさい		31
主は聞いてくださる		53
主に愛されているひとびとへの祈り		69
祈りびととしてのイエス様		89
密室での祈り		113
祈りをやめる罪		131
祈りがさまたげられないために		155
ここにいだく不義		179
断食とむすびついた祈り		200
ともに祈ることのたいせつさ		219
「祈る教会」の力		235

写真特集 全国の家庭集会

よろこびの集い

・ドイツ

祈りにささえられて 三つの集いのご紹介 273

祈りにささえられたキリスト集会の三つの集いをご紹介します。

1 ともに祈り、ともに働くよろこび、ドルカス会

2 苦しむ子どもたちと家族をとおして、主のご栄光が

現されることを祈る集い。

3 現代病からの解放と回復を。A・Aのご案内

基礎的なみことば 286

「実を結ぶ命」「絶えず祈れ」(上巻) のおすすめ 288

「神の愛」(上)(下) のおすすめ 290

キリスト集会のご案内 294



▲左から谷山さん、小々馬さん、吉田さん、和田さん、林さん、桜本さん、森さん、池田さん、小々馬さんのご主人。
西軽井沢国際福音センターにて。

▼林さんご夫妻。主に祈るようになったおばあちゃんと。



神に近づきなさい

神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。

(ヤコブ 4・8)

この章のテーマは「神に近づきなさい」です。はじめにあげたみことばにはまた、祈りとはたいへん単純なものだということがしめされています。主なる神は「神に近づきなさい」と命令しておられます。そして主なる神はまた、「神はあなたがたに近づいてくださいます」というすばらしいやくそくをあたえておられます。主ご自身が「わたしがあなたがたに近づく」とやくそくして下さっているのです。「わたしが近づく」とは、いいかえれば「わたしは自分自身をあきらかにする。わたしは、わたしの全能をあきらかにする」ということです。私たちが主に近づくか近づくかないかということは、主にとってどうでもよいことではありません。主なる神からなれている人生は、暗闇のなかの人生です。

私たちの人生は、私たちが主なる神に「近づくか近づくかないか」によって決まります。私たちがありのままの状態で主のみもとに行き、主のまえにこころをそそぎだすなら、主は私たちの願うことを聞いてくださいます。主ご自身が近づいてくださるのです。そして主は近づいてくださるだけでなく、私たちを助けてくださいます。主が近くにおられるということは「たすけ、救い、祝福」をいただくことを意味します。

ある意味ではだれでも生けるまことの神にちかいです。というのは、主なる神がどこにでもおられご臨在なさっておられるからです。詩篇の作者はこの事実をつぎのようにしるしています。

私はあなたの御霊から離れて、どこへ行きましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。私が暁の翼をかけて、海の果てに住んでも、それでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕えます。(詩篇 139・7-10)

パウロはアテネのアレオバゴスという山で、すべてをお造りになった主、唯一の生ける神について語ったとき、ある詩人のことばを引用しています。

これは、神を求めさせるためであつて、もし探り求めることでもあるなら、神を見いだすこともあるのです。確かに、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。あなたがたのある詩人たちも、「私たちもまたその子孫である。」と言ったとおりです。

(使徒 17・27、28)

たとえば、私たちが主なる神をこの目で見ることはできなくても、主は私たちのちかくにおられます。だれひとり、主から逃げることはできません。いっぽう生まれつきの人間は、主なる神からはなれている存在です。主なる神と交わりをもたない、ということは霊的に死んでいることを意味します。主なる神は神聖であり、人間は罪深い者です。放蕩息子のように、私たち人間は神からとおくはなれたところにいます。

「それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、

そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。」

(ルカ 15・13)

人間は生まれつき神を知らず、めくらであり、神にたいして無関心です。パウロはそのような人間の状態をつぎのように書きしるしています。

そこで私は、主にあつて言明し、おごそかに勧めます。もはや、異邦人がむなしい心で歩んでるように歩んではなりません。彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。

(エペソ 4・17、18)

靈的に見るならば、人間は神からとおくはなれています。これこそあらゆる悩みの原因です。主なる神が私たちに「近づきなさい」と命令されるとは、なんというすばらしいことでしょう。主は、私たちが主に近づくことを願っておられるのです。主に近づくことこそ、なににもましてたいせつなことなのです。私たちがただしいたいどで主に近づくとき、主は私たちに近づいてくだされます。

放蕩息子の父親が、帰ってきた息子をいそいでむかえ入れたように、父なる神は私たちをむかえ入れてくださいます。父なる神があなたのことを心配してくださっているのです。これこそ、すばらしい福音ではないでしょうか。あなたは父なる神にとってどうでもよい存在ではありません。父なる神は、あなたをむかえ入れたいところから望んでおられるのです。

では、私たち罪深い人間はどのようにして主なる神に近づくことができるのでしょうか。そのために私たちが考えてみるべきことはふたつあります。ひとつは、私たちが主なる神に近づくためには一定の前提条件を満たす必要がある、ということであり、いまひとつは、私たちが主に近づく動機です。まず、最初の前提条件から見ていきましょう。

I 私たちが主に近づくたいと思うなら、満たさなければならない前提条件

私たちが主なる神に近づきたいと思うなら、満たさなければならない一定の前提条件があります。その前提条件とは、つぎの五つです。

- 1 悔い改めるそなえができたいたいで
- 2 信仰に満ちたいたいで
- 3 ただひとりイエス様をとおして
- 4 真剣ないたいで
- 5 畏敬の念をもって

これらについて、ごいっしょに学んでいきましょう。

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。それとも、「神は、私たちのうちに住まわせた御霊を、ねたむほどに慕っておられる。」という聖書のこ
とばが、無意味だと思うのですか。しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいま

す。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいてくださいます。罪ある人たち。手を洗いきよめなさい。二心の人たち。心を清くしなさい。あなたがたは、苦しみなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高くしてくださいます。

(ヤコブ 4・4-10)

1 悔い改めるそなえができたといで

第一に、私たちは「悔い改めるそなえができたといで」をもって、主に近づかなければなりません。預言者イザヤは、つぎのように言っています。

私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かつて行つた。

(イザヤ 53・6)

またイザヤは、おなじように主の命を受けて、私たちにつぎのように呼びかけています。

悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。

(イザヤ 55・7)

主に近づきたいと思うひとは、おのれの道を捨て、おのれのはかりごとを捨てさり、自分の罪と債務をあかるみにだすころのそなえをもたなければなりません。ひとこと言うのと、ひとはみな主のまえに「悔い改めるそなえができたたいど」とらなければならぬのです。

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。

(箴言 28・13)

2 信仰に満ちたたいど

第二に、私たちは「信仰に満ちたたいど」で、主に近づかなければなりません。ヘブル人への手紙の著者は、まことの信仰が神によるこぼれるものであることをつぎのように書いています。

信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。

(ヘブル 11・6)

これはなんといいおやくそくでしょうか。神は、神を求める者にはゆたかにむくいてあげたいと望んでおられるのです。主なる神は生きておられます。主なる神は行動してくださいます。主なる神は私たちにご自身を現わすそなえをしておられます。主に近づく者は、放蕩息子のように受け入れられ、恵まれ、ゆたかにほどこされます。

3 ただひとりイエス様をおして

第三に、私たちは「ただひとりイエス様をおして」主なる神に近づかなければなりません。罪の深い罪人が聖なる神のご臨在にはいつていきたいと願うならば、このことは主イエス様をおしてのみ可能です。というのは、主イエス様ご自身がはつきりとつぎのようにおっしゃっておられるからです。

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」
(ヨハネ 14・6)

主なる神の聖なるご臨在にいたる道は、ただひとつだけです。

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができますのです。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。

(ヘブル 10・19、20、22)

4 真剣なたいどで

第四に、私たちは「真剣なたいどで」主に近づかなければなりません。まえにあげたヘブル人

への手紙の聖句には「まごころから」神に近づこう、とあります。

私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。

(ヘブル 10・22)

良心に責められていたり、不真実なところが残っているなら、このように「まごころ」から神に近づくことができません。

5 畏敬の念をもって

第五に、私たちは「畏敬の念をもって」主に近づかなければなりません。モーセについて、私たちは出エジプト記からつぎのようなみことばを読むことができます。

モーセは、ミデヤンの祭司で彼のしゅうと、イテロの羊を飼っていた。彼はその群れを荒野の西側に追って行き、神の山ホレブにやって来た。すると主の使いが彼に、現われた。柴の中の火の炎の中であつた。よく見ると、火で燃えていたのに柴は焼け尽きなかった。

モーセは言った。「なぜ柴が燃えていかないのか、あちらへ行つてこの大いなる光景を見ることにしよう。」主は彼が横切つて見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を呼び、「モーセ、モーセ。」と仰せられた。彼は「はい。ここにおります。」と答えた。

(出エジプト 3・1～4)

モーセはここに生ける神がご自身を啓示なさったことを知り、そして、つぎのみことばを聞きました。

神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である。」また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。

(出エジプト 3・5、6)

私たちはかろい気持ちで主に近づくことはできません。畏敬の念に満ちたたいどをもつてのみ、主に近づくことがゆるされるのです。

主は私たちに呼びかけておられます。「わたしに近づきなさい。そうすれば、わたしはあなたがたに近づきます」。このみことばによつて、主ははつきりと命令しておられるのです。なぜこのように命令なさったのでしょうか。それは主が、私たちに「ご自身をつたえたい。よくしてあげたい。ほどこし、恵んであげたい」ところから願っておられるからです。

さて、私たちはここまで、「Ⅰ 私たちが主に近づきたいと思うなら、満たさなければならぬ前提条件」についてごいっしょに考えてきました。つぎは、「Ⅱ 私たちが主に近づき、主のご臨在にはいつていく動機」について、七つの項目からごいっしょに考えてみたいと思います。

Ⅱ 私たちが主に近づき、主のご臨在にはいつていく動機

1 あなたが救いを必要としていることを意識しながら、主イエス様に近づきなさい。
そうすると主は決してこばまれません。

2 あなたの負いめを告白するために主に近づきなさい。そうすると主はゆるしてくださいます。

3 あなたの苦悩のすべてをもつて主に近づきなさい。そうすると主は助けてくださいます。

4 あなたの問題と重荷をもつて主に近づきなさい。そうすると主は解決してくださいます。

5 あなたの弱さを知って主に近づきなさい。そうすると主はあなたを強くしてくださいます。

6 あなたが導きを必要とするとき主に近づきなさい。そうすると主は導いてくださいます。

7 いま、主に近づきなさい。そうすると主はこたえてくださいます。

1 あなたが救いを必要としていることを意識しながら、主イエス様に近づきなさい。そうすると主は決してこばまれません。

「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」

(ヨハネ 6・37)

どなたがこのやくそくをしてくださったのでしょうか。主イエス様です。主イエス様はつきりとやくそくしておられます。「だれでも主のもとに来る者はこばまらない」と。だれひとりしりぞけられる者はいません。だれにたいしても退去命令はくだされません。だれひとり捨てられません。これこそ、聖書の福音なのです。

主のまえにへりくだって、畏敬の念をもち、自分の悩みをいだいて主のところに行く者は、ひとりのこらず受け入れられます。主なる神に受け入れられることこそ永遠の平安であり、まことの幸せです。

主に受け入れられるためには、まず最初に聖書を研究する必要はありません。そしてまた、この規則や、あの規則が満たされ守られる必要ありません。ただひとつ必要なことは、主のみもとに行くことです。主のみもとに行く者は、受け入れられます。

「神に近づきなさい」。私たちがしなければならぬこともたいせつなことは、主に近づくことです。私たちはありのままの状態で主のみもとに行くことをゆるされています。あなたはもう、主イエス様のところに行きましたか？ おそらくあなたは、イエス様についてすこしばかりの知識をもっているでしょう。しかし、知識は救ってくれません。知識はたいいのばあい、ひとをごう慢にします。そして主はみずからを低くする者だけをお救いになるのです。あなたが「救いが必要としていることを意識しながら、主イエス様に近づく」と、主はあなたを受け入れてくださいます。

2 あなたの負いめを告白するために主に近づきなさい。

そうすると主はゆるしてくださいます。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(Iヨハネ 1・9)

このみことばはなにを意味するのでしょうか。私たちは欠けた者であり、主にたいして罪をおかした者であり、負いめをもつ者である、ということに気がつくとき、主に近づくべきです。私たちは自分の罪、負いめを徹底的に主に告白しなければなりません。私たちがこのようにするとき、主はゆるしてください、きよめてくださいます。それはなんといいおやくそくでしょうか。

私たちの罪、負いめは主にたいして告白されなければなりません。しかもその罪、負いめの告白は「私はこの罪とこの罪とをおかしました」とひとつひとつ具体的に名をあげてされなければなりません。「あのとき私はうそをつきました。またあのとき私には愛がありませんでした。あのとき私は偽善的でした。私はごう慢で、汚れて、不純でした。これらの罪によって私は主を悲しませました。私は主にたいして罪をおかしました」と。

主は、私たちがあらゆる罪を悔い改め、ゆるしを求めるために主のみもとに行くとき、すべての罪をゆるしてくださいます。

もはや、かくれんぼのように主のまえにかくれるようなことをせず、主の光のなかに来て、すべてをおおやけに告白した者は、主がゆるしてくださいさつたことを知ることができます。主はきよめてくださつたのです。というのは、主ご自身がそのことをやくそくしてくださいさつたからです。主はみことばを守ってくださいます。主はうそをつくことがおできになりません。おそらくあなたは、いまこの瞬間に、こういう点やあいう点で、自分には欠けているところがある、ということに気づいておられることでしょう。主のみもとにいそぎ、そのことについて主に語ってください

さい。そうすれば、あなたは「主はもはや私の罪を思いだされない」ということを知ることができます。

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。

(箴言 28・13)

3 あなたの苦悩のすべてをもって主に近づきなさい。

そうすると主は助けてくださいます。

「苦難の日にはわたし(主)を呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。」

(詩篇 50・15)

かぞえきれないほど多くのひとびとが、悩み、それもほんとうに深い悩み、言いあらわすことのできない悩みのなかにいます。そのような悩みのさなかにあつて、まっさきになにをするべきでしょうか。

「わたしを呼び求めなさい」。これは主なる神のご命令です。これこそのがれ道です。自分の悩みをもって主のみもとに行く者は、「主が私を心配し、受け入れてくださる」ということを知ることができます。

主は助けてくださいます。主はあなたにこたえてくださり、ご自身があがめられほめたたえられるためにならず助けてくださいます。あなたが悩みにしずむとき、主のみもとに行き、あな

たを動揺させている問題、のしかかっている問題について主に語るとき、主はかならずたすけをあたえてくださいます。主は全能なるおかたです。ですから主があなたを助けてくださる方法や手段は、私たちが考えることのできないほどたくさんあります。主は力よく助けてくださいます。どうか重荷をもつて主のみもとに行き、主が助けてくださることを体験してください。

4 あなたの問題と重荷をもつて主に近づきなさい。

そうすると主は解決してくださいます。

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してください。主は決して、正しい者がゆるがされるようにはなさらない。

(詩篇 55・22)

これはすばらしいやくそくです。しかしよくある大きな悲劇は、私たちがしばしば重荷からのがれるために人間のたすけを求めたり、いわゆる専門家の指示をあおいだりして、主おひとりからくるすべてのたすけを待ち望むことをしないということです。そのようないどはしばしば主を深く悲しませます。というのは、そうすることによって主の両手はしばられてしまい、助けることができなくなってしまうからです。

あなたが悩みや重荷をもつて、すぐ主のみもとにいそぐこと。これこそがまことの知恵です。そうすると、主が助けてくださいます。主は、すべてのたすけを主おひとりから期待するひとびとを決してうらぎられません。そのことのひとつの例を、私たちはイザヤ書の37章のなかに見る

ことができます。

アッシリヤの王セナケリブは、ヒゼキヤ王に一通の手紙を送りましたが、その手紙のないようは天と地を造られたただひとりの神、主をそしつたものでした。ヒゼキヤはこれにたいしてなにをしたでしょうか。かれは報復措置として、セナケリブを攻撃する手紙を書いたのでしょうか。そうではありません。ヒゼキヤ王はつぎのようにしたのです。

ヒゼキヤは、使者の手からその手紙を受け取り、それを読み、主の宮に上って行って、それを主の前に広げた。ヒゼキヤは主に祈って言った。「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、万軍の主よ。ただ、あなただけが、地のすべての王国の神です。あなたが天と地を造られました。主よ。御耳を傾けて聞いてください。主よ。御目を開いてご覧ください。生ける神をそしるために言つてよこしたセナケリブのことばをみな聞いてください。」

(イザヤ 37・14―17)

ヒゼキヤは、主の愛と全能の力をよく知っていました。ヒゼキヤは主に向かって祈りました。ヒゼキヤは主にすべての悩みをうちあけました。祈りのあいだにかれは主が決して信頼をうらぎられないという確信を得ました。そして主はかれの訴えを聞き、助けてくださったのです。

主の使いが出て行って、アッシリヤの陣營で、十八万五千人を打ち殺した。人々が翌朝早く起きて見ると、なんと、彼らはみな、死体となっていた。アッシリヤの王セナケリブは立ち去り、帰ってニネベに住んだ。彼がその神ニスロクの宮で拜んでいたとき、その子

のアデラメレクとサルエツエルは、剣で彼を打ち殺し、アララテの地へのがれた。それで彼の子エサル・ハドンが代わって王となった。

(イザヤ 37・36―38)

私たちもまた、おなじ奇蹟を主から期待しましょう。私たちが自分自身の問題をもつて主のもとに行き、主に重荷をあげわたし、「主よ、あなたは私のためにいつも最善をなしてください」ことを確信しています。私はあなたが奇蹟を行なうことがおできになり、私のばあいにもすばらしいたすけをくださることをよく知っています」と言うことができればさいわいです。

私たちがこのたいどをとるとき、主が助けてくださることを経験します。ヒゼキヤの神は私たちの神でもあります。主は生きておられます。主はご自身に近づく者にこたえてくださり、奇蹟を現わしたいところから願っておられるのです。

5 あなたの弱さを知って主に近づきなさい。

そうすると主はあなたを強くしてください。

あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走つてもたゆまず、歩いても疲れない。

(イザヤ 40・28―31)

私たちはよくつかはれます。なんと多くのひとびとが精神的につかはて、どうしたらよいかわからなくなつてしまつていることでしょうか。なんと多くのひとびとがつかはて、まったく成長が見られない状態にとどまつていることでしょうか。しかし、主はのがれ道をござんじます。主はつかはてたひとびとがみもとにいそぐことを命じておられます。というのは、主は強さをもつておられ、私たちを強くしたいと願つておられるからです。私たちが自分の無力さを知つて主のみもとに行くとき、主は私たちを強くしてくださいます。主が私たちに期待しておられることは、弱いままの状態、無力なままの状態で主のみもとに行くことです。そして主は私たちに主の強さをあたえることをやくそくしておられます。使徒パウロもまた、この経験をしました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

(Ⅱコリント 12・9、10)

「主の力は人間の弱さのうちに完全に現われる」。私たちは自分の無力をすなおにみとめて主のみもとに行くとき、主の全能の力を経験することができます。主のみもとに行く者は、強められます。ですから主のみもとに行かないのは、もつともおろかなことです。

私たちは、サタンが私たちをだめにしようと攻撃してくることをよく経験します。そして私た

ちは弱く、みじめな存在であることにも気がついていました。私たちは主に仕えたいと思っていますが、そのためになんの力ももっていないことを知っています。

ではいったいどうしたらいいのでしょうか。「主なる神に近づきなさい」。「主に祈り求めなさい」。そうすると主はこたえてくださり、私たちを勝利者以上のものにしてくださるために必要なものをあたえてくださいます。

「サタンにたいする勝利」「自我にたいする勝利」「罪にたいする勝利」。これらのことは、私たちが祈りながら主に近づくときに、可能となります。

しかし、私たちは、私たちを愛して下さった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

(ローマ 8・37)

主のみもとに来る者は、強められます。

主にあつて、その大能の力によって強められなさい。

(エペソ 6・10)

「主によって強められる」とはどういうことでしょうか。自分の弱さを知りながら主のみもとに行くことです。主のみもとに行く者は強められ、そのひとつには「神の力」があたえられます。

6 あなたが導きを必要とするとき主に近づきなさい。
そうすると主は導いてくださいます。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。(箴言 3・5、6)

聖書はいたるところで、生ける神がご自分にぞくする者たちを導きたいと望んでおられることを語っています。主は私たちが導いていただきたいと望む以上に、私たちを導きたいと望んでおられるのです。ですから私たちが導いていただきたいと思うとき、それは主にとって最大のよろこびなのです。主は、私たちの一生が主によって導かれることを望んでおられます。主によって導かれないひととは、まちがった道にまよいこんでしまいます。そういうひとびとについて、イエス様はどのようにをいためられたでしょうか。

羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかわいそうに思われた。

(マタイ 9・36)

あなたが導きを必要とするとき、主のみもとに行きなさい。主のみもとに行く者は、主によって導かれます。そして主によって導かれる者は、私たちの理解をこえた主にある平安を経験することができます。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

7 いま、主に近づきなさい。そうすると主はこたえてくださいます。

おそらくあなたは、いままで罪人として主のみもとに近づいたことがなかったかもしれません。あなたが必要とするただひとりのおかたは、主イエス様です。ですから主のみもとに近づいてください。主イエス様だけが、あなたを救うことができるただひとりのおかたです。主は決してあなたをこばまないということを信じてください。主はあなたを受け入れてくださり、ゆるしてくださり、永遠の平安をあたえてくださいます。

おそらくあなたは、罪や負いめを告白するため、悩みをうちあけるため、自分の弱さを知って、主に導かれるため、いま、主のみもとに行かなければならないはずです。

どんな動機からであろうとも、ともかく主に近づきなさい。そのままの状態で主のみもとに来なさい。主はあなたが来ることを望んでおられます。あなたが主のみもとに来るとき、あなたは主がこばまずに受け入れてくださり、ゆるしてくださり、助けてくださり、働いてくださり、強めてくださり、導いてくださることを経験します。主はご自分がやくそくされた恵みを、いつも、かならず、私たちにあたえてくださいます。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあります。

主は聞いてくださる



▲主をよろこんでいる
脳出血の後遺症の加藤大介さんとそのご家族。



◀「ただ、あなただけが主です(ネヘミヤ9・6)」。
偶像を焼き捨てて主への愛を。

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るので。

(Iヨハネ 5・14、15)

イエス様を信じ、従う者にとって、もっともたいせつなことはいったいなんでしょうか。いうまでもなく「祈ること」です。「絶えず祈ること」です。イエス様の十字架のみわざを受け入れ、救われたひとびとは「自分のわがままはゆるされている。イエス様は私のような者を受け入れてくださった」と信じるようになります。どうして信じるようになったのか、おそらくだれも説明することができないと思います。なぜなら、信じるようになったのは自分が努力した結果ではなく、主がなさったみわざだからです。そしてひとりひとは「イエス様は私をあわれんでくださった。イエス様はこころの目を開いてくださった。イエス様はあらゆる不幸の原因である自分のわがままをゆるしてください」と確信するようになります。

ほんとうに、主イエス様は素晴らしいおかたです。イエス様はうそを知らないおかた、ご自身のおやくそくをかならず守られるおかたです。このイエス様を信じること、このイエス様を証しすることこそ、なににもましてすばらしい特権ではないでしょうか。

私たちはいま、たしかに終末の時代に生きています。イエス様はまもなく来られます。私たちがのんびりした生活をおくっていていいときではありません。いま、なによりも必要なのは「祈

る」ことではないでしょうか。ですからこの章でも「祈りの必要性」についてごいっしょに考えてみましょう。

ひとことで言うと、「祈りはこの地上におけるもっとも大きな力」です。なぜなら「祈り」は、この無限の大宇宙をみこころのままに動かされる主の御手を動かすものだからです。

詩篇の作者であるダビデは「主は聞いてくださる」と、よろこびをもって告白しています。

主は私の切なる願いを聞かれた。主は私の祈りを受け入れられる。(詩篇 6・9)

「主は聞いてくださる」おかたです。

主を信じる者にとってもっともたいせつなのは、祈ることです。祈りの生活することです。

あなたがいちにちに何回祈るかが問題なのではありません。あなたがほんとうに祈りの生活をおくっているかどうかをたいせつです。朝晩かるく祈るだけでは決してじゅうぶんではありません。「あなたの全生涯が祈りによって動かされているかどうか」がたいせつです。

自分の生活のなかで、祈りがいちばんたいせつになっていない信者は、主にもちいられません。ただしく祈らない信者はただしく生活することができないし、ただしく主に仕えることもできません。そして、絶えず祈ることとは、ただ主に向かって話しつつづけることではありません。意識して主により頼むことです。

みこころにかなう祈りとは、どういうものでしょうか。

「主よ、私はここからあなたを信じています。でも、このようにあいかわらずみじめです。

あなたが助けてくださらなければ、私はこまりはてしてしまいます。あなたが守ってくださなければ、心配で心配でしょうがありません。あなたが導いてくださらなければ、まようことばかりです。主よ、お願いします」。主のまえにこのたいどをとりつづけることこそが主が望まれることです。だから主は「絶えず祈れ」と要求なさっておられます。

イエス様を自分の救い主として信じ、受け入れたかたは、その結果として、自分のわがままはゆるされていると確信することができます。そしてイエス様は「自分のもとに来る者を決して捨てません」とやくそくしてくださいましたから、ひとりひとりは永遠のいのちをもっています。

イエス様は「決して」捨てないと言われたのです。「決して」は「決して」です。

いったんイエス様によって受け入れられたひとびとは、もちろん失敗もするでしょうし、罪もおかすでしょう。けれども、いったんイエス様によって受け入れられたひとびとは、いつまでもイエス様のものです。

救われたひとびとは、もちろん祈りが必要であることがわかっています。けれどもそのなかの多くのひとびとは、かならずしも「祈りの力」を信じているわけではありません。

「すべては祈りにかかっている」と聖書ぜんたいは言っています。

なぜ多くの信者は打ちのめされた気持ちになるのでしょうか。ほとんど祈らないか、祈ったとしてもほんのわずかしかならないからです。意識して主により頼もうとしないからです。

なぜ多くの救われたひとびとは敗北を経験するのでしょうか。ほとんど祈らないか、祈ったとしてもほんのわずかしかならないからです。意識して主により頼もうとしないからです。

なぜわずかなひとびとしか主のもとに導かれないのでしょうか。ほとんど祈らないか、祈ったとしてもほんのわずかしかな祈らないからです。意識して主により頼もうとしないからです。

イエス様にとって不可能なことはありません。イエス様は全能のおかたです。イエス様は人間を救いたいと望んでおられます。けれども、私たちが主の望んでおられるように祈らないから、主はお働きになることができません。主の御手がみじかすぎて助けることができないのではありません。すべての失敗の原因は、私たちの不十分な祈りの生活にあります。決して主のせいではありません。私たちはのんびりした状態から目をさませうではありませんか。

主の敵、また私たちの敵である悪魔は、私たちをめぐらにしようとしています。悪魔はなによりも祈りをにくむ者です。悪魔は私たちが主のために働きたいといくら思っても、まったく平気です。しかし祈りの生活だけは必死になってさまたげようとしています。悪魔は、私たちが自分の力にたよって主に仕えてもみのがないのでべつに反対しません。また悪魔は、私たちがいくら聖書を読んだり学んだりしても平気です。けれどもほんとうの祈りだけは、なんとしてでもさまたげようと必死になって抵抗するのです。

ある伝道者は、つぎのように言っています。「悪魔は私たちの努力を笑い、私たちの知恵をあざけります。しかしまことの祈りのまえには恐れおののくのです」と。祈りとは「主とのむすびつき」です。私たちが主とむすびついているかぎり、悪魔はどうすることもできません。

私たちが主のために、そしてひとのためにできるもつとも大きなことは祈りだということを忘れてはなりません。祈りによって、主のために、いわゆるご奉仕よりはるかに大きなことがなさ

れるのです。祈りによって私たちは、主の全能の力を経験することができます。私たちが祈るとき、全能の主は奇蹟を行なつてくださるからです。あとに残る実はいつも祈りの結果です。

はじめに見たように、ヨハネはそのころの信者たちの霊的な成長のために、つぎのように書きしめました。

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。

(Iヨハネ 5・14、15)

ここでヨハネは二回おなじ表現を使っています。すなわち「神は聞いてくださる」。「神は聞いてくださる」。これはすばらしい事実です。動かすことのできない、永遠の事実です。

「神は聞いてくださる」。

これこそ、私たちの「祈り」にたいする、主の大きなおやくそくです。

私たちはこのみことばからつぎのことを知ることができます。第一に、私たちは祈ることがゆるされています。そしてつぎに、私たちが祈ることは主によってかならず聞かれます。ですから私たちは祈るとき、私たちの祈りがすでに聞きとどけられているということを「まえもって確信することができます」のです。

祈つて主に求めなさい。そしてあなたが求めたことは、主がすでに聞きとどけてくださったと

確信して、感謝なさい。つまり、あなたは祈ったあとで、つぎのように言うことができます。「いま、問題は解決した。主は聞きとどけてくださった。ただ主にのみご栄光が帰されますように」と。そして「感謝の歌」をささげなさい。それはもはや戦いの叫びごえではなく勝ちどき、つまり「感謝の歌」なのです。

初代教会の信者たちはなぜ大きなよろこびに満たされていたのでしょうか。かれらはどうして、主に大きくもちいられたのでしょうか。このたいどをとったからです。

あるたとえばなしをしましょう。何年かまえ、私はキリスト集会のためにビデオカメラを手に入れたと思います、主に祈りました。そしてパンフレットを調べて、ある電器店に電話しました。店長さんは「ちょうど在庫があるので、あした配達します」とやくそくしてくれました。私はよろこんで娘のビッキーに「ほしいと思っていたビデオカメラが、いま手に入ったよ」と言いますと、彼女は「どこにあるの、見せてちょうだい」と言います。私は「ここにはないけれど、あした送られてくるよ」と答えました。それでもビッキーは「ほんとうにくるの?」と心配します。でも私は「だいじょうぶ、もう注文したから、あすくるのはまちがいない」と確信して答えました。おなじことが、私たちが学んでいる聖句のなかにもしるされているのではないでしようか。

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのであります。

この聖句で強調されていることは、「神が願いを聞いてくださるためには、まず祈る必要がある」ということです。この祈りの必要性について、つぎの五項目からごいっしょに考えてみましょう。

- 1 信仰をもつ者にあたえられたやくそく
- 2 みこころが行なわれるために祈る必要性
- 3 みこころの中心にいること
- 4 祈りへのはげまし
- 5 主のみこころへのぜったいの確信

1 信仰をもつ者にあたえられたやくそく

第一にこのみことばは、「信仰をもつ者にあたえられたやくそく」です。このやくそくはどのようなひとびとにあたえられたのでしょうか。その答えは、まえの13節を見るとよくわかります。私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。

(Iヨハネ 5・13)

これらのことが書かれたのは、イエス様を信じているひとびとが永遠のいのちをもっているこ

とを「確信させるため」だとあります。右の聖句で「よくわからせるため」となっているところは、原語では「確信させるため」となっています。

どうしたら私たちは「救われた」ことを確信することができるのでしょうか。なにかを理解するようになったからでしょうか。なにか感じるようになったからでしょうか。なにか経験するようになったからでしょうか。決してそうではありません。神のみことばによってのみ、確信することができます。

イエス様は私たちを救う力をおもちです。そして、救われたという確信をもたすものはみことばです。確信の土台となるのは、ただ聖書のみことばだけです。どうかご自分の感情に左右されないでください。主のみことばだけにたよってください。主の言っておられることだけを信じてください。私たちが考えること、思うことなどは、まったくたいせつではありません。たいせつなのは主が言われることだけです。みことばだけにたよってください。主のみことばは、永遠に変わることがありません。

ルカの福音書に、すばらしいことが書いてあります。

主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう。

(ルカ 1・45)

主によって語られたことは、いつかはわからないけれど、かならず、まちがいなく実現する、と信じきったひとはなんとさいわいなことでしょう、と書いてあります。ここには「思いこんで

しまった」とか「納得した」とは書いてありません。「信じきった」ひとなのです。「主がそうおっしゃるのだから、おかしいと思うけれど、信じられないけれど、それでも私は信じます。たいせつなのは主が言われることだから。主はやくそくしてくださいから感謝します。主はうそを知らないからだから、私は信じます」。このたいどをとるひと、とりつづけるひとはなんとさいわいでしょう。

では、このすばらしいやくそくはだれにあたえられているのでしょうか。13節には「信じているあなたがた」と書いてあります。つまりこのやくそくは、イエス様を信じ、イエス様を受け入れたひとびとすべてにあたえられているやくそくです。神の御子イエス様の御名を信じ、それによつて永遠のいのちをもつようになったひとびとのすべてにあたえられているやくそくです。これこそ、信仰をもつ者にあたえられたすばらしいやくそくです。

2 みこころが行なわれるために祈る必要性

第二に、この聖句のなかで、主の「みこころが行なわれるために祈る必要性」が強調されています。つまり主は私たちの祈りの答えとしてだけ、特別なことを行なつてくださるのです。

ひとはどうして主を信じるようになるのでしょうか。どうして救われるのでしょうか。どうして自分の信仰を水のバプテスマによつておおよけに証しすることができるのでしょうか。それは神の恵みの現われであり、神のなさった奇蹟であり、そしてなによりも、「主を信じるひとびとの祈りへの主のお答え」です。

またそれとは反対に「多くのことは起こり」ません。私たちは、この「起こらない」、つまり主が「してくださらない」ということをよくよく考えてみなければなりません。なぜ、なにことも起こらないのでしょうか。信者がすなおにみことばにたよらないからです。主のまえにすぎまつて祈り求めないからです。これらのことは、私たち人間の頭ではとうてい理解できないことです。しかしそれは、まちがいのない事実です。主は、私たちの祈りにたいする答えとしてのみ、多くのことをなしてくださいます。

ヤコブの手紙のなかに、たいへんきびしいみことばがあります。

…あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。

(ヤコブ 4・2)

ここに書かれているように、自分のものにならないのは、私たちが願わないからです。祈らないからです。主の大きなみわざを期待しないからです。つまりそれは主のせいではなく、私たちのせいなのです。エゼキエル書のなかにもおなじような意味のことが書いてあります。

…「わたし(主)はイスラエルの家の願いを聞き入れて、次のことをしよう。」…

(エゼキエル 36・37)

主、万物の支配者である主は、願いを聞き入れるとやくそくしていただくのです。主はわたしたちにこたえてあげたい、と思っておられるのですが、そのためには私たちがまず願い求め

なければなりません。主は私たちの祈りにこたえたくてしかたがないのです。主は私たちが祈り、主のみもとに来て願い求め、それにたいして主がこたえてくださり、あふれるばかりの祝福を私たちにそそいでくださることができる日を待つておられます。

3 みこころの中心にいること

第三に、私たちの願いが聞きとどけられるという確信に立つことができる土台は、私たちが、「みこころの中心にいること」です。主がかならず聞きとどけてくださるという確信をもちたいときには、私たちは主の「みこころの中心」にいないなりません。これは、たいへんたいせつなことです。ですから私たちが祈り求めるとき、いつも自分自身に問いかける必要があります。「私がほしいと思うものは、主のみこころにかなうものでしょうか」と。

私たちはどんなに大きなことでも願い求めることができます。しかし、みこころにかなっていないければ、もちろん主によつて聞きとどけられることはありません。私たちが祈るとき、その願っていることが私たちにたいする主のみこころであるかどうかを知らなければならぬのです。つまり「みこころの中心にいること」が必要です。

4 祈りへのはげまし

第四に、私たちへの主のやくそくは「祈りへのはげまし」です。すばらしいはげましです。このことを私たちははつきり頭に入れておきましょう。なぜならあるひとびとは、いままで学んで

きたみことばを、つぎのようにかつてに解釈しているからです。「私たちの祈りはみこころになつていなければなりません。しかし『なにがみこころであるか私たちにはわかりません』と。私たちがそのように考えると、悪魔はたいへんよろこびます。なぜなら「祈りは単純なものではなく、ひじょうに複雑でむずかしいものだ」と私たちが思いこんでしまうからです。主のおやくそくにささえられて幼子のように主に信頼し、主はやくそくされたことをかならずしてくださいと信じるかわりに、私たちはおそれとうたがいのなかにひきずりこまれ、ついには祈る勇氣さえなくなってしまうのです。このようにして悪魔は自分の目的を達成するのです。

主は祈りを複雑でむずかしいものにするのではなく、「祈りへと私たちをばげまして」くださるのです。私たちはもつともつと祈り、もつともつと多くを期待しなければなりません。それによつて私たちは、ますます多くのことをあたえられ、多くのことを経験するようになるのです。

5 主のみこころへのぜったいの確信

第五は、「主のみこころへのぜったいの確信」です。

とてもたいせつなことがつぎのみことばのなかにふくまれています。それは「私たちが確信をもつことができる」ということ、また「主が祈り求められたものをかならずあたえてくださる」ということです。すなわち主のみこころにたいする絶対的な確信をもつことが可能です。初代教会のひとつとはこの確信をもっていました。

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるという

こと、これこそ神に対する私たちの確信です。

(Iヨハネ 5・14)

初代教会のひとびとはもちろん自分の聖書を持っていませんでした。けれどもかれらは耳で聞いたことばに、すなおにたよったのです。かれらは確信に満ちたひとびとでした。

私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。

(Iヨハネ 5・15)

私たちは「知る」、つまり私たちは「確信している」。この確信はどのようなたがいをさしはさむよちもありません。「主が私たちの祈りをかならず聞いてくださる」ということは、はじめから決着のついたことであり、百パーセントたしかなことなのです。

イエス様はこの地上におられたとき、いつもこの確信をもっておられました。ヨハネの福音書の11章には、ラザロの死と復活について述べられています。

イエス様がベタニヤにつかれたとき、ラザロはすでに墓のなかに入れられて四日もたっていました。けれどもイエス様はラザロをよみがえらせたいとおっしゃり、墓をふさいでいる石をとりのけるようにと命じられました。ラザロの姉妹のマルタは言いました。「主よ、もう臭くなっております。四日になりますから」。するとイエス様は「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか」とおっしゃり、そのあと、イエス様は父なる神を見あげてつぎのように祈られたのです。

「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。」

(ヨハネ 11・41)

これは、ほんとうの確信、信頼、信仰に満ちたみことばです。いいかえるとイエス様はつぎのようにおっしゃったのです。「わたしは父なるあなたが、いつもわたしの願いを聞いて、かなえてくださることをすこしもうたがわず、確信しています。わたしはあなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っています」と。

イエス様はなぜこの信頼、この岩のように動かない「ぜったいの確信」をもっておられたのでしょうか。この確信の基礎はつぎのようなものでした。「わたしは父のみこころになつたことを祈りました。わたしの願い求めたものは父のみこころそのものだから、かならず聞かれます」。イエス様は、父なる神が望んでおられるものがなにかをよくごぞんじでしたから、主がしめされたみこころにかなう祈りをなさいました。ですからイエス様は祈りが聞きとどけられることを確信しておられたのです。

主は、私たちもまた主のみこころにたいするぜったいの確信をもち、そのみこころに従って祈り、その祈りが聞きとどけられるのを経験することを、ここから望んでおられます。

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。

(Iヨハネ 5・14)

「主は聞いてくださる」。これこそ、あらゆる時代の信者の確信です。

われわれの主はおしではありません。聖書のみことばをとおして語られる主のおやくそくは、ぜったいに確実です。おやくそくにたよる者は主の偉大さ、主のすばらしさを新しく経験することが出来ます。

われわれの主はめくらでもありません。どのようにかくれているものでも、どんなに小さなものでも、すべて見とおすことができるおかたです。幼子のような信仰があるところには、主は奇蹟をなしてくださり、ご栄光を現わしてくださいなのです。主はすべての人間のすべての必要を知っておられ、すべての必要を満たすことがおできになります。

また、われわれの主はつんぼではありません。みこころに従おうとする者、みことばにだけたようろうとする者は、祈りが聞きとどけられることを経験します。主はわれわれの祈りをかならず聞いてくださるおかたです。

私たちの主は、死んだかたではなくいまも生きておられ、ご自身を啓示してくださるおかたです。ですから私たちの確信は、そしてほこりは、「主は聞いてくださる」ということです。私たちがいくら弱くても、みじめでも、そんなことはいっさい関係ありません。「主はかならず聞いてくださる」のです。

∴「こうしてわたし（主）をためしてみよ。——万軍の主は仰せられる。——わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」

（マラキ 3・10）

主に愛されている
ひとびとの祈り

▼沖縄よろこびの集いで結婚式をあげた知念さんご夫妻。車椅子の宮岡さん、玉城さんを囲んで。



このマリヤは、主に香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリヤであつて、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送つて、言つた。「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病氣です。」イエスはこれを見て、言われた。「この病氣は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによつて栄光を受けるためです。」

(ヨハネ 11・2-4)

この章のテーマは、「主に愛されているひとびとへの祈り」です。

ラザロはうたがひもなく、自分の姉妹たちによつて愛されてきました。しかしこの聖句には、「主イエス様がかれを愛された」ことが明確に語られています。

「主よ。ごらんください。あなたが愛しておられる者が病氣です」。いいかえれば、

「主よ。ごらんください。あなたが、いままでずっと愛してくださった者が、いま病氣です」
「あなたの愛しておられる者のために、私たちは祈っています」と。

この章のテーマはまた、「苦しむひとのための祈り」、「家族の一員のための祈り」と言いかえることもできます。

ラザロの姉妹たちは、イエス様のところに使いをおくつて、ラザロの病氣をイエス様に知らせました。これこそが「祈り」です。主イエス様に悩みをつたえ、たすけを願ひ求めることこそが「祈り」です。

私たちはみな、マリヤとマルタとおなじような苦しみや悲しみをすでに経験したでしょうし、

またこれからも経験することでしょう。私たちの愛するひとが病気になり、苦しむことがあるでしょう。こういうとき、私たちはまず祈らなければならない、ということははっきりしています。しかしそのとき、私たちはふたつの問いに直面します。

I 私たちは、どのように祈ればよいか

II 私たちは、どのようなお答えをいただくか

このふたつの問いについて、これからごいっしょに考えてみましょう。

I 私たちは、どのように祈ればよいか

まず、「どのように祈ればよいか」については、五つに分けることができます。

1 深い苦しみのなかから

2 ところをひとつにあわせて

3 主をおおぎ見ながら

4 極度に緊急で

5 ところから服従しながら

1 深い苦しみのなかから

マリヤとマルタは、自分の兄弟ラザロのために、どのように祈ったのでしょうか。彼女たちは「深い苦しみのなかから」祈りました。彼女たちはたいへんこまった状態におかれ、どうしたら

いいのかわかりませんでした。彼女たちはなにをしたらよかったですか。彼女たちはたつたひとつ、ただしいことをしました。彼女たちはイエス様に使いをおくったのです。彼女たちは、イエス様だけはまだ助けてくださることを、またそれがおできになることを知っていました。このことをまず、イエス様につたえなければなりません。

祈ることができること、どんな困難だろうがそれをもつてイエス様のもとに行けることは、ほんとうに大きな特権です。「絶えず祈れ」。これが主のご命令です。私たちが苦しんでいるときや、逃げ道がみつからないときだけでなく、すべてがうまくいっているとき、悩みや苦しみがないうときにも祈らなければなりません。

私たちは祈ることによって、主との深い交わりを求めなければなりません。主はたびたび、私たちがもつと主のみもとに近づくために、悩みや苦しみをおあたえになります。私たちは主のみもとに行くことができるだけではなく、主のみもとに行かなければなりません。これいじようにたいせつなことはありません。

マリヤとマルタは深い苦しみのなかから祈りました。私たちもまた、愛するひとびとが苦しみのなかにいることを知っています。そのひとびとのために、私たちは真剣に主に祈っているでしょうか。

2 こころをひとつにあわせて

マリヤとマルタは、自分の兄弟ラザロのためにどのように祈ったのでしょうか。彼女たちは

「ここをひとつにあわせて」祈りました。彼女たちは、ただ深い苦しみのなかで祈っただけでなく、「ここをひとつにあわせて」祈ったのです。さきほどの聖句のなかにつぎのように書かれています。「そこで姉妹たちは、イエスのところに使いをおくって、言った」と。マリヤだけではなく、またマルタだけでもなく、「ふたり」がイエス様のもとに使いをおくったのです。それは「ここをひとつにあわせた願いであり祈り」だったのです。このような「ここをひとつにあわせた祈り」にたいしてイエス様は、特別のやくそくをしてくださっておられます。

「もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。」
(マタイ 18・19)

マリヤとマルタがしたのは、まさにこのとおりだったのです。彼女たちはここをあわせて主にお願ひすることに決め、それを実行しました。ふたり、あるいはそれ以上のひとびとがここをあわせて主に願ひ求めると、その祈りには特別な力があることがやくそくされています。そして、マリヤとマルタの祈りは、やがて大きくこたえられたのです。

初代教会は祈る教会でした。ですから、初代教会のひとびとは、ここをあわせていっしょに祈ることによって、おどろくべき主のお答え、主のたすけをかず多く経験したのです。ちよつとべつのところを見てみましょう。

こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。

(使徒 12・5)

この熱心な祈りにたいする主のお答えはどのようなものだったでしょうか。ペテロをつないでいたくさが落ち、牢の番兵たちはなにも気がつかず、鉄の門がひとりでに開いたのです。

私たちの愛するひとびとのなかには、悪魔に束縛され、罪の深みに沈みこみ、自分のことだけを考え、そのために不幸せになっているひとはいないでしょうか。

「こころをひとつにあわせて」祈れば、主からの大きなたすけがいただけます。あなたはそのため、だれかとこころをひとつにあわせて祈りたいと思わないでしょうか。

3 主をおおぎ見ながら

マリヤとマルタはどのように祈ったのでしょうか。「主をおおぎ見ながら」祈りました。彼女たちは、イエス様のもとに使いをおくり、つぎのように言わせました。

「主よ！」この祈りは、「主に向けられている祈り」でした。

あなたは、祈りはすべて主に向けられていてとうぜんだと思われるかもしれませんが、そのとおりです。しかしよくある祈りは、まず「自分でたすけをつくりだそう」という祈りです。

病気のとき医者のもとに行つて薬のたすけを求めることはまちがってはいません。主は、医者も薬もちいることがおできになります。しかしこまったときにまず人間のたすけを期待したり、主にすべてをあけたさなないことはまちがっています。ほんとうの祈りとは「あなたの悩みをもつて主のみもとに行き、主のまえにこころをそそぎだし、すべてを意識して主の御手にゆだねる」ことです。主は全能の神です。主はラザロのよみがえりをおして、ご自身の全能を証明

なさいました。主はまた、すべてをごぞんじであるおかたです。このこともおなじヨハネの11章であきらかにされています。イエス様は、ラザロが死のやまいにあることをごぞんじでした。

あなたの愛するひとびとのなかに、苦しんでいるひと、悩んでいるひと、将来に失望しているひとはいないでしょうか。主をあおぎ見ることはあなたの義務です。主はあなたの叫びを待っておられます。自分自身のことにあまりにもいそがしすぎて、隣人の苦しみ、愛するひとびとの苦しみを見ることができず、そのまま見すごしてしまうひとはわざわいです。

ここですこし、いままでいっしょに学んできたことを整理しましょう。マリヤとマルタの祈りはまず「深い苦しみのなかから」でてくる祈りであり、「こころをひとつにあわせた」祈りであり、「主をあおぎ見ながら」の祈りでした。ではつぎに四つめの項目に進みましょう。

4 極度に緊急で

マリヤとマルタは、ラザロのためにどのように祈ったのでしょうか。彼女たちの祈りは「極度に緊急を要する」祈りでした。彼女たちは主イエス様のもとにいそいで使いをおくりました。

「主よ。あなたの愛しておられる者が病氣です」。

「主よ。かれは死のうとしています」。

「主よ。いそいでください」。

主は、このようなたすけを求められたことを、きつとおよろこびになったはずです。それは彼女たちが主にしっかりとむすびついていることのしるし、信頼のしるしです。そしてそれはどう

じに、自分の無力さの告白でもあります。

「主よ。私たちはもうおしまいです。人間的に見るならまったく絶望です。しかし、あなたなんでもおできになり、私たちはあなたのたすけを待ち望みます。私たちはあなたに信頼し、あなたは決して私たちを失望させるようなことはなさいません」。

私たちもまたこのようないで、主のみもとにかけつけることができます。

「主よ。あなたは私の苦しみをよくごぞんじです。不信仰な夫のこともよくごぞんじです。まだ救われていない私の子どものこともよくごぞんじです。あなたは私自身をごぞんじであり、いままであなた様にすべてをうちあけ、たよつてきた私をもよくごぞんじです。主よ。いそいでください。私は信頼しております。どうかみこころを現わして、あなたの全能をおしめしてください」。

5 こころから服従しながら

マリヤとマルタは、主に「こころから服従しながら」祈ったのでした。彼女たちは「私たちの兄弟のラザロをどうしてもいやしてください」という願いをもって、イエス様のみもとに使いをおくったではありませんでした。もちろん彼女たちは、イエス様にはそれがおできになるだろうと期待していました。しかし彼女たちは、つぎのように言っただけでした。

「主よ。ごらんください。あなたが愛しておられる者が病氣です」と。

ここでは「主よ」ということばがたいせつです。このことばによって、彼女たちの主への「服

従」が証しされています。

マリヤとマルタは兄弟のラザロをいやすことを、主に命令したりはしませんでした。彼女たちは、どのような代価をはらってもラザロがいやされてほしいとは望まなかったのです。彼女たちはつぎのように言いました。

「主よ。あなたが愛しておられる者が、いま病氣です。私たちはかれをあなたの御手にゆだねます。あなたのお好きなように、みこころのとおりになさってください」と。

これとまったくおなじことを、私たちもまたしなければなりません。私たちが重荷を負い、配慮している愛するひとびとを、イエス様の御手にゆだねなければなりません。イエス様の御手にゆだねられたひとの悩みは、すべて解決されます。私たちが主にすべてをゆだねたとき、ほんとうの安心と平安をいただくことができます。

主は行動してくださいます。私たちは愛するひとびとについていろいろとところをくばりますが、それ以上に、主ご自身がかれらのために最善をつくして配慮してくださいます。

私たちは主に、私たちの悩みをうちあけます。それから私たちは、すべてを主におゆだねします。これこそ、マリヤとマルタのたいどだったのです。それは信仰と信頼のたいど、「ここから服従した」たいどでした。彼女たちは主がラザロをいやすことがおできになることを知っていました。聖書のすこしあとの部分で、彼女たちはつぎのように言っています。

マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにいてくださったのなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」

(ヨハネ 11・21)

マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかる、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」

(ヨハネ 11・32)

マルタとマリヤは、まったくおなじことを祈ったのです。「主よ。あなたにはすべてがおできになります」。彼女たちは、イエス様がラザロを愛しておられることを確信していましたから、「主は、どんなまちがいもなさらない」ことをよく知っていたのでした。私たちもまた、このような信頼をもっていなければなりません。

私たちは、私たちの祈りにたいして「主がなにをなすべきか、どのように行動すべきか、また、どのようにこたえるべきか」を、主に命令する権利をもっていません。私たちの主は生きておられるおかたですから、主はかならず私たちの祈りにこたえてくださいます。これはうたがいのない事実です。しかし私たちは、あまりにもちかくしか見えず、視野もせまく、頑迷で頑固です。ですから私たちは、主がなにを予定しておられるか、どのように働こうとなさっておられるか、まったくわからないのです。ですから私たちは、理解できようができませんが、すべてをみこころとして単純に受け入れなければなりません。主がなさることは、いつも私たちに最善のことであり、それをとおして主の御名があがめられます。ですから私たちは主にたいして「まったく服従しながら」祈るといいたいをとらなければなりません。

私の友人のひとり、いつもつぎのように言っています。

「主は、私がほしいものではなく、私が必要とするものをくださいます」。

つまり私たちは、いつでも必要なものはかならずあたえられるのです。「たしかに私は、必要なものをあたえられている」ということを、しずかに考えてみてください。

私たちはみな多くの苦しみ、重荷を必要とします。さもなければ私たちは夢の世界に生きるようになり、決して「祈る」ことをしなくなるでしょう。そして私たちは、祈らなければ主との交わりをもつことができず、主のたすけも、救いも、解放も経験することができません。

マリヤとマルタは、ほんとうにこまっていました。彼女たちはどうしたらいいのかわかりませんでした。ただひとつただしいことをしました。彼女たちは、イエス様に使いをおくったのです。イエス様は彼女たちがこまっていることを聞かれました。そしてイエス様がそのことを聞いてくださった以上、それは解決されたとおなじことでした。イエス様はそれを解決することがおできになるおかたです。あなたに苦しみや困難がせまりあなたを圧迫したとき、どうかイエス様のところへ行き、イエス様に祈ってください。

私たちは、どのように祈ればよいのでしょうか。その答えをもういちど整理しておきましょう。

- 1 深い苦しみのなかから
- 2 ところをひとつにあわせて
- 3 主をおおぎ見ながら
- 4 極度に緊急で
- 5 ところから服従しながら

あなたの愛するひとびとを、主のところにつれて行ってください。

そのひとびとを主の御手にゆだねましょう。

主は最善をなしてください。主はご栄光を現わしてください。

Ⅱ 私たちは、どのようなお答えをいただくか

ではつぎに、祈ることによって「私たちは、どのようなお答えをいただくか」を考えてみましょう。主は生きておられ、そして「私たちの祈りの聞き手」です。マリヤとマルタは、兄弟のラザロのために祈りました。彼女たちは、主にとりなしの祈りをささげました。その結果、彼女たちはなにを経験したのでしょうか。それをつぎの五つにわけて見てみましょう。

1 イエス様は、聞いてくださる

2 イエス様は、こたえてくださる

3 イエス様は、あがめられる

4 イエス様は、特別な祝福をあたえてくださる

5 イエス様は、かぎりない恵みをあたえてくださる

1 イエス様は、聞いてくださる

この章の最初に見た聖句のなかほどに「イエスはこれを聞いて、言われた」とあります。イエス様は真剣に聞いてくださいます。イエス様は決して私たちに無関心ではありません。イエス様

は私たちが考えている以上に私たちのことを心配してください。イエス様は私たちの悩みや願いを知ってくださいさるだけでなく、それらの問題をご自分の御手のなかにいれてくださるのです。聖書はいたるところで、私たちが「すべての重荷を主にうちあけるように」とはげまし、またなんども私たちが「すべての重荷をもって主のみもとに行くように」と命令しています。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

(ピリピ 4・6)

私たちが「祈りと願いによって、私たちの願いごとを神に知っていただく」とするとき、主は真剣に耳をかたむけてくださいます。イエス様はマリヤとマルタの願いを真剣に聞いてくださったのでした。

2 イエス様は、こたえてくださる

イエス様は、マリヤとマルタの願いを「聞いてくださり」、知ってください、それからすべてを忘れてしまわれた、というのではなく、ちゃんと「こたえてくださった」のです。

しかしイエス様のお答えについては、つぎのことをよく注意しなければなりません。

彼女たちのところからの祈りにたいして、イエス様は彼女たちが望み、期待したようにはこたえてくだされませんでした。イエス様はラザロの死をとめるようなことをなさらず、ラザロが死ぬことをゆるされました。イエス様にとって、ラザロの死をとめることはいともかんたんだった

にもかかわらずです。これはたいせつな点です。

いそいでイエス様に使いがおくられ、ラザロが重い病氣であることが告げられたあと、イエス様は決してことをいそいで行なおうとはなさいませんでした。イエス様は、父なる神のさだめられたときをお待ちになりました。イエス様は、なにをすればよいか、父なる神がさだめられたときがいつなのかを確信できるまで、時間を必要となさいました。

そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。

(ヨハネ 11・6)

イエス様がすぐに行動なさらなかったことは、私たちの頭ではまったく理解できません。なかには、愛がなく、無責任で、ひどい、と言うひとがいるかもしれません。しかし私たちの主は、なにを、いつ、しなければならぬかをよくごぞんじです。「主もときにはまちがいをする不完全なものだ」という悪魔のささやきを、決して信じてはなりません。

そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいます。さあ、彼のところへ行きましょう。」

(ヨハネ 11・14、15)

イエス様は、マリヤとマルタの祈りを聞きとどけてくださいました。しかしそれは、彼女たち

が期待したものとちがっていました。イエス様のお答えは、いつも私たちが考えるよりもはるかによいものです。私たちのイエス様はかならずこたえてくださいます。イエス様はそうせざるをえないのです。なぜならイエス様は、多くのおやくそくによつてそうすることを義務づけられているからです。

3 イエス様は、あがめられる

ラザロのやまいという知らせがつたえられたとき、イエス様はすぐにこうおっしゃいました。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。」

(ヨハネ 11・4)

現在も私たちの主は、そのころとまったくおなじように働いておられます。私たちは、苦しみや悩みをあたえられるかもしれませんが、それによつて、私たちはいつそう主の御顔を求め、祈るのです。

私たちの祈りは、私たちが望んだのとはまったくちがったかたちでこたえられます。私たちの苦しみがとりのぞかれず、問題が解決されないうまま、それでも主を信頼しきつて主にあつてよろこぶことができるなら、それは人間の力ではできないことであり、それこそ主からのばかりしれないおくりものです。そしてそれが私たちの祈りの聞きとどけなのです。私たちの祈りは、主イエス様があがめられるために、主イエス様があがめられるかたちでこたえられるのです。

さて、イエス様がベタニヤにはいられてのち、ラザロのよみがえりの直前につぎのようにマルタにおっしゃいました。

「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」

(ヨハネ 11・40)

さらにイエス様は父なる神につぎのように祈られたのです。

イエスは目を上げて、言われた。「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っております。しかしわたしは、回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、こう申したのです。」

(ヨハネ 11・41、42)

イエス様は父なる神に祈られたあと、大声で叫びました。「ラザロよ。でて来なさい」。すると死んでいたひとがでて来ました。

そこで、マリヤのところに来ていて、イエスがなさったことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた。

(ヨハネ 11・45)

祈りはこのように、「主イエス様があがめられる」ために、「主イエス様があがめられる」かた

ちでこたえられます。

4 イエスは、特別な祝福をあたえてくださる

イエスは特別なしかたで祝福してくださいます。

マリヤとマルタは言葉では言いあらわせないほど苦しみました。しかし彼女たちは主に祈り、主は彼女たちの祈りをむだにはなさいませんでした。主はこたえてくださったのです。死でさえも、獲物を手ばなさなければなりませんでした。

彼女たちは、もはやいぜんとちがってまったく変えられてしまいました。「主のみこころだけがつねに最善である」ということを、彼女たちにうたがわせるような力は、もはやなにひとつ存在しなかったでしょう。

私たちが試練に会い、困難を経験し、どんなにけんめいに考えても多くのことがまったく理解できないとき、その悩みと苦しみをおして「もつともつと主に近づいていく」ということがたいせつなのです。そしてこれこそが主の願いなのです。

あるクリスチャンはつぎのように祈りました。「主よ。わたしは病氣です。しかし、あなたをもつとよく知るまでは、もつとあなたを愛するようになるまでは、どうかこの病気をなおさないでください」と。私たちは試練のとき、このようなたいどで祈ることができればさいわいです。私たちが主のまえにこのようなたいどをとるとき、考えられないようなすばらしい祝福が、悩みと苦しみをとおしてながれでてくるのです。

主は私たちに、特別な祝福をあたえたいと思っておられるので、特別におもい重荷をおあたえになるのです。

5 イエス様は、かぎりない恵みをあたえてくださる

…私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に…栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。(エペソ 3・20、21)

この聖句を読むと、イエス様は「願うところ、思うところのすべてをこえてゆたかにほどこしたい」と願っておられることがよくわかります。

ラザロのよみがえりをとおして、主は無限の恵みをあたえてくださいました。

ラザロはほうむられました。なみだがつぎつぎとながされました。とつぜん起こったこの悲しみと苦しみは、耐えられないことのように思われました。しかし祈りにこたえて、主は働いてくださいました。イエス様の力あることばによって、死んでいた者が墓からでてきました。主はマリヤとマルタが考えたこととはちがったかたちでこたえてくださいました。私たちもまた主がこたえてくださること、それもかならずしも私たちが願ったとおりでなく、ちがったかたちでこたえてくださることをたえず経験しています。

しかしイエス様のおこたえは、どれもみな「かぎりない恵み」なのです。主は、主に栄光が帰され、多くの未信者が主ご自身を知るようにと、つねに祈りにこたえてくださいます。

私たちが、主が愛しておられるひとのために祈るとき、主がもとどおりにしてください、なおしてください、祝福してくださいすることはすばらしいことかもしれません。しかし、ときには主があえてなおそうとはなさらず、恵みをもってそのひとを天に召し、主のみもとにつれて行かれることがあるかもしれません。ほんとうはそのほうがはるかにすばらしいことではないでしょうか。

∴私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。

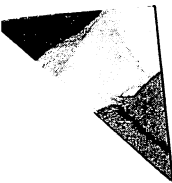
(ピリピ 1・23)

主を信じる者が召されて主のみもとに行くとき、なみだがながされることでしょう。しかしそれは、召されたひとにふさわしいことではありません。というのには、イエス様とともにいるのは、この世にあるよりはるかにすばらしいことであり、うらやましがられてとうぜんのことだからです。たしかに私たちは、しばらくのあいだそのひとを見るのができなくなります。そのひとは私たちよりひと足さきに主のみもとに行ったのですが、やがて私たちも天でその召されたひとといっしょになり、ただ主だけをたたえ、主をあがめるようになります。主のみこころはつねに最善です。そして主は、ひとりひとりのために、最善だけを考えておられます。

「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る。」

(ヨハネ 11・40)

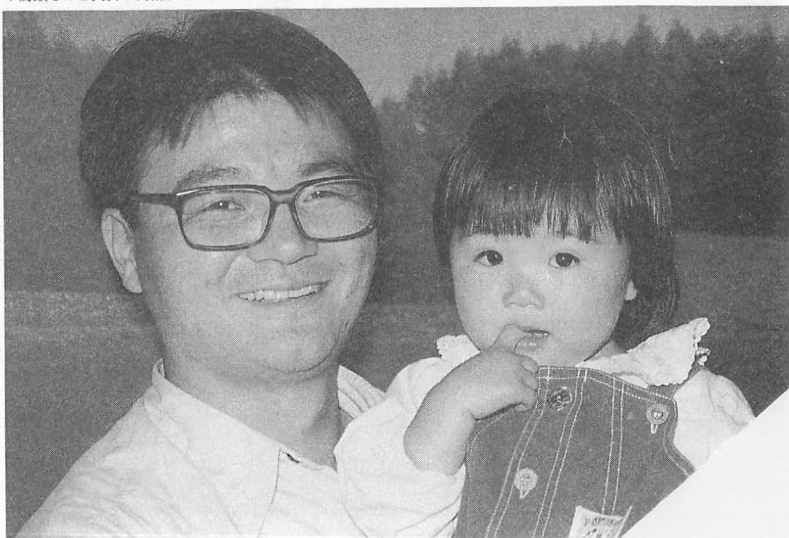
神の栄光の啓示、これこそが、いちばんたいせつなことなのです。





▲札幌よろこびの集いで菅原さんご一家とベックさん、山森さん、和歌山さん。

▼^{サンゴ}鷺頭さんと^{ミズ}長女の実結ちゃん。



祈りびととしてのイエス様

しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈っておられた。

(ルカ 5・16)

…キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。

(Iペテロ 2・21)

「祈りびととしてのイエス様」。これがこの章の主題です。

私たちはきょう、祈りびととしてのイエス様のことを、よく学んでみたいと思います。とくに、ルカがイエス様の祈りの生活について報告していることを、よく読んで考えてみたいと思います。ルカは「主イエス様の人の子としてのすがた」を克明に記録しています。イエス様はまことの神だったのであり、そしていまもまことの神です。にもかかわらず、イエス様は、私たちとおなじ人間のかたちをとってこの地上に来てくださいました。ですからイエス様は、この地上でのご生涯のあいだ「神の子」として、また「人の子」としてしるされているのです。「まことの神であり、しかも、まことの人間」、また「まことの人間であり、しかも、まことの神」。このことは私たち人間の理性をもってしては理解できないことです。しかしそれは否定できない事実です。医者であるルカは、医学的に不可能なことである「処女降誕」について、くわしく記述しています。この理解できない事実を証明するものは、主イエス様の「罪をおかすことができない、神の性質」でした。

…善を行なう人はいない。ひとりもない。

(ローマ 3・12)

私たちの生まれつきの性質は、「罪をおかすことしかできない、罪の性質」であるのにたいして、イエス様の性質は、「罪をおかすことができない、神の性質」でした。

さて、私たちはこの章で「祈りびと」としてのイエス様をよく見て考えてみたいと思います。

「祈りびと」としてのイエス様は、「人間となられた神」です。イエス様は「神」としては祈る必要がまったくありませんでした。しかしイエス様は、ご自分の自由意志で人間としてこの地上に来てくださいました。この地上での歩みのあいだ、イエス様はご自分を、意識して父なる神により頼むようになされたのです。

「人間になる」ということは、イエス様にとって「わたしはより頼みたい」ということを意味していました。「わたしの全生涯は、父なる神に完全により頼みます。わたしがすることのすべてを、父なる神に完全により頼みます。わたしが語るすべてのことを、父なる神に完全により頼みます」。これが主イエス様の、この地上でのご生涯をつらぬきたいだったのです。

「わたし（イエス様）は、自分からは何事も行なうことができません。ただ聞くとおりにさばくのです。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたし自身の望むことを求めず、わたしを遣わした方のみこころを求めるからです。」
(ヨハネ 5・30)

イエス様は、より頼みたいと思われたから、祈ることが必要だったのであり、それゆえにイエス様は祈られたのです。

ルカの福音書のなかで、主イエス様は七回、祈りびととして私たちのまえに登場なさいます。

これからその七つの箇所を、つぎの四つの質問について考えながら読んで、「祈りびととしてのイエス様」はどのようなおかたであつたかを学んでみましょう。

I 「いつ」、イエス様は祈られたのでしょうか。

ルカ 3・21、22 ルカ 5・12、16

ルカ 6・12、13

II 「なぜ」、イエス様は祈られたのでしょうか。

ルカ 9・18、20 ルカ 11・1

III イエス様の祈りは「なにをもたらしした」のでしょうか。

ルカ 9・28、29

IV イエス様は「どのようなところで」祈られたのでしょうか。

ルカ 22・41、42

I 「いつ」、イエス様は祈られたのでしょうか

最初の質問は、「いつ、イエス様は祈られたか」というものです。私たちはルカの福音書のなかに、イエス様が祈られた三つの異なった場面を見て、この質問の答えを知ることができます。その答えとは、つぎのものです。

1 聖霊がくだるまえ

2 おおやけの奉仕のあと

3 重要な決定をするとき

1 聖霊がくだるまえ

イエス様のうえに聖霊がくだるまえに、イエス様は祈られました。

さて、民衆がみなバプテスマを受けていたころ、イエスもバプテスマをお受けになり、そして祈っておられると、天が開け、聖霊が、鳩のような形をして、自分の上に下られるのをご覧になった。また、天から声がした。「あなたは、わたし（主）の愛する子、わたしはあなたを喜ぶ。」

（ルカ 3・21、22）

私たちは、ここにしるされたバプテスマが、イエス様のおおやけのご奉仕の出発点であったことを知っています。イエス様が洗礼を受けるときに祈っておられると、祈りのとちゅうで聖霊がご自分のうえにくだるのをごらんになりました。そのち、イエス様はナザレの会堂でつぎのように証しをしておられます。

「わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。」

（ルカ 4・18）

この「主の御霊」によって、イエス様はこの地上での日々をおくられ、この「主の御霊」によって、イエス様は父なる神からゆだねられ任されたつとめをはたすことがおできになったのです。ここでも「祈り」がたいへん重要です。イエス様は「祈りながら」御霊によって奉仕のための力を得られたのです。ペテロはつぎのようにしるしています。

それは、ナザレのイエスのことです。神はこの方に聖霊と力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたので、巡り歩いて良いわざをなし、また悪魔に制せられているすべての者をいやされました。

(使徒 10・38)

イエス様は、聖霊がご自身のうえにくだられたあとで、つまり聖霊によって力づけられたあとではじめて、ご奉仕を開始されたのです。初代教会のひとびともまた、聖霊によって力づけられたあとではじめて、イエス様のよみがえりを証しするご奉仕を開始しました。私たちもまた、聖霊に満たされることなしに、主に仕えることができると思うなら、それは大きなあやまりです。もし私たちが、聖霊に満たされることなしになにかできるなら、私たちはそれを自分の力でやったこと、自分の名誉にしてしまい、きつとごう慢になることでしょう。しかし、主はそのようなことを決しておゆるしにはなりません。私たちがご奉仕について学ばなければならない、最初のいちばんたいせつな教訓はつぎのことです。

すると彼は、私に答えてこう言った。「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によつて。』と万軍の主は仰せられる。」

(ゼカリヤ 4・6)

主に仕え、実を結ぶということは、自分の力ではだれひとりとしてできることはありません。聖霊に満たされることなしには、なにひとつできません。聖霊に満たされることは、どのように

して起くるのでしょうか。イエス様は祈られ、御霊がくだりました。祈ることは「より頼みたい」ということの表現です。主により頼みたいと思うひとは聖霊に満たされるのです。私たちはただ習慣的に祈るのでしょうか。あるいは私たちの祈りは「より頼みたい」という私たちの意欲のあらわれなのでしょうか。これはたいせつな点です。

「してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っていますのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありますよう。」

(ルカ 11・13)

ここに書かれているとおり、私たちは救われた者として、聖霊が「あたえられる」ために祈る必要はありません。なぜなら聖霊は、もうすでにあたえられているからです。しかし私たちは、聖霊に「満たされる」ことを願い、祈らなければなりません。主から力をきせられること、つまり聖霊に満たされることは、キリスト者にとって一瞬一瞬、どうしても必要なことです。ですから、祈りはどうしても必要なのです。

そして私たちにとって必要なことは、主のみまえにしずまること、主とひとつになること、主がなさりたいことを知ること、主のみこころと一致すること、主にまったくゆだねること、主によって自由にもちいていただくことです。私たちは決して自分の力で主に仕えようとしてはなりません。なぜならそれはまったくおろかなことであり、時間と労力の浪費にすぎないからです。

2 おおやけの奉仕のあと

「いつ」、イエス様は祈られたのでしょうか。この質問の二番めの答えは、「おおやけの奉仕のあとでイエス様は祈られた」というものです。ルカの福音書のつぎの箇所を見てみましょう。

さて、イエスがある町におられたとき、全身らい病の人がいた。イエスを見ると、ひれ伏してお願ひした。「主よ。お心一つで、私はきよくしていただけます。」イエスは手を伸ばして、彼にさわり、「わたしの心だ。きよくなれ。」と言われた。すると、すぐに、そのらい病が消えた。イエスは、彼にこう命じられた。「だれにも話してはいけない。ただ祭司のところに行つて、自分を見せなさい。そして人々へのあかしのため、モーセが命じたように、あなたのきよめの供え物をしなさい。」しかし、イエスのうわさは、ますます広まり、多くの人の群れが、話を聞きに、また、病気を直してもらいに集まつて来た。しかし、イエスご自身は、よく荒野に退いて祈つておられた。

(ルカ 5・12-16)

「多くのひとびとが集まつてきた。しかし、イエス様ご自身は、よく荒野にしりぞいて祈つておられた」とあります。このようにイエス様は「おおやけの奉仕のあと」でよく祈つておられたのです。もちろんイエス様は、あらゆる時代をとおしてのもっとも偉大な祈りびととして、いつも祈つておられました。イエス様はあらゆるご奉仕のまえにも、あとにも祈られました。しかしここではとくに、イエス様が「ご奉仕のあとに」よく祈られたことに注意を向けたいと思います。イエス様のおおやけのご奉仕は、おもに病人をいやしたり、悪霊を追ひだしたり、福音を宣べ

伝えたりすることでした。病人はだれでもイエス様によっていやされました。悪霊につかれた者はだれでも解放され、福音を宣べ伝えることによって多くのひとびとが救われました。そのようなご奉仕のあとで、イエス様は祈られたのです。なぜでしょうか。それについては三つのことがあげられます。

はじめに、イエス様にとってこの世のひとびとの罪と接触することは、こころのおもい、意気消沈することでした。なぜならひとびとはみな、自分自身のことだけしか考えなかったからです。しかしイエス様は、祈ることによってふたたび自由に呼吸することができ、こころからよろこぶことがおできになったのです。

つぎに、病人がいやされ、悪霊が追いだされ、福音が宣べ伝えられるとき、力が失われます。疲労困憊してしまいます。しかし祈ることによって、イエス様はたえず新しい力とよろこびを回復なさったのでした。

三番めには、ご奉仕によって評判になるというわながあります。もちろんイエス様は、決して中心に立ちたいとはお望みになりませんでした。イエス様は決してご自分のための榮譽をおもとめになりませんでした。父なる神のご計画だけが、イエス様によって実現されるべきでした。ですからイエス様は、いつも父なる神にさげどころを求め、祈っておられたのです。

私たちもまた、まいにちいろいろなひとびとに会い、多くの罪と接触します。私たちはそれによって多くのひとびとの苦しみを知るように導かれます。イエス様は私たちが悩む者とひとつになること、ともに悩むことを望んでおられます。それはたいへんこころのおもい、意気消沈させ

られる体験です。しかし祈りによって、私たちはあらたな希望を得ることができるのです。

私たちはしばしば精神的、また肉体的に、力がつきはててしまいます。というのは、私たちの戦いは悪魔の力にたいする戦いだからです。この戦いはとてもたいへんな戦いです。というのは、悪魔がなかなかあきらめないからです。悪魔は死にもぐるいの抵抗なしには獲物を決して手ばなそうとしないからです。

ひとりのひとがイエス様の御名を呼び求めるようになると、悪魔にたいする大きな勝利となります。それは霊的な戦いです。この戦いは、ひじようにつかれる戦いです。しかし祈りによって、私たちはどのようなときにも、主から新しい力をいただくことができるのです。

ところが主が祝福し、私たちをもちいてくださったとき、「評判」という私たちをだめにしようとする悪魔のわなが待っていることに気をつけなければなりません。

D・L・ムーディーは主によつてもちいられた有名な伝道者だったのですが、かれはあるとき、福音を宣べ伝えたあと、あるご婦人から「あなたのおはなしはすばらしかった。うたがいもなく私がいままで聞いたうちで最高のメッセージでした」と言われたのです。するとムーディーは答えました。「悪魔も私におなじことを言いました」と。

「私はたいしたことをやった」と思いこむことはおそろしいわなであり、それを自分で信じこんでしまわないように気をつけなければなりません。というのは、主は、人間のほこりや人間のごう慢をおみとめになることにはないからです。高慢なひとはもちいられません。主は、人間が自分のために榮譽を得ることを決しておゆるしになりません。

しかしメッセージを語ってくださったかたに「主だけに感謝しましょう。私はあなたのために祈りました。そして主は祝福してくださいました」と言うなら、それは大きなはげましになることでしょう。みことばを宣べ伝えるすべてのひとは、そのようなはげましを必要としています。しかし、たいていのばあい、つぎのようなことが言えます。私たちがよいご奉仕をしたと思うときは、じつさいはたいしたことがなく、ほとんどのなにもあとに残りません。しかし、私たちがうまくいかなかった、失敗したと思うとき、あとになってゆたかな実が見られるようになるのです。あらゆるご奉仕のあと、つぎのように祈ることは、いつもたいせつです。

「主よゆるしてください。きっと私はあなたのさまたげになってしまったことでしよう。しかし、御名のゆえに、福音を聞いたすべてのひとびとのゆえにのぞんでくださり、ひとりひとりに語りかけてください。御名のゆえに、どうか祝福してください」と。

3 重要な決定をするとき

「いつ」、イエス様は祈られたのでしょうか。第三の答えは「重要な決定をするとき」です。

このころ、イエスは祈るために山に行き、神に祈りながら夜を明かされた。夜明けになって、弟子たちを呼び寄せ、その中から十二人を選び、彼らに使徒という名をつけられた。

(ルカ 6・12、13)

使徒を選びだすのは、ひじょうにたいせつなことでした。ですからイエス様は、祈りながら夜

をあかされたのです。

私たちはみな、ご奉仕のことについて、集会のことについて、勤め先の仕事のことについて、家族のことについて、財政のことについて、あらゆることについて、くりかえしくりかえし決定をせまられます。そんなとき、私たちは主のまえにしまつて祈るときにだけ、ただしい決定を行なうことができます。

主のみこころを行なうためには、私たちはまず主のみこころを知らなければなりません。しかし、主との交わりもなく、主の御声を聞くこともなしには、みこころを知ることが不可能です。多くのひとびとにとっては、真理を認識するまでに時間がかかります。

主よ。私は知っています。人間の道は、その人によるのではなく、歩くことも、その歩みを確かにすることも、人によるのではないことを。

(エレミヤ 10・23)

しかし多くのひとびとは、この真理を知らないから、悲劇的なのです。

私たちはなんとしばしば、ああすべきだ、こうすべきだ、とかつてに思いこんでしまうことでしょう。しかしあとからふりかえってみると、それがおろかなことであつたことに気がつきます。しかし主は、私たちがそれに気がつくまでながいあいだ待っておられ、いつも私たちを導こうとなさっておられたのです。

イエス様ご自身でさえ、父なる神に導かれることがどうしても必要でした。とくに、十二弟子をお選びになるというだいじなときにはそうでした。ですからイエス様は、夜が ажけるまで祈ら

れたのです。

主なる神の導きについてのすばらしい実例は、創世記に見いだされます。

アブラハムの最年長のしもべは、アブラハムの息子イサクの花嫁を見つけるために遣わされました。このことは決してかんたんなことではありませんでした。かれが見かける多くの乙女たちのなかで、いつたいだれが主によって選ばれた乙女、イサクの花嫁なのでしょううか。

とちゅうでかれは祈りました。「主よ、あなたが導いてくださらないならば、そしてあなたがあなたの選ばれた者をしめしてくださらないならば、私はお手あげです」。

この祈りはすばらしい方法で聞きとどけられました。このしもべ自身が、主の恵みに圧倒され、主がかれを導かれたすばらしいいきさつをいきいきと証しています。かれが主によって導かれたひけつはなんだったのでしょうか。

そこでその人は、ひざまずき、主を礼拝して、言った。「私の主人アブラハムの神、主がほめたたえられますように。主は私の主人に対する恵みとまこととお捨てにならなかった。主はこの私をも途中つつがなく、私の主人の兄弟の家に導かれた。」

（創世記 24・26、27）

かれは、年老いたひとりのしもべにすぎませんでした。しかしかれは主によって導かれ、もちいられました。このしもべは、この地上での主人であるアブラハムに従い、そして天におられる主によって一歩一歩導かれたのでした。

Ⅱ 「なぜ」、イエス様は祈られたのでしょうか

私たちはいままで、「いつ」イエス様は祈られたのかを学んできました。その答えは、第一に「聖霊がイエス様のうえにくだるまえ」、第二に「おおやけの奉仕のあと」、第三に「重要な決定をするとき」でした。

私たちはひきつづき、つぎの質問、「なぜ、イエス様は祈られたのか」について学びましょう。この質問についてもルカの福音書のなかから、つぎのふたつの答えを見つけることができます。

1 弟子たちにたいするご配慮から

2 弟子たちにたいするはげましとして

1 弟子たちにたいするご配慮から

「なぜ」イエス様は祈られたのでしょうか。それは「弟子たちにたいするご配慮から」でした。

さて、イエスがひとりで祈っておられたとき、弟子たちがいつしよにいた。イエスは彼らに尋ねて言われた。「群衆はわたしのことをだれだと言っていますか。」彼らは、答えて言った。「バプテスマのヨハネだと言っています。ある者はエリヤだと言い、またほかの人々は、昔の預言者のひとりが生き返ったのだとも言っています。」イエスは、彼らに言われた。「では、あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」ペテロが答えて言った。

「神のキリストです。」

(ルカ 9・18～20)

イエス様は、弟子たちが「霊的な理解力」をもてるようにと祈られました。イエス様が弟子たちに霊的な真理を話されたとき、弟子たちはほんのすこししか理解することができませんでした。とくにイエス様がこの地上にいられた理由、つまり「十字架のうえで、私たちの罪をその身に負った」ということは、弟子たちにとっては理解できないことがらでした。また、べつのところで、主はかれらにおっしゃいました。

「わたしには、あなたがたに話すことがまだたくさんありますが、今あなたがたはそれに耐える力がありません。」
(ヨハネ 16・12)

霊的な真理は、ただ聖霊のはたらきによつてのみ理解されるということを、聖書ははっきりと示しています。イエス様は弟子たちのために祈られたあとではじめて、かれらにたいせつな質問をなさったのです。

…「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」シモン・ペテロが答えて言った。
「あなたは、生ける神の御子キリストです。」
(マタイ 16・15、16)

ペテロのこの答えは、ほんとうはかれ自身からでた答えではありませんでした。イエス様が祈ってください、その祈りの答えとして、ペテロは「イエス様がだれであるか」を主から啓示され

たのでした。「あなたは、生ける神の御子キリストです」。つまりイエス様は人類にやくそくされた救い主であり、人間のかたちをとって地上に來られた神であることをペテロは上からの啓示によつてはじめて靈的、内面的に見ることができ、それからこの証しをすることができたのです。

私たちはみな、「靈的な理解力」を真剣に祈り求めなければなりません。私たち自身、それを必要としており、私たちが仕えたいと思つてゐるすべてのひとびともまた「靈的な理解力」を必要としてゐるのです。私たちがイエス様をどのように宣べ伝えるべきかを知るために主の啓示を必要としてゐるだけでなく、私たちのまわりのひとびともまた、「靈的な理解力」を必要としてゐます。主が私たちに真理を啓示してくださらないなら、そして福音を聞くひとたちすべてに開かれたところをあたえてくださらないなら、すべてはむだであり、徒勞に終わります。

集會のあと「きょうの集いはよかった。賛美も美しかった。おおぜいのひとびとが來られた。ほんとにすばらしかった」と言いあうだけでは決してじゅうぶんではありません。たいせつなのは、「イエス様の啓示を経験する」ことです。このころの目で、イエス様のすばらしさを見て圧倒されることです。イエス様ご自身をあらたに見ること、そしてよりよく知ることがたいせつです。生まれながらの人間は、神の御靈に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。：

(Ⅰコリント 2・14)

しかし主の靈がイエス様のご栄光を現わされると、すべてはちがつて見えます。靈的に目ざめることなしには真理を知ることができません。

使徒パウロにとっては、そのことがなにもましてたいせつだったのです。かれは祈りのなかでつぎのように言っています。

こういうわけで、私は主イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対する愛とを聞いて、あなたがたのために絶えず感謝をささげ、あなたがたのことを覚えて祈っています。どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目ははっきり見えるようになって、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのようにに栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのようにに偉大なるものであるかを、あなたがたが知ることができるようになります。

(エペソ 1・15～19)

また、パウロはつぎのようにも書いています。

こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。

(コロサイ 1・9)

私たちがイエス様のことをつたえたいと思っているすべてのひとびとのために、私たちはおなじように祈らなければなりません。「霊的な理解力」はとてもたいせつです。

2 弟子たちにたいするはげましとして

「なぜ」、イエス様は祈られたのでしょうか。ルカの福音書からつぎの箇所を見てみましょう。そこから、この質問にたいするふたつめの答えを知ることができます。その答えとは「弟子たちにたいするはげましとして」です。

さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとり、イエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

(ルカ 11・1)

イエス様は祈られました。イエス様は父なる神と語られました。イエス様はここをそそぎだされました。そのようすをじつと見ていた弟子たちは、しぜんにイエス様にお願ひするようになりました。「イエス様、私たちに祈ることを教えてください。私たちはあなたのように祈りたいのです」と。

ほんとうに真剣に祈る信者を知ると、自分でもそのようになりたいとはげまされます。あなたの生活は祈りの生活でしょうか。あなたの周囲のひとびとは、あなたのように祈りたいと願っているでしょうか。そうではなくて、私たちは祈りにたいしてなまけもので、無関心で、表面的な者になっているのではないのでしょうか。

「どうすれば絶えず祈ることができるか」。これこそが私たちのまわりのひとびとのところからの願いとならなければなりません。なぜならまわりのひとびとは、私たちの祈りの生活をじつ

と見つめているからです。イエス様のばあいもそうでした。イエス様の生涯は、祈りの生涯でした。ですから弟子たちは「イエス様、私たちに祈ることを教えてください」という願いをもって近づいてきたのです。

もちろん信者はだれでもときどきは祈ります。しかし問題は「絶えず祈る」ことです。私たちの生涯は、祈りの生涯でなければなりません。私たちははたして祈りの戦いを知っているでしょうか。ヤコブは信者たちに「悪魔に抵抗しなさい」と書いています。つまりそれは戦いを意味しています。私たちはこの戦いに参加するようにもとめられています。とりなしのご奉仕は、とりまなおさず闇の力にたいする戦いです。私たちはまだ救われていないひとびとのために、また救われてイエス様に従っていくひとびとのために真剣に祈るようにと主にもとめられています。

主は私たちの真剣な祈りにたいするお答えとして、考えられないほど大きなことをなしたいと願っておられます。主はあふれるばかりの祝福をそそぎたいと願っておられます。しかも主は、それを私たちの献身、また自分が犠牲になる覚悟へのお答えとしてなさうとしておられるのです。

Ⅲ イエス様の祈りは「なにをもたらしただろうか」のでしょうか

つぎに私たちは、三つめの質問、「イエス様の祈りはなにをもたらしただろうか」について、つぎの聖句からその答えを知ることができます。それは、「変えられたみすがた」です。

これらの教えがあつてから八日ほどして、イエスは、ペテロとヨハネとヤコブとを連れ、祈るために、山に登られた。祈っておられると、御顔の様子が変わり、御衣は白く光

り輝いた。

(ルカ 9・28、29)

イエス様の祈りがもたらしたものの、それは「祈っておられると、御顔のようすが変わり、御衣は白くひかりかがやいた」、つまりイエス様の「変えられたみすがた」であり、まったくちがった外観でした。

私たちもイエス様のように祈ると変えられます。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

(Ⅱコリント 3・18)

私たちはいたるところで、言いようもなく暗い、失望した、あるいは無表情にこわばった顔を見かけます。多くの顔は、人間のこころの奥底がどのようなものであるかをはっきりあらわしています。イエス様のすばらしさをつたえるもつともよい方法のひとつは、イエス様を信じるひとびとのひかりかがやく顔です。私と家内は、ドイツのルデヤ姉妹をとおして主に導かれましたが、私たちをいちばんひきつけたのは、彼女の宣べ伝えた福音よりも、むしろ彼女のひかりかがやく顔だったのです。

もちろんこういうひかりかがやく顔は、そうかんたんにはできません。いくらまねをしてみても、すぐに化けの皮がはがれてしまいます。ひかりかがやく顔は、そのひとのうちに住ん

でおられるイエス様の、いのちの現われにほかならないからです。

美しくひかりかがやく顔になるための処方箋はつぎのとおりです。多くの時間をイエス様とともに、主のご臨在のうちに過ごすことです。そうすればあなたの顔は変わります。

出エジプト記のなかで私たちは、モーセの顔がひかりかがやいたことを知ることができます。

モーセはそこに、四十日四十夜、主とともにいた。彼はパンも食べず、水も飲まなかった。そして、彼は石の板に契約のことは、十のことは書きしるした。それから、モーセはシナイ山から降りて来た。モーセが山を降りて来たとき、その手に二枚のあかしの石の板を持っていた。彼は、主と話したので自分の顔のほだが光を放ったのを知らなかった。アロンとすべてのイスラエル人はモーセを見た。なんと彼の顔のほだが光を放つではないか。それで彼らは恐れて、彼に近づけなかった。イスラエル人はモーセの顔を見た。まことに、モーセの顔のほだは光を放った。モーセは、主と話するためにはいつて行くまで、自分の顔におおいを掛けていた。

(出エジプト 34・28、29、30、35)

モーセはシナイ山にのぼり、主に出会うようにと召しだされました。四十日間モーセは主のご臨在のうちに過ごしました。その結果、知らず知らずのうちにかれの顔はひかりかがやくようになつたのです。しかしふもとで待っていたイスラエル人たちは、主からとおくはなれていたので、かれらの顔にはすこしのよろこびもなく、石のようにこわばってしまっていました。モーセのひかりかがやく顔は、イスラエルの民にとって圧倒的なはたらきをしました。かれらはもはや耐え

られなくなり、モーセにおおいで顔をおおってほしいとたのみました。

こんにちあらゆる信者が、どこにいてもひかりかがやく顔をしているなら、周囲のひとびとはおどろいて主を求めるようになるでしょう。このことだけでも祈りのたいせつさを知ることができるのではないのでしょうか。

IV イエス様は「どのようなところで」祈られたのでしょうか

この四番めの質問にたいする答えは、「徹底的に自分の意志を父なる神にあげわたし、ゆだねきる覚悟で祈られた」ということです。私たちはルカの福音書のなかのつぎの箇所からそのことを知ることができます。

そしてご自分は、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、こう祈られた。「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」
(ルカ 22・41、42)

「わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください」。イエス様の地上での生活の特徴は、父なる神のみこころのとおりに生きるというまったくの服従のたいどにありました。ここで語られていることは、イエス様が祈りによって、妥協することなくあらたにご自身を父なる神にささげつくされたことです。「わたしの思いではなく、みこころのとおりにしてください」と。イエス様は、ここであらためて、私たちの代わりに十字架でご自分のいのちをあたえてくださ

ることをよしとなさいました。

私たちもみこころにかなう祈りびになろうと思えば、自分自身を捨て、意志の委譲をしなければなりません。それによって私たちは、つぎのことを告白するようになります。「私になが起ころうが、まったくかまいません。それがどのようなことであっても、神のみこころが私の生活のなかで実現されればよいのです。そうすれば私は満足します」と。

「あなたのみこころのとおりになりますように」と口で言うだけでなく、こころの底から確信することはそうかんたなことではなく、たいへんむずかしいことです。しかし、これだけははっきりしています。主イエス様は私たちのために、つねに最善を望み、最善をなしてくださいます。ですから私たちは、その生涯をあげて主イエス様のみこころが実現されることに貢献しなければなりません。

さてここまで、私たちは「祈りびとしてのイエス様」のことを、ルカの福音書の七つの場面から学んできました。イエス様はあらゆる時代をとおしてもつとも偉大な祈りびとでした。そして、あらゆる時代をとおしてもつとも偉大な祈りびとは、なによりも父なる神により頼むかたでした。イエス様はそれをこころから望まれました。ですから絶えず祈られたのであり、祈らなければならなかったのです。

私たちがもし、主により頼まなくていいと思うなら、祈りは真剣なものでなくなり、その結果私たちの人生はまったくの空転になり徒労に終わってしまいます。

私たちが、イエス様の「わたしのところに来なさい」という呼びかけにおうじて主の御顔をさ

がし求めるなら、そして主のみこころにかなう祈りびとになるなら、ほんとうにさいわいです。私たちが「みこころのとおりになりますように」ところから祈ることができ、主イエス様の満たしにあずかることができ、永遠にわたる実を結ぶことができ、主おひとりだけが栄光をお受けになることができますように。

密室での祈り

▼和田さんご夫妻とベックさん。



この章のテーマは「密室での祈り」です。まずイエス様ご自身が、山のうえでとおおぜいの群衆と弟子たちに言われたことばを聖書から見てもみましょう。

「また、祈るときには、偽善者たちのようであつてはいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立つて祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見えおられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思つているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知つておられるからです。」

(マタイ 6・5-8)

ここには、「ほんとうの祈り」と「まちがった祈り」がはっきりと区別され、あきらかにされています。祈りには、ほんとうの祈り、まことの祈りがあります。しかし、そのいっぽうでは、にせものの祈り、まちがった祈りがあります。まことの祈りは主のみこころになつています。主はそれをよくごぞんじで、すべてにまさつてまことの祈りを評価されます。それに反してにせものの祈りは、人間がつくつたみせかけにすぎません。にせものの祈りは芝居のようなものであり、ひとはそのみせかけに、かんたんにだまされてしまいます。それはひとびとのあいだでは尊

重されても、主にとってはまったくなんの価値もないものです。つまり、祈りには「ゆたかな実を結び、主をあがめる祈り」と「実を結ばない、まったく価値がない祈り」とがあります。主イエス様はそのことについてひとつのたとえをなさいました。

「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりパリサイ人で、もうひとりは取税人であった。パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

(ルカ 18・10～14)

パリサイ人はたしかに祈りましたが、かれの祈りは宮の天井までしかとどきませんでした。しかし取税人の祈りはすぐ神の耳にはいり、聞きとどけられたのです。

この聖句のなかで、主はひとりひとりの「個人的な祈り」を強調しておられます。私たちはそれを「密室での祈り」と呼んでいます。ひとりひとりの「個人的な祈り」は、すべてにまざってたいせつです。「密室での祈り」は、なにものにもかえられません。私たちはこの「密室での祈り」

り」の必要性を知っているでしょうか。私たちはこの「個人的な祈り」を実行しているのでしょうか。私たちは主とのしたい交流を経験しているでしょうか。

主の目から見てたいせつなことは、人間の目から見てたいせつなこととはちがいます。たとえば私たちは、何回集会に行くか、どれほど主のために努力するか、どんなにけんめいに失われたたましいのために働くかなどがまずたいせつなことだと思いがちです。しかし主の目から見れば、これらはじつはそれほどたいせつではありません。主にとって、すべてにまさってたいせつなことは「主とともにひとりだけであることをたいせつにしているかどうか」ということです。たいせつなのはでも主とひとりだけであることを最優先にしているかどうか」ということです。たいせつなのは「密室での祈り」、ひとりひとりの「個人的な祈り」、つまり「主とひとりであること」です。

祈りは「たましいの呼吸」です。祈りは死の谷を通るときのみたすけです。祈りは天の永遠の栄光を開きます。主とひとりであることを知っているひとは、神の平安を体験します。

そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と想いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。

(ピリピ 4・7)

また、主とともにひとりであることを実行するひとは、神の平安だけでなく、神のよろこびをも体験します。ダビデはつぎのように証しています。

…あなたの御前には喜びが満ち、あなたの右には、楽しみがとこしえにあります。

(詩篇 16・11)

密室での祈りを知らないひとは、神のご臨在を経験することができません。ひとりひとりの個人的な祈りがさげられていないところには、ほんとうの御霊の実は見いだされません。主とひとりだけでいることをおろそかにしている信者は、主から見はなされ、主にとって価値のないものです。

はじめに引用した聖句をもういちど見てください。「あなたは、祈るとき」という表現がなんでもできます。ですから主は「すべての信者はとうぜん祈るものである」とみなしておられることがわかります。信者であることと祈ることは、ひとつのことです。ですから私たちの祈りは、よろこびに満ちた習慣、規則正しい習慣になつていなければなりません。

私たちはいま、真剣に自分自身にたずねてみましょう。「私の生活はどうだろうか。私は密室での祈りをたいせつにしているだろうか。主とひとりだけにいることは私にとつてすべてにまざつてたいせつだろうか。私の生活はいわゆる『キリスト教的』なみせかけだけのものになつていないだろうか。それとも主にたいする祈りの献身が私の生活の特徴となつていだろうか。私の第一ののぞみは、主としたしく語りあうことだろうか」と。

「密室での祈り」の特徴は、つぎのようなものです。

- 1 個人的な主との交わり
- 2 畏敬に満ちたたいど
- 3 純粹な思い
- 4 意識して身をひそめる

5 耐えしのぶ力

6 ぜったいの信頼

7 確実なむくい

この「密室での祈り」の七つの特徴について、ごいっしょに考えてみましょう。

1 個人的な主との交わり

「密室での祈り」の特徴のいちばんはじめは、つぎの三つの前提にしっかりと立っていることです。「私たちは主のもとに行くことができる」、「私たちは主に願いを申しあげることができる」、そして「私たちは祈りが聞きとけられる体験をすることができる」。つまりこれらの「密室での祈り」の前提は、私たちと主との個人的な関係です。ですからこの章のはじめに引用した聖句に、くりかえし「あなたの父に祈りなさい。あなたの父はむくいてくださいます」と書いてあるのです。イエス様は、ここで、たんに「父に祈りなさい。父が、あなたにむくいてくださいます」とはおっしゃらず、『あなたの』父に祈りなさい。『あなたの』父が、あなたにむくいてくださいます」と、はっきり言っておられます。

祈りの力を体験するためには、生きておられるまことの神を「天におられる私たちの父」として知っていなければなりません。つまり、私たちは「神から生まれた者」でなければならず、そのためには私たちはイエス様を信じ、新生を体験し、神の家族の一員にならなければなりません。マタイの福音書の6章には、よく知られている「主の祈り」があります。この「主の祈り」は、

だれもが知っているように、「天にいます私たちの父よ。(マタイ6・9)」ということばではじまっています。生けるまことの神が、どのようにして「私たちの父」になってくださるのでしょうか。神の被造物である私たちが、どのようにして「神の子」となるのでしょうか。それについては、聖書につきのように書かれています。

しかし、この方(イエス様)を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

(ヨハネ 1・12、13)

イエス様を自分の個人的な救い主として受け入れる者は、だれでも「神の子」であり、「神から生まれた者」であり、「神の家族にぞくする者」です。神の家族になる道はただひとつだけです。ただひとつの道とは、イエス様をこころのうちに受け入れ「新しく生まれ変わること」です。そして、だれでもイエス様をこころのうちに受け入れるなら、ひとりのこらずこの奇蹟を経験することが出来ます。

祈りの土台は、まず「父としての神を知ること」、また「神の子とされている」ことです。ひとは神の子とされてはじめて、主との個人的な交わりをもつことが出来ます。神の子となった者は、祈りながらよこんで自由に主のみもとに行くことができます。

まことの祈りの特徴の第一は、なによりもまず、主とのまったく「個人的な関係」、主との

「個人的な交わり」をもっていることです。イエス様を個人的な救い主として受け入れる者は、イエス様を「もつ」者であり、父を「もつ」者です。これこそが「密室での祈り」のもつとも基本的な土台であり、主とのあらゆる「個人的な交わり」の土台です。

2 畏敬に満ちたたいど

「密室での祈り」の二番めの特徴は、「畏敬に満ちたたいど」、つまり「おそれうやまうたいど」です。私たちが「父」として知ることをゆるされている主とは、いったいどういふおかたなのでしょう。イザヤはこのことについてつぎのように言っています。

いと高くあがめられ、永遠の住まいに住み、その名を聖となえられる方が、こう仰せられる。「わたしは、高く聖なる所に住み、心碎かれて、へりくだった人とともに住む。へりくだった人の霊を生かし、碎かれた人の心を生かすためである。」

(イザヤ 57・15)

その名を「聖」ととなえられるおかたですから、私たちは、くだかれた、へりくだった霊をもって、「畏敬に満ちて」主に近づかなければなりません。モーセは神の聖さを体験して、いつもおそれに満ちたたいどで主に近づきました。

モーセは言った。「なぜ柴が燃えていかないのか、あちらへ行つてこの大いなる光景を見ることにしよう。」主は彼が横切つて見に来るのをご覧になった。神は柴の中から彼を

呼び、「モーセ、モーセ。」と仰せられた。彼は「はい。ここにおります。」と答えた。神は仰せられた。「ここに近づいてはいけない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立つている場所は、聖なる地である。」また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。

(出エジプト 3・3-6)

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。

(ヘブル 10・19、20)

私たちは自由に主に近づくことがゆるされています。しかし、私たちが主に近づくとき、私たちの「このころの奥底のたいど」はとてもたいせつです。私たちはおそれをもつて主に近づかなければなりません。主の目には、私たちはちり、灰にすぎないのです。

ダニエルという預言者が主に近づいたとき、かれは「自分は神の目には無価値なものである」ことをよく知っていました。

そこで私は、顔を神である主に向けて祈り、断食をし、荒布を着、灰をかぶって、願い求めた。

(ダニエル 9・3)

私たちはみな、聖なる神に近づく価値など、まったくない者です。私たちが神に近づくことをゆるされているただひとつのよりどころは、私たちの主、イエス様がながされた血潮です。私たちは、主を父として知ることがゆるされています。しかしそうであつても、ただ、くだかれた、へりくだったところとたいどをもつて近づかなければならないのです。

3 純粹な思い

「密室での祈り」の三番めの特徴は「純粹な思い」です。主は私たちの祈りがほんものであること、つまり、「まごころから祈る」ことを強調しておられます。「まごころからの祈りこそ、祈りのこころ」です。祈りが偽善的なまちがった行為であるばあいには、主は受け入れることがおできになりません。主は私たちに「偽善者のように祈つてはならない。つまり役者のように祈つてはならない」とはつきりとおっしゃっておられます。あらゆる「みせかけ」は、主がもつともさらわれるものです。

「この民は、口先ではわたし（主）を敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。」

（マタイ 15・8）

集會に熱心に出席し、祈り会でよく祈り、多くの集いやご奉仕にかかさず参加するが、じつは主からとおくはなれている、ということはありませんのです。そして主はそのようなみせかけだけの行ないを「無価値なもの」だと言われるのです。許したくない気持ちをもつて、ねたみに満ち

たところをもって、主のまえに悔い改めたくない、ゆるされていない罪をもって、主にすべてをあけわたしたくない意志をもって集会にくるひとは、主からとおくはなれています。そのようなとき、すべては無価値で無意味です。ダビデはつぎのように告白しています。

もしも私の心にいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。

(詩篇 66・18)

聖さ、誠実さ、真実さ。これらは、生まれたときから私たちにないものです。しかし、主は私たちにないものを、聖霊の実としてあたえてくださいます。ひとがただ主とひとりになりたいと願うとき、主はこの「純粹な思い」をあたえてくださいます。

4 意識して身をひそめる

密室での祈りの四番めの特徴は、「意識して身をひそめる」ことです。

イエス様は、主のみこころにかなう祈りと、パリサイ人がした祈りとはまさに正反対であることをはっきりとしめしておられます。パリサイ人は、街道や通りの四つ角に立って祈ることが好きでした。かれらはひとに見られなくてそうしたのです。イエス様は、祈るひとが主のみこころにかなうように、つぎのことを要求しておられます。

「あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。…」

(マタイ 6・6)

祈るとき、ひとに見られたり聞かれたりすることはたいせつではありません。たいせつなのは、主が私たちを見てくださり、私たちの祈りを聞いてくださることです。

「意識して身をひそめる」ことは、主とひとりだけになる前提であり、また主としたい交わりをもつ前提です。もちろん私たちは、いつでも、どこでも祈ることができます。主は私たちがいつでも、どこでも祈ることを期待しておられます。しかし、「密室での祈り」にまざるものはありません。「戸をしめる」、つまり主とひとりだけになることは、主が私たちに語ってくださるためにどうしても必要なことです。

主とひとりだけになることは、汲みつくせないよろこびの泉です。主とともにときをすごすことは、私たちにゆるさされている最大の恵みであり特権です。私たちが、もつともつこの恵みと特権をよろこんで受けることができますように。

もし私たちが「まいにちの生活があまりにもいそがしすぎて、主とひとりになる時間などぜんぜんない」と思うようなら、私たちは優先順位をまちがえています。私たちはそのときすぐに自分の生活のありかたを変える決心をしなければなりません。なんとしても、私たちは「主とひとりになる時間」をつくらなければなりません。

イエス様は地上におられたとき、考えられないほどいそがしかったのです。だれひとりとして、イエス様のようにいそがしく、時間をきりつめ、休むひまもなく働いたひとはありませんでした。しかしイエス様は、それでも父なる神とひとりだけになる時間をおつくりになりました。

なんとしてでも、父なる神とひとりだけになること。これがイエス様の地上での生活での特徴

でした。父とひとりだけになることは、イエス様のまじりけのないよろこびの根拠でした。父とひとりだけになることは、あらゆる問題に直面するイエス様の力の源泉でした。私たちは、イエス様とひとりだけになる時間がみじかくなりすぎないように、日常生活のありかたを変えなければなりません。いちばんたいせつなことを、いちばんたいせつにしなければなりません。「意識して身をひそめる」ことによつてのみ、それが可能になります。

5 耐えしのぶ力

「密室での祈り」の五番めの特徴は、「耐えしのぶ力」です。この「耐えしのぶ力」は、「やむにやまれない祈りのくりかえし」となつて日々の祈りにあらわれてきます。おそらくあるかたはつぎのように言われるでしょう。「それこそまさに主が禁じられたことではありませんか…」と。「また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思つてゐるのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。…」

(マタイ 6・7、8)

たしかに主はこのようにおっしゃいました。しかしここで主が「かれらのまねをしてはいけません」と否定しておられるのは、価値のない、思慮のない、おしゃべりやむだぐちのような言葉かずの多い祈りです。「異邦人のおなじ言葉を、ただくりかえし…」とある、その例を聖書のほかの箇所から見てもみましょう。

そこで、彼らは与えられた雄牛を取ってそれを整え、朝から真昼までバアル（注・当時流行した偶像のひとつ）の名を呼んで言った。「バアルよ。私たちに答えてください。」しかし、何の声もなく、答える者もなかった。そこで彼らは、自分たちの造った祭壇のあたりを、踊り回った。

（Ⅰ列王 18・26）

朝から真昼までのこの叫びごえは、むなしいくらかえしであり、なんの価値もありませんでした。そのようなむだぐちや叫びのたぐいを、主はもつとも忌みきらわれるのです。

主は聖書のなかで、「なんども祈ったり、願いをささげたりしてはいけない」とはおっしゃっておられません。それどころか私たちは、たえず自分が関心をもっていること、こころをわずらわせていることを主に申しあげるべきです。主は私たちがそのようにして絶えず祈ることを要求しておられ、そうするようにはげましてくださいます。「主がすぐにこたえてくださらないなら、すぐにあきらめてしまふ」というのは、まちがっています。

絶えず祈りなさい。主のみまえに立ちつづけなさい。私たちには、祈りの持久力、耐久力が要求されているのです。そして主に、おおいなることを期待しなさい。「くりかえし、くりかえし祈ること」は、必要であり、たいせつなことなのです。

じっさい、私たちのうちの大部分のひとびとは、いつも祈り、主に自分の願いをくりかえし申しあげています。たとえば救われていない家族のために、くりかえしくりかえし、祈りがささげられています。なぜそうするのでしょうか。私たちは「主はかならずやくそくを守ってください。

みことばをかならず成就してくださる」と主に信頼しきっているからです。私たちは、待ちながら主のみまえに立ちつづけ、主がそのことにかかわってください、奇蹟を行なってくださることを確信して、祈りつづけているのです。

しばしば祈りが聞きとどけられないのは、私たちが祈りつづけることを、主のみまえに立ちつづけることをやめてしまったからです。

私たちのキリスト集会の、あるかたのお母さんは「私は息子が救われることを五十年間祈りつづけてきました」と言われました。息子さんの奥さんは二十五年間祈りつづけたのだそうです。ふたりの祈りをあわせるとじつに七十五年になります。そのあいだというもの、「救われますように」というおなじ祈りが、どれほど多く、くりかえしくりかえしさざげられたことでしょうか。このような祈りが主によってこたえられないはずはありません。しかもこれらの祈りは、さきほどの例で見たように、おなじ言葉をただくりかえしたものではありません。この祈りは、こころの奥底にある苦しみのあらわれでした。母親と妻は、くりかえしくりかえし、おなじ願いを主に申しあげました。そしてこのやむにやまれない祈りのくりかえしは、主の望まれたことであり、またこのかたがたの主への信頼のあらわれだったのです。

6 ぜったいの信頼

「密室での祈り」の六番めの特徴は、「ぜったいの信頼」です。主イエスを信じること、主を信頼すること、主により頼むことは、どうしても必要です。イエス様はおっしゃいました。

「あなたがたの父なる神は、あなたがたをお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。」

(マタイ 6・8)

このイエス様のみことばは、父なる神へのぜったいの信頼のあらわれです。「父なる神は、あなたがたをお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられる」。すると私たちはこうたずねたくなるかもしれません。「主はすでにすべてをごぞんじなのに、なぜ私たちは祈らなければならぬのだろう」と。祈りにおいては、主にいろいろなことを報告することがたいせつなではありません。たいせつなのは、私たちが悩みをもって主のみもとに行き、主にその悩みを申しあげることであり、私たちが主を信頼していることを申しあげることです。そしてたいせつなのは、主はかならず助けてくださり、ご自身のご栄光を現わしてくださることを私たちが確信していることです。

主は私たちの祈りにこたえたいと思っておられます。それも私たちの「信頼にたいする答え」として祈りにこたえたいと願っておられます。私たちの祈りは私たちの信頼の表現でなければなりません。私たちが祈らないとき、また信頼しないとき、主からのゆたかな祝福は失われてしまいます。

祈りは、主がそれをおしてみこころを行ないたいと望んでおられるくだであり、手段です。主は私たちの悩みをよくごぞんじです。主は私たちが悩みをもって、信頼して、みもとに行くことをここから願っておられます。私たちが悩みをもって、信頼して主のみもとに行くと、主は

私たちを悩みから解放してください。私たちが主に信頼と崇拜をささげると、主はかならずこたえてくださいます。祈りはまず第一に、主への「ぜったいの信頼」をあらわすものとしてたいせつなのです。

信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。

(ヘブル 11・6)

「だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」

(マルコ 11・24)

7 確実なむくい

「密室での祈り」の七番めの特徴は、「確実なむくい」です。パリサイ人のばあいには、かれらは自分が望んだむくいをすぐに手に入れることができました。偽善者たちはひとに見られたくて祈ります。「…彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。(マタイ 6・5)」と書かれています。パリサイ人はひとに見られるために祈りました。かれらの目的はひとに見られることでした。そしてかれらはたしかに、ひとに見られました。それでかれらは自分たちの目的を達したのです。これがかれらの手に入れたむくいでした。なんというまとはずれな、つまらないむくいでしょう。人間に見られ、人間にほめられ、人間に尊敬され、人間に尊重される。これはほん

とうにみこころにそわない、ふらちなむくいです。

しかしまことの祈りがさざげられるときには、私たちがまごころから祈るときには、確実なむくいが保証されています。私たちがこころから祈るなら、その祈りはこの地上においても聞きとどけられ、こたえられるばかりでなく、のちになつて栄光のうちに、言いあらわすことのできないほど、考えられないほど、深く大きくむくわれるようになります。

「密室での祈り」は、かくれたところで見えおられる父なる神が、確実にむくいてくださいます。主は、「密室での祈り」にたいするお答えとして、あふれるばかりの祝福をそそぎたいと望んでおられます。私たちが「主がもちい、祝福してください」と思ふなら、そして「主のために永遠の実を結ぶことができる人間になりたい」と思ふなら、個人的な祈り、密室での祈り、主とひとりになることがどうしても必要です。それは絶対的な前提です。

主イエス様とひとりになることのしずけさをもってください。主との交わりのために意識して身をひそめてください。主はあなたを、かならずみこころにかなった祈りびとにしてください。にちがいありません。そしてあなたは、いままで経験したことがないほど主のちかくで、よろこびのこえをあげるにちがいないのです。

祈りをやめる罪

▼奄美大島よろこびの集いで。左から黒津さん、田中さん、伊藤さん、金子さん、島津さん、黒津さんのお嬢さん。



私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて主に罪を犯すことなど、とてもできない。
(Iサムエル 12・23)

このサムエルのことばのなかにある「祈るのをやめる罪」、つまり「祈りをやめる罪」について、ごいっしょに考えてみましょう。イエス様を信じているひとびとがもっている最大の弱点は、「祈りの生活」そのものにあります。信仰生活が挫折する原因はすべて、「じゅうぶんに祈らない生活」にあるといえましょう。主は聖書のなかで「祈る」ことをくりかえしくりかえしすめておられます。そして、祈るひとにはかぞえきれないほどのやくそくがあたえられています。聖書には、祈って、その祈りのお答えをいただいたひとびとの、たくさんの実例がしるされています。イエス様を信じているひとびとは、主から「祈るように命令」されています。それなのに私たちは主のまえに真剣に祈りつづけることをしないで、そのほかのいろいろなことをしてしまっているのではないのでしょうか。はじめに引用した聖句は、「祈りをおろそかにすることは罪である」と、はっきりと告げているのです。祈るのをやめて、いかげんな生活をすることは罪です。私たちが祈りの生活をしていないなら、主にたいして罪をおかしていることになります。私たちは自分自身にいますぐ正直にたずてみましょう。「私の祈りの生活はどうだろうか。私はじゅうぶんに祈っているのだろうか。絶えず祈っているのだろうか。それは主のまえに『祈りの生活』と言えるだろうか。ああ、私はどれほどすくなくしか祈っていないことだろう」と。

イエス様を信じているひとびとのなかには、いろいろなひとがいます。あるひとはまいにち三

十分、祈りをささげているかもしれませんが。またせいぜい十分も祈ればいいほうだというひともいるでしょう。なかには、私はぜんぜん祈らないというひともいます。最初に引用したとおり、サムエルは多くの信者のまえで、つぎのように証しをしました。「私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて主に罪をおかすことなど、とてもできない」。私たちもサムエルとおなじたいどをとることができるならさいわいです。

祈りをやめることは、罪です。これについて、つぎのふたつのたいせつな問いをとおして、よく考えてみることにしましょう。

I 私たちが祈りをやめることは、「なぜ」罪なのでしょうか。

II 私たちは祈りをやめることで、「だれにたいして」罪をおかすのでしょうか。

I 祈りをやめることは、「なぜ」罪なのか

1 祈りをやめることは、罪です。

2 祈りをやめることは、主の命令にそむくことです。

3 祈りをやめることは、神をけがすことです。

4 祈りをやめることは、聖霊を悲しませることです。

5 祈りをやめることは、なにごとも起こらない原因です。

6 祈りをやめることは、あらゆる罪をさそいだす誘因です。

7 祈りをやめることは、霊的な力がなくなる原因です。

これからこの七つの項目について、順をおって考えていきましょう。それとおして、主が私たちをごらんになつてゐるように、きびしく自分自身の生活、自分自身の状態を知ることができればさいわいです。

1 聖書が罪だとしめしているから

祈りをやめることはなぜ罪なのでしょう。それは、神のみことばそのものである聖書が「それは罪である」とはっきりと告げているからです。祈りをやめるなら、私たちは主にたいして罪をおかしていることになります。私たちがこのことをみとめようがみとめまいが、まったく関係ありません。神のみことばがはっきり「罪だ」と言っているのですから、まちがひなく罪なのです。神のみことばは絶対的な真理です。そのみことばが、いつわり、ぬすみ、ねたみ、むさぼり、姦淫などを罪とさだめています。そして、祈りをやめることもこれらとおなじように「罪」と呼ばれています。ですから、もし祈りをやめるなら、私たちは罪をおかしていることになります。このことを、私たちは事実として深くこころに刻まなければなりません。この事実を深く考えないで無視してしまうことは、なんの解決にもなりません。祈りをやめるひとは、意識的であれ無意識的であれ、主にたいして罪をおかしているのです。祈りをやめることによって、私たちはどれほど多くの主にたいする負いめをわが身にまねていることでしょうか。私たちは祈りをやめることによって、はかりしれないほど多くの罪をおかしているのです。

2 主の命令にそむくことになるから

祈らないことはなぜ罪なのでしょう。それは、イエス様ご自身が祈ることがいかに必要であるかはつきりとしめしておられるからです。イエス様はルカの福音書のなかで、ある裁判官のたとえばなしをなさいました。そのときイエス様はそのたとえばなしをする理由を、あらかじめつぎのようにしめしておられます。

いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。

(ルカ 18・1)

またパウロは信者たちにあてた手紙のなかでつぎのように警告しています。

絶えず祈りなさい。

(1テサロニケ 5・17)

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によつて祈りなさい。

(エペソ 6・18)

「いつでも祈るべきである」と聖書がはつきりしめしているのですから、主のみこころもとうぜんそのとおりです。つまり「いつでも祈るべきである」ということは、はつきりとした主の命令なのです。だから、私たちがいつも祈らないなら、それは主の命令にそむくことです。命令にそむけば罰せられます。主の命令にそむいても、私たちにひとつもよいことはありません。

罪には、「おかす罪」と「なまける罪」があります。祈らないことは「なまける罪」です。私たちは、このなまける罪、祈らない罪について、はたしてじゅうぶんに自覚し、よく理解しているでしょうか。

こういうわけで、なすべき正しいことを知っていながら行なわないなら、それはその人の罪です。
(ヤコブ 4・17)

私たちはみな、祈ることがたいせつであり、必要であり、よいことであることを知っています。だから、祈らないことは罪なのです。

3 神をけがすことになるから

祈らないことはなぜ罪なのでしょう。それは、私たちが祈らないことによって、主がけがされることになるからです。パウロはつぎのように証しています。

：信仰から出ていないことは、みな罪です。

(ローマ 14・23)

信仰は「主とのむすびつき」です。そして祈りは「主とのむすびつきのあらわれ」です。パウロはこのみことばのなかで「信仰からでないことは、みな罪です」と書きしるしています。祈らないことは不信仰のしるしです。そして信仰がなければ主によるこばれることはできません。

信仰がなくては、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられること

と、神を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければなりません。

(ヘブル 11・6)

つぎのようなときに私たちは主をけがすことになります。私たちが主に近づかないとき。私たちが主を信頼して主と語らないとき。私たちが主とひとつになる時間をつくらないうときです。

ルカの福音書のなかのたとえばなしにでてくる放蕩息子が、父親とのあらゆる関係をたつて自分かつてな道を行ったとき、それは父にとって恥であり、その父親の名をけがすことでした。放蕩息子が父と関係をたつていたあいだ、かれと出会ったひとびとには、かれがあの父親の息子だとはわかりませんでした。放蕩息子は、まるで自分には父親などいないかのような生活をしていました。かれにとって父親はいないも同然でした。このようなときには、親子のむすびつきはまったくありませんでした。

そして、たとえ信者であっても、この放蕩息子とおなじように、主となんのむすびつきもない生活することは可能なのです。祈りをやめること、主とむすびについているのをやめることは、主をまったく知らないかのように生きることです。

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもつて走り続けようではありませんか。信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。：

(ヘブル 12・1、2)

不信仰は「まつわりつく罪」です。みことばにあるように、私たちはその「まつわりつく罪を捨て」なければなりません。ではどうしたら捨てられるのでしょうか。ただひとつ、「イエス様から目をはなさないことによつて」です。

なぜ私たちは、ほんのすこししか祈らないのでしょうか。なぜ私たちは、真剣に祈らないのでしょうか。それは、祈りにこたえてくださる主の力の偉大さをほんとうに信じていないからではないでしょうか。主が私たちすべてに、したしくむすびつきたい、語りあいたい、みこころを現わしたいと望んでおられることを確信していないからではないでしょうか。このようなたいどは不従順であり、不信仰です。主ご自身にぞくする私たちのこのような不従順と不信仰は、もっともひどく主をけがすことになります。

信仰は、主のみことばにだけささえられます。ですから、あなたが信仰をとおして主の御名がほめたたえられることを望むなら、みことばだけにささえられなければなりません。たとえあなたのまえにある問題がどんなに解決できないように見えるときも、どんなに困難な状況にあつても、主を信頼してください。私たちにはかりしれないほどの大きな祝福をおあたえになることこそ、主にとつて最大のよろこびなのです。あなたの人生をとおして、主はほめたたえられるのでしょうか。それともけがされるのでしょうか。

4 聖霊を悲しませることになるから

祈りをやめることはなぜ罪なのでしょうか。聖書のなかには、じつに多くの祈りへのはげまし

があたえられています。聖書ぜんたいは、「主は私たちの祈りを聞きとどけてくださるおかたである」という実例でいっぱいです。主を信じる私たちは、主に、はっきりしないほど大きなことを願ひ求めるようにはげまされています。ですから、私たちが祈りをやめることは、聖霊を悲しませることになります。

イエス様を信じる者は、だれでも聖霊をもっています。

∴キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。(ローマ 8・9)

「キリストの御霊をもたないひとは、キリストのものではない」。逆に言えば、「キリストのものなら、ひとはだれでも御霊をもっている」ということです。聖霊をもたないひとはイエス様のものではなく、したがって救われていません。イエス様を信じるひとは、だれでも聖霊の宮です。そして神の霊、聖霊は、祈りの霊です。私たちにできないことでも、神の霊にはできます。この神の霊はなんのために私たちにあたえられたのでしょうか。まずなによりも、主によるこばれる祈りの生活を行なうためです。

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらいいかかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

(ローマ 8・26、27)

祈らない者は、主のまえになんのいいわけもすることができません。なぜなら、イエス様を信じる者ならだれでも聖霊をもっているからであり、私たちには祈ることができなくても、私たちのうちにおられる聖霊は祈ることができ、私たちのうちで祈りたいと願っておられるからです。私たちはいままで、なんとたびたび主が私たちの祈りを聞きとけてくださり、手をさしのべてくださることを経験したことでしょうか。主はいつまでも変わることのないおかたです。主はいまも、これからも、大きなみわざを現わされたいのです。しかも、その大きなみわざを、「あなたの祈りにたいする答え」として、現わされたいのです。

5 なにごとも起こらない原因となるから

祈らないことはなぜ罪なのでしょうか。それは、祈りをとおしておどろくほど大きく、たくさんのことがなされるからです。祈りをやめることは、なにごとも起こらない原因となります。

祈りによって、どれほど大きなことが可能となるかを、もういちど考えてみてください。聖書を読んで、主が祈りの答えとしてどれだけ多くのことをなさり、どれだけ素晴らしいみわざを現わされたかを調べてみてください。祈りをとおして、ほんとうに多くのことが起こり、多くのことが可能となるのです。ですから祈りをやめることは罪なのです。あふれるばかりの祝福がそこからながれでるはずのくだが、祈りをやめることによって詰まってしまいます。私たちが祈らないなら、まわりのまだイエス様をごぞんじないひとびとも祝福されません。また私たちが祈らないなら、私たちのまわりの信者も祝福されず、私たち自身も祝福されないという状態がつづくの

です。これらはすべて、私たちが祈らないことが原因です。

アブラハムはソドムとゴモラのために祈りました。主は祈りにこたえてくださいました。その結果としてアブラハムのおいのロトは救いだされたのです。もしアブラハムがかれののために真剣に祈らなかつたならば、ロトは救いだされなかつたにちがいありません。

モーセは神の民であるイスラエルの救いと解放のために祈りました。その結果、イスラエルの民は人間的に見れば不可能なことが実現するのを経験しました。かれらは解放されました。もし、モーセが祈らなかつたならば、かれらはどうなっていたことでしょうか。ヨシュア、サムエル、ダビデ、エリヤ、エリシャ、イザヤ、エレミヤ、ダニエル……。ほかにも多くのひとびとが真剣に祈りました。そして祈りはかならず聞きとどけられることを経験しました。かれらが犠牲をはらって真剣に祈ったからこそ、多くのひとびとがゆたかに祝福されたのです。

祈りはすべてを変えます。祈りによって福音が宣べ伝えられます。祈りによってあなたのまわりの未信者のひとびとが救われます。祈りによってねむっている信者が目ざめさせられ、いきいきとした、主にある新しい者に造りかえられます。祈りによっていろいろな国がもっている問題が大きく変えられていきます。祈りによって不可能に見えることが可能となります。すべては祈りによって可能となるのです。だからこそ、祈りをやめることは大きな罪なのです。

6 あらゆる罪の誘因となるから

祈りをやめることはなぜ罪なのでしょう。それは、祈りをやめることによって、あらゆる罪

がそこからさそいだされてくるからです。イエス様は弟子たちにつぎのように祈ることを命令なさいました。

「私たちを試みに会わせないで、悪からお救いください。」（マタイ 6・13）

「誘惑に陥らないように、目をさまして、祈っていなさい。」（マタイ 26・41）

またジョン・バンヤンはつぎのように言いました。「祈る者は、罪をおかしくなくなる。祈らない者は、すぐに罪をおかしてしまう」。祈るのをやめることは、なんとという墮落でしょうか。私たちがくりかえしておかすおもな罪はなんでしょうか。私たちの挫折のおもな原因は祈りがすくないことです。注意しなければいけないのは、ひとは祈るのをやめることによって、まちがった安心感に導かれることがあることです。そうするとひとはいいかげんになります。そこから罪までは、さほどとおくありません。

私たちが度を失ったり、不真実になったり、よく考えないでなにか言ったりするとき、その原因はいつも、私たちがまったく祈らなかつたか、ほとんど祈らなかつたことにあります。私たちがよく祈ったなら、祈りはきつとそのようなことから私たちを守ってくれたはずですよ。

7 霊的な力のなさの原因となるから

祈らないことはなぜ罪なのでしょう。それは、祈らないことがあらゆる欠乏と無力さのみな

もとなるからです。

私たちはどうしてこんなに弱く、無力だと感じるのでしょうか。私たちはなぜこんなにすこしか主の大きなはたらきを見ることができないのでしょうか。私たちはなぜいたるところでこんなにも多くのかたくななところにぶつかるとでしょうか。なぜでしょうか。その理由ははっきりしています。私たちが祈ることによって、主が私たちにどれだけ大きな特権、どれだけ大きな力をあたえてくださるか、そのみわざのすばらしさがじゅうぶんにわかつていないからです。私たちの祈りにこたえてくださる主の御力の偉大さを、じゅうぶんに認識していないからです。

私たちがこのような無力さをあじわうとき、祈りがたりないことを忘れて、ついほかに理由をもとめがちではないでしょうか。そのひとつに、つぎのようなものがあります。「私たちの敵は悪魔です。敵対する悪魔の力はつよいのです」。しかし、イエス様は悪魔を打ちまかされたおかたです。ですから悪魔はイエス様のまえからは逃げだします。私たちが祈るとき、悪魔はイエス様のまえに屈服し、悪魔にとらわれている者はそこから解放されます。また、つぎのような理由もよくあげられます。「いまの世界は悪魔に支配されていて、ほんとうにおそろしい世界です」。

しかし、私たちは祈りをとおして、この世の思い、肉の思いから解放されることができます。祈りの霊はこの世の霊を追いはらいます。さらに、つぎのような理由もよくあげられます。「みことばがまかれた土地がひじょうにかたいので、みことばが根づくのがむずかしいです」。じつさい土地はいつでもどこでもかたく、いつでもどこでも主の勝利があきらかになるのはちよっと見ると困難に思われます。しかし聖書はつぎのように述べています。

ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表わし、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります。

(ヤコブ 5・16)

私たちが祈れば、かならずなにか起こります。力のないところに、主の力と権威が生まれます。敗北しかなかったところに、イエス様の勝利と全能があきらかになります。無力感と無関心が、「イエス様のために生き、働きたい」という、もえるような願いに変えられていきます。

ここで、いままでごいっしょに考えてきたことをすこし整理してみましょう。

祈りをやめることは、罪です。

そして祈りをやめることは、主の命令にそむくことであり、主をけがすことであり、聖霊を悲しませることです。

また祈りをやめることこそ、なにごともし起こらない原因であり、あらゆる罪の誘因であり、霊的な力のなさの原因です。

Ⅱ 祈らないことによつて私たちは「だれにたいして」罪をおかすのか

祈らないことは罪です。ここまで私たちは、祈らないことが「なぜ」罪なのか、ということをごいっしょに考えてきました。そしてこれから、「だれにたいして」罪をおかすのかということについてよく考えてみたいと思います。

私たちは、祈らないことによつて「だれにたいして」罪をおかすのでしょうか。

1 祈らないなら、私たちは主ご自身にたいして罪をおかします。

2 祈らないなら、私たちはほかのひとびとにたいして罪をおかします。

3 祈らないなら、私たちは自分自身にたいして罪をおかします。

これらは、とてもたいせつなことです。というのは、主は私たちが「祈らない罪」から解放されて、よろこびにあふれたまことの祈りの生活にはいることを望んでおられるからです。

1 祈らないなら、私たちは主ご自身にたいして罪をおかします

祈らないことによって、私たちは「だれ」にたいして罪をおかすのでしょうか。「主ご自身にたいして」です。サムエルが言ったことを、ここでもういちど見てみましょう。

私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて主に罪を犯すことなど、とてもできない。

(Iサムエル 12・23)

もちろん、すべての罪が主ご自身にたいする罪です。「主ご自身にたいする罪ではない罪」などという罪はありません。ダビデはつぎのように告白しています。

私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。

(詩篇 51・4)

ダビデが告白した罪とは、どのようなものだったのでしょうか。ダビデはバテ・シェバと姦淫

をおかしました。そのことによつて、ダビデはバテ・シェバにたいして罪をおかしました。またダビデは、彼女の夫ウリヤを死に追いやり、ウリヤにたいして罪をおかしました。そしてそれはまた、かれの兵士たちにたいする、さらにはかれの国民にたいする罪でもありました。しかし、なによりもまず第一に、その罪は主ご自身にたいする罪だったのです。

「息子は言った。『おとうさん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。』」
(ルカ 15・21)

父親にこのように言つた放蕩息子、湯水のように財産を使い、遊女たちにたいして姦淫の罪をおかしました。またかれは友人たちにたいしても罪をおかしました。なぜならかれは友人たちの模範になり、主を証しするひとにならなければならなかつたからです。しかしかれがおかした罪は、まず「天にたいして」、つまり主ご自身にたいする罪だったのです。

祈りとはなんでしょうか。祈りとは、「主のみこころが行なわれる」ことを目標とした、主との共同作業です。だから祈らなければ、主のみこころが私たちをとおして行なわれることがなくなつてしまいます。このことから、祈らないことはまず第一に、主ご自身にたいする大きな罪であることがわかります。祈らないなら、私たちはまず主にたいして罪をおかします。私たちには、「祈りにたいする主のお答え」としてしか体験できないことがたくさんあります。私たちには、それがどうしてなのか、なぜなのかはわかりませんが、事実そうなのです。主は偉大なおかたであり、いつもすばらしいことを行なおうと待つておられます。しかもそれを、「私たちの祈りへ

のお答えとして」なさりたいのです。

「わたし（主）はイスラエルの家の願いを聞き入れて、次のことをしよう。」

（エゼキエル 36・37）

このみことばは、「イスラエルの家が祈らなければ、主は願いを聞き入れてくださらない」ということを意味しています。ですから、祈らない者は主のさまたげになります。なにことも起こらないとき、祈らない者はその責任を問われます。しかし祈るひとは、主がそのひとをとおしてあふれるばかりの祝福をなされださせるくだとなります。そして祈るひとは、神のご計画がそのひとをとおして実現されるためのうつわとなります。

いままで学んできたことは、ほんとうにたいせつなことです。祈らないなら、私たちはまず、主ご自身にたいして罪をおかすのです。しかしそれだけがすべてではありません。

2 祈らないなら、私たちはほかのひとびとにたいして罪をおかします

私たちは祈らないことによって、だれにたいして罪をおかすのでしょうか。「ほかのひとびとにたいして罪をおかす」というのがつぎの答えです。ここでもういちど、サムエルの告白を思いだしてください。

私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて主に罪を犯すことなど、とてもできない。

（Iサムエル 12・23）

このなかで「あなたがたのために祈るのをやめて……」というところに注意してください。私たちのまわりのひとびとは、悩み、苦しんでいます。悩み、苦しんでいないひととはひとりもないのです。精神的に悩み、苦しみ、そしてつかれはて、まいにちおもしろい足をひきずりながら生活しています。これらの苦しみ悩んでいるひとびとのために、私たちはなにができるのでしょうか。私たちにできるただひとつのことは、「かれらのために祈る」ことです。かれらのために主のみもとに行くことであり、かれらを主のみもとに連れて行くことです。私たちが祈るとき、おおいなる救い主は、悩み、苦しんでいるひとびとのひとりひとりにご自身を現わしてください。私たちが祈らないなら、これらのひとびとは主のたすけ、恵み、力、祝福を体験することができないのです。だから、私たちがほかのひとびとのために祈らないなら、それはそのひとびとにたいする罪となるのです。

ここですこし考えていただきたいのですが、あなたが祈りの力を信じるなら、いったいどんなことが起こるでしょうか。そしてキリストにぞくするすべてのひとびとが、祈りのために妥協しないで身をささげるなら、どのようなことが起こるでしょうか。それによって、ものすごく大きな霊的な目ざめの波が起こり、ひろがっていくにちがいありません。

私たちはだれでも、祈ることによって、主によって新しく生きる力をあたえられ、主の御手にあるうつわのひとつとなることができます。きつといまも、あらたに祈りのご奉仕のために主に身をささげたいというかたがたがおられることと思います。そのかたがたは、つぎのようなころがまえで祈りの生活にはいることができます。『主よ。私はあなたのみこころに

かなった祈りびとになりたいのです。どんな犠牲をはらってでも、私はひとびとがイエス様と出会うための祈りのご奉仕、とりなしのご奉仕の人生をおくりたいのです」。

あなたの家族、あなたの親戚のなかにはまだイエス様をごぞんじないかたがおられるのではないでしょうか。あなたのまわりには、まだ福音をごぞんじないかたがおおぜいおられるのではないのでしょうか。あなたは、かれらのために祈る義務があります。あなたの祈りをおして、主の力が働き、主のみわががかれらのうえにあきらかに現わされなければなりません。あなたが真剣に祈ることによって、主はかれらに救いが必要であるかをしめし、救い、解放してください。そしてまた、あなたの祈りによって、主はかれらをまことのよろこびで満たし、主の御手にあるうつわとしてもちいてくださるのです。

私たちはひとびとが救われるまで、解放されるまで、祈りつづけなければなりません。主は、あなたが主に信頼して祈りつづけることを望んでおられます。あなたの祈りをおして、多くのかたが主のところにこころを開き、かれらの生活のなかで主のご計画が実現されることを望んでおられるのです。

このように、あなたが祈らないなら、あなたは主ご自身にたいして、またほかのひとびとにたいして、罪をおかすのです。

3 祈らないなら、私たちは自分自身にたいして罪をおかします

祈らないなら、私たちは「だれにたいして」罪をおかすのでしょうか。「自分にたいして」で

す。私たちはつぎのように確信しています。祈りによってそのひとのおかれている状況が変わるだけでなく、祈るひとまた変えられていきます。祈るひとは、主としたしい語らいができ、主をもっとよく知ることができ、主のご臨在と力とを経験します。それによって祈るひとは変えられます。主としたしい交流をもつひとの生活は、おなじ状態にとどまることがありません。主のために実を結びたいと望むなら、そして主の勝利にあずかりたいと願うなら、もっと主に近づいて祈りのひととならなければなりません。御霊に満たされたいと思うなら、聖霊によって、つまり祈りの霊によって、動かされ導かれなければなりません。

そういうわけで、祈らないひとは「自分自身にたいして」罪をおかしているのです。つまり、祈らないことによって、自分自身を主のまえにまったく意味のない存在にしてしまうのです。ひとは、なんの実も結ぶことができず、いつも敗北した状態にとどまっているとき、祈らないことについて自分自身で責任を負わなければなりません。だから、祈らないことは自分自身にたいして罪をおかすことになるのです。祈らないなら、自分自身をだめにしてしまい、神の祝福をいただく機会を自分から閉ざしてしまい、自分自身をもっとも不幸にしてしまうのです。これ以上おろかなことがあるでしょうか。私たちが祈るとき、あふれるばかりの祝福がそがれます。しかし私たちが祈らないなら、主は祝福してくださることがおできにならないのです。だから、祈るのをやめることは、主にたいして、ほかのひとびとにたいして、また自分自身にたいして、言葉で言いあらわすことができないほどの罪となるのです。

いま、私たちはなにをすればいいのでしょうか

おわりに、私たちはなにをすればいいのかをいっしょに考えてみましょう。

まずなによりも私たちは、あいまいなことを捨てて主のまえに正直に告白することがとめられています。「私は主に、ほんとうに真剣に祈りませんでした。私は祈りの生活を知りませんでした。私は主にたいして、ほかのひとびとにたいして、自分自身にたいして、大きな罪をおかしてきました」。

そのつぎには、個人的な決断をすることがもとめられます。この「個人的な決断」とはサムエルがしたような決断です。「私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて主に罪をおかすことなど、とてもできない」。これはまったく個人的な決断でした。「私はとてもできない」。つまりサムエルはつぎのように言ったのです。「ほかのひとたちがどういふことをとるか私にはわかりません。イスラエルの民がどういふ決断をするか私にはわかりません。しかし私は私のすることを知っています。私は決断をしました。私は祈りの生活に献身することに決めました。私もまた、あなたがたのために祈るのをやめて主に罪をおかすことなど、とてもできない」と。

私たちもいま、祈りについて無関心で、表面的なあいどをとってきたことを主に告白しましょう。すべてにまさっていちばんたいせつなご奉仕は祈りのご奉仕です。私たちがこの祈りのご奉仕をないがしろにしてほかのことでいそがしくしていたことを告白しましょう。そしてさらに、まったくはつきりとした個人的な決断をしましょう。「ほかのひとびとがどう考え、どうしようと、私はかまいません。私自身は、祈りのご奉仕に献身します」と。

この章を終わるにあたり、「祈りをやめること」を克服するためのたすけとなる、たいせつな七つのことをまとめておきましょう。

1 まいにち、あなたがひとり主といっしょにいる時間を決めてください。主と語り、祈ることとは、主のものとなったすべての者のつとめです。

2 祈るまえにみことばを読んでください。そうすることによって主のご臨在があなたに意識されるようになります。みことばをとおして、主があなたに語ってくださるようにしましょう。神のみことばは、あなたを祈りへとかりたてます。

3 その日あなたに起こったすべての悩みを主に申しあげなさい。あなたの重荷となることを主に申しあげ、すべてを意識して主にゆだねなさい。

4 どんな事情があっても、形式的に祈ることをさけなさい。すべてのことについて主に語る習慣をつけなさい。台所でも、電車のなかでも、自転車にのっているときにも、いたるところであなたは主を呼び求めることができます。この主との語らいはともかんたんです。子どもが母親と語るように、幼子のように主と語ってください。

5 あなたの祈りについて、神のみことばが告げることを真剣に受けとりなさい。アブラハム、サムエル、エレミヤ、ダニエルの祈りがどのようであったかを読みなさい。初代教会の祈りについて真剣に考えなさい。それによって、主はあなたに新しくなにかを語ってくださるにちがいありません。

6 「祈りの名簿」をつくりなさい。救われてほしいひと、祝福されてほしいひと、主にもちい

7

ていただきたいひと、すべてのひとの名まえを書きだしなさい。そしてそのひとびとのために規則たたく祈りなさい。主のおやくそくにもとづいて、幼子のように主の奇蹟を待ち望みなさい。

あきらめてはいけません。主のまえに祈りつづけなさい。絶えず祈りなさい。つまり意識して主に祈り、主との語らいのなかにとどまりなさい。

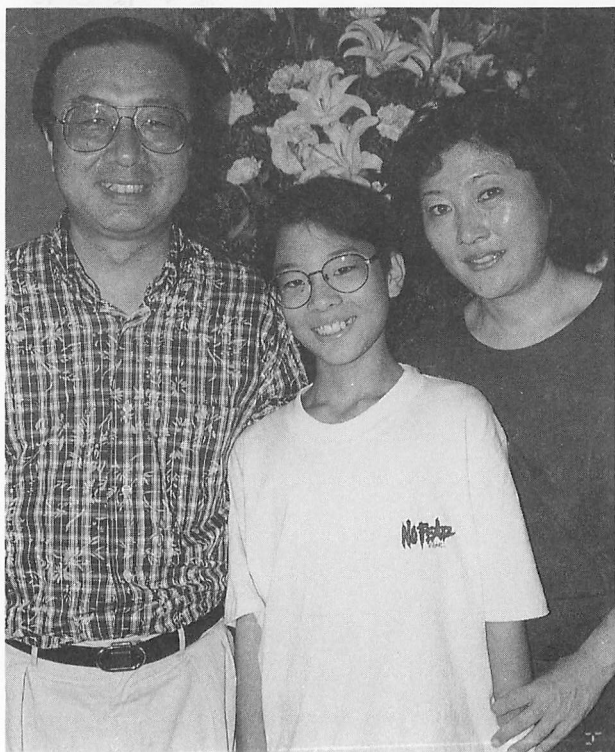
何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもつてささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

(ピリピ 4・6、7)



▲武井秋子ちゃんと野口順ちゃん。

▼ロサンゼルス集会の杉山さんご一家。



祈りがさまたげられないために

同じように、妻たちよ。自分の夫に服従しなさい。たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによって、神のものとされるようになるためです。それは、あなたがたの、神を恐れかしこむ清い生き方を彼らが見るからです。あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく、むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです。むかし神に望みを置いた敬虔な婦人たちも、このように自分を飾って、夫に従ったのです。たとえばサラも、アブラハムを主と呼んで彼に従いました。あなたがたも、どんなことをも恐れないで善を行なえば、サラの子となるのです。同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。最後に申します。あなたがたはみな、心をつにし、同情し合い、兄弟愛を示し、あわれみ深く、謙遜でありなさい。悪をもつて悪に報いず、侮辱をもつて侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。「いのちを愛し、幸いな日々を過ごしたいと思う者は、舌を押えて悪を言わず、くちびるを閉ざして偽りを語らず、悪から遠ざかって善を行ない、平和を求めてこれを追い求めよ。主の目は義人の上に注がれ、主の耳は彼の祈りに傾けられる。しかし主の顔は、悪を行なう者に立ち向かう。」

もういちど7節をよく見てみましょう。

同じように、夫たちよ。妻が女性であって、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。

(Ⅰペテロ 3・7)

この章で私たちは、この聖句の最後の部分、「あなたがたの祈りがさまたげられないため」ということについて、聖書から学んでみたいと思います。

その当時の信者たちにとっては、まいにち祈ること、しかも夫と妻とが主のまえにしずまつてともに主の御名を呼び、祈ることはあたりまえのことになっていました。

「あなたはまいにち妻といっしょに、または夫といっしょに祈っていますか？」これは、たいへん重要な問いかけです。「夫と妻がいっしょに祈ることなどめつたにない」または「ぜんぜんない」と答える信者がもしあれば、その夫婦をとおして主が思いどおり、じゅうぶんに働くことがおできにならないのは、とうぜんの結果です。

聖書をとおして私たちは、祈りがひじょうに有効に働く力であり、祈りの答えとしてすごいこと、たとえば奇蹟を起こしうる「力」となることを知っています。そして私たちの経験もまた、「祈り」というきわめて強力な武器が主から私たちにあたえられているということをものがたっています。「祈り」は、全宇宙を支配するおかたの御手を動かす「力」です。

しかしそれとは反対に、「祈り」がまったく有効に働かず、たんなる言葉をならべるだけに終

わり、なにとも起こらないという可能性もあります。ですからペテロは「祈りが聞きとどけられないさまたげ」について書きしるしたのです。

私たちがいくら祈っても、とりのぞかれていない「さまたげ」があるために、主がその願いを聞きとどけてくだらないことがよくあります。主がもし、そのような「さまたげがある情況」にもかかわらず私たちの願いを聞きとどけてくださるとしたら、それは決して主のご栄光にはなりません。

主との関係がくもったものとなり、私たちと主とのあいだにかべができてしまうとすれば、それは主のせいではなく、つねに私たちのせいです。私たちはみなこの事実をはっきりとみとめなければなりません。というのは、私たちはしばしばそのことを経験するからです。

聖書は、私たちの祈りを主が聞きとどけてくださるためにとりのぞかれなければならぬ「さまたげ」がなんであるかをはっきりとしめています。そのいくつかを見てみましょう。まず、「こころにいだく不義」と、「愛のない、思いやりのない冷淡さ」についてつぎのように書かれています。

もしも私の心にいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。

(詩篇 66・18)

寄るべのない者の叫びに耳を閉じる者は、自分が呼ぶときに答えられない。

(箴言 21・13)

また、つぎにとりのぞかれなければならないさまたげは、「こころのなかの偶像」です。

「人の子よ。これらの者たちは、自分たちの偶像を心の中に秘め、自分たちを不義に引き込むものを、顔の前に置いている。わたしは、どうして彼らの願いを聞いてやれようか。」

(エゼキエル 14・3)

さらに、「主のものをぬすむこと」もまた、「さまたげ」のひとつです。

「あなたがたの先祖の時代から、あなたがたは、わたしのおきてを離れ、それを守らなかった。わたしのところに帰れ。そうすれば、わたしもあなたがたのところに帰ろう。」

——万軍の主は仰せられる。——しかし、あなたがたは、『どのようにして、私たちは帰ろうか。』と言う。人は神のものを盗むことができようか。ところが、あなたがたはわたしのものを盗んでいる。しかも、あなたがたは言う。『どのようにして、私たちはあなたのもを盗んだでしょうか。』それは、十分の一と奉納物によつてである。あなたがたはのろいを受けている。あなたがたは、わたしのものを盗んでいる。この民全体が盗んでいる。十分の一をことごとく、宝物倉に携えて来て、わたしの家の食物とせよ。こうしてわたしをためしてみよ。——万軍の主は仰せられる。——わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。」

(マラキ 3・7-10)

つぎの聖句は、「兄弟との和解」がどうしても必要だと指摘しています。ひとを許したくない者は、みずから天国への入口を閉ざすことになります。

「だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行つて、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。」

(マタイ 5・23、24)

ヤコブもまた、「悪い動機」が祈りの聞きとどけられない原因になることを、つぎのように書いています。

願つても受けられないのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。

(ヤコブ 4・3)

このように「祈りがさまたげられる」ことは、じつに多いのです。「祈りのさまたげ」は現実存在します。しかもそのさまたげは、大きくはつぎのふたつにわけられます。

第一のさまたげは、「私たちを祈りからひきはなすさまたげ」であり、

第二のさまたげは、「私たちの祈りが聞きとどけられることを不可能にするさまたげ」です。

I 私たちを祈りからひきはなすさまたげ

まず「私たちを祈りからひきはなすさまたげ」について、すこしくわしく見てみましょう。このさまたげについては、つぎの五つがあります。

1 軽率さ

2 聖書を軽視すること

3 働きすぎ

4 この世の霊

5 まずい時間の配分

1 軽率さ

第一は、「軽率さ」です。人間は気ままな存在であり、自分かつてなことをしたり、配慮のないたいどをとったり、なんの抵抗もなく動かされたりしがちです。その結果、祈りたいというところからの願いはときがたつにつれて消え去ってしまうことがよくあります。いぜんは主に近づくことはよろこびでした。しかしいまは、主からまったくはなれて無関心でいて平気だということが、よくあります。この軽率さ、いいかげんな精神が信者をとらえると、サタンはよろこびます。というのは、そのようになった信者はサタンにとって、もはやなんの危険もなくなるからです。

2 聖書を軽視すること

第二は、「聖書を軽視すること」です。もはや神のみことばを読もうとしなくなるなら、まもなくそのひとは祈ることをやめてしまいます。飢えかわきをもつて詩篇を読む者は、まったく自発的に主のみもとにいそぎ、主を賛美し、あるいは主に自分のところにあるすべてのことをうちあけます。しかし、主のみことばをないがしろにする者は祈りをやめます。

3 働きすぎ

第三は、「働きすぎ」です。主のためにいそがしく働いているにもかかわらず、主とせずに語り、交わる時間がぜんぜんない、ということがあります。主のお仕事でいそがしい、けれども「主ご自身のための時間」がない。これはなんと悲劇でしょうか。もちろん主は、主のために働こうとしないなまけものをもちいたり、祝福したりしようとは思われません。しかし主のためにすこしの時間もつくりだすことができないひとは、おなじように祝福されません。

4 この世の霊

第四は、「この世の霊」です。この世の霊は祈りをさまたげます。この世の、地上の目標だけを追い求め、この世の霊によって支配されてしまうひとは、祈ることについてすこしも進歩しません。信者であるにもかかわらずこの世の霊に支配され、この世を愛し、力とお金を求めるということはありうることです。

5 まずい時間の配分

第五は、「まずい時間の配分」です。私たちは、朝はやくから夜おそくまでひじょうにいそがしいことがあります。しかしそれが習慣になってしまふとたいへん危険です。それはもつともあぶない状態だということを知らなければなりません。まいばんおそく寝て、朝はやく起きることは不可能です。そして、朝、主との個人的なしずかなひとときを過ごさないひとの祈りの生活は、すぐにだめになってしまいます。

Ⅱ 私たちの祈りが聞きとどけられることを不可能にするさまたげ

おおぜいのひとびとは祈ります。にもかかわらず主からなんのお答えもいただけません。しかしその責任は主にあるのではなく、私たち人間の側にあるのです。なぜ主はしばしば、私たちの願いを聞きとどけることができないのでしょうか。そのことについて、ペテロ第1の手紙の3章1節から12節を見ながら、「私たちの祈りが聞きとどけられることを不可能にするさまたげ」について、ごいっしょに考えてみたいと思います。それらのさまたげは、つぎの七つです。

- 1 罪にとどまること
- 2 おたがいの不一致
- 3 この世と調子をあわせること
- 4 ごう慢でおごりがあること

5 愛が欠けていること

6 不純なくちびる

7 良心の呵責

1 罪にとどまること

私たちの祈りが主に聞きとどけられることを不可能にする原因の第一は、私たちが「罪にとどまる」ことです。

主の目は義人の上に注がれ、主の耳は彼らの祈りに傾けられる。しかし主の顔は、悪を行なう者に立ち向かう。

(I ペテロ 3・12)

私たちは、主が義人と呼んでくださるひとびとにぞくすることがたいせつです。

人間は、主イエス様、つまり義であるおかたにより頼むことによって、また、イエス様の義を自分のものにするることによって義人とされるのです。しかし、救われた者、義とされた者でありながら、それにもかかわらず罪にとどまることはありうることです。もちろん主は、そのようなときには私たちの願いを聞きとどけることがおできになります。私たちが罪にとどまると、主との関係はくもり、主は私たちの祈りにおこたえになることができなくなります。

この本のほかの章でくわしく学ぶ聖句を、もういちど見てみましょう。ダビデはつぎのように告白しています。

もしも私の心にいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。

(詩篇 66・18)

私たちがこころのなかにどのような罪の存在をも許さず、光のうちを歩むとき、主は祈りにこたえてくださいます。しかし、私たちが罪にとどまることは、主が祈りを聞きとどけることができないうひとつの原因です。

2 おたがいの不一致

第二は、「おたがいの不一致」です。ペテロ第1の手紙の3章1節から7節までで、ペテロは「結婚生活における行動のための忠告」をあたえています。ペテロ自身も結婚しており、夫と妻とのあいだのおたがいの関係が、祈りが聞きとどけられるために決定的に重要であることをよく知っていました。

妻が、主が望んでおられるようにふるまおうとしないならば、つまり夫に服従したくないならば、彼女の祈りはさまたげられます。ですから「妻たちよ。自分の夫に従いなさい」と、はつきりしるされているのです。それにつづいて、なぜ従うべきかという根拠があげられています。「たとい、みことばに従わない夫であっても、妻の無言のふるまいによつて、神のものとされるようになるためです」と。つまりそれはご主人の救いのためである、とここにはっきりと書いてあります。

もちろん妻は、主の目から見て夫より価値の低いものでは決してありません。しかし主は、妻が夫に従わなければならないと要求しておられます。したがって妻は祈りが聞きとどけられないときには責任があります。多くのばあい、彼女が夫に従いたくないからそうなるのです。祈りが聞きとどけられないときには、もちろん夫にもおなじように責任があります。ペテロはつぎのように書いています。

同じように、夫たちよ。妻が女性であつて、自分よりも弱い器だということをわきまえて妻とともに生活し、いのちの恵みとともに受け継ぐ者として尊敬しなさい。それは、あなたがたの祈りが妨げられないためです。

(Ⅰペテロ 3・7)

この聖句は、夫がまことの愛をもつて妻を愛するべきであり、夫と妻がおたがいに信頼しあうべきであり、夫婦のあいだに完全な一致がなければならない、ということを意味しています。ペテロはまた、しもべたちにもつぎのように言っています。

しもべたちよ。尊敬の心を込めて主人に服従しなさい。善良で優しい主人に対してだけでなく、横暴な主人に対しても従いなさい。

(Ⅰペテロ 2・18)

これらのみことばをよく考えてみるなら、私たちがまわりのひとびととただしい関係をもつことがいかにたいせつであるかがよくわかります。マタイの福音書に、つぎのようなイエス様のことばがあります。

「だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行つて、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。」

(マタイ 5・23、24)

私たちのほかのひとびとにたいするまちがった関係は、私たちと主とのあいだのかべとなりです。しかし、さんねんなのは、おたがいに対立しあつていて、祈りをさまたげるものをとりのぞこうとしない信者たちがおおぜいいることです。もちろん、だれをも傷つけないということはひじょうにむずかしいことであり、すべてのひととうまくやること、またすべてのひとをよるこぼせることは不可能です。ときには、誤解をさけることができないあいもあります。私たちはよく、目に見えることだけ、表面だけ、一部分だけを見て判断してしまい、その背後にあるもの、そのひとの真の動機などに気がつかないで判断してしまいます。はつきりしているのは、私たちはたいいていのばあい、まちがった判断をしているということです。

しかしそれ以上に悲劇的なことは、キリスト者のなかに、光のなかに来たいと思わないひとびと、和解したいと思わないひとびと、謙遜になりたいと思わないひとびとがいるという事実です。だれかにたいしてこころのなかで敵意をもっていたり、許したくないと思っていたり、罪にたいしてかるがるしくふるまったりすることはたいへん危険です。このようなひとびとの祈りを、主が聞きとどけることがおできにならないのは、不思議でもありません。

3 この世と調子をあわせること

私たちの祈りに、なぜ主はしばしばこたえてくだらないのでしょうか。その原因の第一は、私たちが「罪にとどまること」であり、第二には「おたがいの不一致」です。そして第三は、「この世と調子をあわせること」です。

あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく、むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです。

(I ペテロ 3・3、4)

この聖句は、現在にもあてはまります。この聖句はキリスト者である妻や娘が「着るものなどだらしがなくてよい」とか、「時代おくれのセンスのわるい服を着ているほうがいい」と言っているわけではありません。信者である妻や娘は、信者であるにふさわしい服を着るべきです。きちんとして魅力的なかつこうをたもつことは、主のためのひとつの証しです。みだれてだらしのないかつこうは、決して主のための証しにはなりません。

しかし、ほかのひとの目をひきつけるために、罪を誘発するような衣装やかざりものを身につけるなら、それはもはや、どうでもいいことはありません。すべてのことにおいて主イエス様が証しされ、あがめられなければなりません。私たちは決してこの世と調子をあわせてはいけません。

イエス様を愛し、イエス様に従順な信者はだれでも、この地上では異分子です。「この世と調子をあわせること」は、主の目から見て、妥協以外のなにものでもありません。このことについては、イザヤ書3章16節から26節をじっくりにお読みになると参考になると思います。

また、つぎのように自問自答してみることも大きなすけになります。

「私はキリスト者にふさわしい外見をしているだろうか」。

「私はキリスト者が語るように話しているだろうか」。

「私はキリスト者が歩むように歩んでいるだろうか」。

「私はキリストのかおりをはなつ者になつていだろうか」。

これらの問いかけについて、私たちは祈りがさまたげられないために、いちどしずかに考えてみようではありませんか。

ここまで学んだことについて、まとめてみましょう。

きちんとした魅力的な外見は、主を証しするためにたいせつです。夫の救いにとって、周囲の救いにとって、キリスト者である妻が家庭をきちんと守り、そのことによってイエス様が証しされることはたいせつなことです。家のなかのみだれていたり、だらしなかつたりすることは、まわりのひとびとにつまずきをあたえます。

妻が家庭のなかでのけものにされていたり、ほんとうに愛されていなかったり、ただきつかわれるだけだったりすれば、主婦として家庭をきちんと守っていくことは困難です。このような妻は、いくら自分でそうしようとつとめてもなにもできないでしょう。しかし、イエス様のみも

とに行き、イエス様により頼んでいくなら、主のあわれみと恵みによって家庭をきちんと守っていくことができるようになります。そして、主はそのことをとおしてご自身の祝福を現わしてください、あなたの祈りはさまたげられることなくこたえられるようになります。

あなたの家庭の状況がどのようなであっても、あなたは妻として夫に従い、家庭をきちんと守るべきです。まだ救われていないあなたの夫は、それをあなたに期待しています。主もまたそのことを望んでおられます。そのことをとおして主は祝福してください、あなたの未信者の夫をかならず救ってください。

4 こう慢でおごりがあること

第四は、私たちが「こう慢でおごりがあること」です。

あなたがたは、髪を編んだり、金の飾りをつけたり、着物を着飾るような外面的なものでなく、むしろ、柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです。

(I ペテロ 3・3、4)

ここでペテロが書いているように、髪をあんだり、金のかざりをつけたり、着物を着かざったりすることは、その当時の未信者の女性の特徴でした。それによって女性は男性を自分にひきつけ、自分の外面的な魅力のとりこにしようとしたのです。しかしこれらのことと、信者である婦

人がたがきちゃんと身なりをととのえるために髪をあんだり、結婚指輪をはめたりすることは、まったく意味がちがいます。問題は動機と目的です。もちろん身をかざることによりあまり深入りするのは、信者の婦人にとって危険です。ですからペテロはつぎのように、たいせつなことを書きくわえているのです。

柔和で穏やかな霊という朽ちることのないものを持つ、心の中の隠れた人がらを飾りにしなさい。これこそ、神の御前に価値あるものです。
(I ペテロ 3・4)

外側のかざりは人間のためですが、こころのなかの「柔和でおだやかな霊」というかざりは主のためのものであり、主のみまえに価値あるものです。私たちのこころのなかにごう慢とおごりが根ざすとき、主は私たちをしりぞけられなければなりません。

…神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。(ヤコブ 4・6)

ここで言われている高ぶる者とは、主を知らないひとびとだけをさしているわけではありません。神はあらゆる高ぶる者をしりぞけられるのです。主は私たちをしりぞけられなければならないか、あるいは祝福してくださるかのどちらかです。

主のみもとに来るひとは、主の考えられないほどの偉大さと神聖さを経験し、またどうじに自分のみじめさと無価値とを知るようになります。柔和でおだやかな霊をもっているひとびとは、祈りが聞きとどけられることを経験するようになります。

「ごう慢でおごりがあるたいどで主に近づこうとすることが、どれだけおそろしい悲劇であるかについては、ルカの福音書のなかではつきりとしめされています。」

「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりにはパリサイ人で、もうひとりには取税人であった。パリサイ人は、立つて、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

(ルカ 18・10-14)

このふたりは、祈るというおなじ目的をもつて宮にのぼりました。パリサイ人の祈りの最初の言葉は「神よ…」です。「神さま…」ではありません。取税人の祈りの最初の言葉は「神さま…」です。この呼びかけにふたりのところがあらわれています。私たちもパリサイ人でなく、この取税人のようでありたいものです。

5 愛が欠けていること

第五は、「愛が欠けていること」、つまり愛の欠如、愛のたりなさです。

最後に申します。あなたがたはみな、心を一つにし、同情し合い、兄弟愛を示し、あわれみ深く、謙遜でありなさい。悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。

(Ⅰペテロ 3・8、9)

現代の多くの教会、また集会における大きな悩みは「愛が欠けていること」です。

まだイエス様を知らないひとびとが、自分のことだけしか考えないのとはとうぜんであり、しかたのないことです。しかしイエス様を信じる者のあいだで「愛が欠けていること」があらわになるならば、もはや主にたいして弁解のよちはありません。というのは、神の愛はすべてのキリスト者のところに、おしみなくそそがれているからです。主はひとりひとりの信者を、主の愛がながれるくだとしておもちいにな리たのです。そのことを、ここでペテロはつぎのように私たちに語っています。「あなたが祈りが聞きとどけられることを経験したいのなら、祈りがさまたげられたくないなら、あなたのまわりのひとびとは、あなたから愛、親切、同情、理解を感じなければなりません」。「愛が欠けていること」は、祈りが聞きとどけられることのさまたげです。

また、私たちがあなたがたを愛しているように、あなたがたの互いの間の愛を、またすべての人に対する愛を増させ、満ちあふれさせてくださいますように。

(Ⅰテサロニケ 3・12)

あなたがほかの信者を愛するか愛さないかは、どうでもいいことはありません。あなたが身近にいる夫や妻をこころから愛するか愛さないかは、どうでもいいことはありません。あなたの祈りが「聞きとどけられるか聞きとどけられないか」は、あなたが「こころから愛するか愛さないか」にかかっているからです。

6 不純なくちびる

なぜ主は、私たちの祈りをしばしば聞きとどけることができないのでしょうか。第六の原因は、「不純なくちびる」です。

いのちを愛し、幸いな日々を過ごしたいと思う者は、舌を押えて悪を言わず、くちびるを閉ざして偽りを語らず、悪から遠ざかって善を行ない、平和を求めてこれを追い求めよ。

(イペテロ 3・10、11)

この聖句ではつきりとしめされているように、「不純なくちびる」があるところ、つまり真実でない、うそ、いつわりのくちびるがあるところ、おせじやうらぎり、悪意、無責任なおしやべりのくちびるがあるところ、またかげぐちや批判のくちびるがあるところでは、主は祈りを聞き入れてくださいません。

イザヤという預言者は、主によってひじょうに謙虚にさせられる経験をしました。イザヤは聖なる主を、自分の目で見たからです。そのときかれはおどろいて、つぎのように叫びました。

：私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。：私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。」

(イザヤ 6・1、5)

イザヤは神のしもべであり、神の預言者でした。神のことを通すくだとして、大きなやくわりをはたしました。しかし主を見たとき、かれは「私はけがれたくちびるの者だ。私はわざわいだ。私はほろびる」と叫ばざるをえなかったのです。むかしのらい病患者は、いつも「私はけがれた者です。私はけがれた者です」と叫ばなければなりませんでした。それとおなじように、イザヤは聖なる神を見ておどろいたとき、「私はけがれた者です」と叫ばざるをえませんでした。イザヤはそのあとすぐ、ひとりの御使いが祭壇からとった燃えさかる炭をかれのくちびるにふれさせたのでかれの不義がとりさられ、債務がゆるされ、きよめられて、そのうえであらためてひとつの使命をあたえられるという経験をしました。

私たちのばあいはどうでしょうか。私たちもまた「けがれたくちびる」をもってはいないでしょうか。テレビや新聞、雑誌など、マスコミに登場するひとびとは「いつわりのくちびる」をもち、そのくちびるによって多くのひとびとが影響を受けます。「くちびるを閉ざしていつわりを語らず、悪から遠ざかりなさい」という神のみことばは、ひじょうにたいせつです。

7 良心の呵責

最後に「良心の呵責」、つまり「良心が責められること」や「やましいところ」は、祈りが聞きとどけられない原因です。

むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。ただし、優しく、慎み恐れて、また、正しい良心をもって弁明しなさい。そうすれば、キリストにあるあなたがたの正しい生き方をのしる人たちが、あなたがたをそしったことで恥じ入るでしょう。

(Ⅰペテロ 3・15、16)

私たちが主をあおぎ見て近づくとき、やましさのない良心をもつことがたいせつです。このことは私たちがほかのひとびとといっしょにいるときにもたいせつなことです。パウロはつぎのように証しています。

そのために、私はいつも、神の前にも人の前にも責められることのない良心を保つように、と最善を尽くしています。

(使徒 24・16)

主にたいして、あるいはほかのひとびとにたいして、「良心の呵責」を感じるような状態にあるようなら、それは私たちの祈りが聞きとどけられない原因になります。私たちは主のまえにやましさのない良心をもっているでしょうか。あなたが妻や夫、子どもたち、親戚、友だち、そし

て仕事なかまを思うとき、あなたはやましさのない良心をもっているでしょうか。

あなたは祈りをはじめようとするとき、まだ解決されていないあれやこれを思いだすでしょうか。かくしていることや、主が祈りを聞きとどけられない「さまたげ」となっていることを思いだすでしょうか。日々の祈りにあたって、わたしたちはつぎのように主にお願ひしましょう。

「主よ。どうか私の信仰を深めてください。私に祈ることを教えてください。あなたのはたらきをさまたげるじやまものを、すべてとりのぞいてください」と。



▲黒江さんとお子さんたち。



▲奄美大島よろこびの集いで。奄美大島出身の友野さん(左)、蘇畑さん。

ここにいだく不義

もしも私の心にいづく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。

(詩篇 66・18)

もし、私たちが「こころのなかに罪を許容する」なら、つまり、こころのなかに罪の存在をゆるす、またはこころのなかに罪をいだいているなら、主は私たちの祈りを聞こうとはなさいません。聖句の後半には、「主は聞き入れてくださらない」とあります。つまり祈りを聞き入れてくださらないのです。じつは、主は聞こうと思われても、それができなくなるのです。私たちは、この「聞く」という言葉のかわりに「できる」という言葉をあてはめてみることもできます。つまり、私たちが「こころのなかに罪を許容する」なら、主は「おできにならない」のです。私たちが「こころのなかに罪をいだいている」なら、主の御手はしばらくしてしまいます。罪とはおそろしいものです。私たちの罪によつて主の御手がしばらくしてしまうという事実は、私たちの目をよくさまさせてくれるのではないでしょう。

主は、ご自身にぞくしている信者ひとりひとりのうえに、ゆたかな祝福をそそぎたいと願っておられます。しかし、ひとりひとりのこころのなかに「意識して、こころに残された罪」があるなら、主はなにひとつとして祝福なさることができません。主は全能のおかたです。その全能のおかたが「できない」と、神のみことが告げているのです。このように、全能であられる主の御手が働くことがさまたげられるのですから、私たち主に従う者の日々の生活における罪の問題はもつともっと真剣に受けとめられなければならず、考えられなければなりません。ペテロはつ

ぎのように書いています。

私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。

(Ⅱペテロ 3・18)

私たちは、成長しなければなりません。成長することは主によって命令されています。霊的な成長によってのみ、私たちはますます自分自身の罪深い性質を知ることができます。預言者エレミヤはつぎのように言っています。

人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だが、それを知ることができよう。

(エレミヤ 17・9)

聖書のどこを見ても、私たちがいまの体をもっているかぎり、この地上で罪のない状態になることができるとは書いてありません。私たちはひとりのこらず、けがれている者です。ですからいつも悔い改めなければならぬという経験をしています。

しかしここでつよく警告されているのは、私たちが「このころのなかに罪を許容し、そのどれいとなってしまふ」ということのおそろしさです。

罪は正直に告白されなければなりません。そして罪にたいしてはつきりとしたたいどがとられなければなりません。私たちは罪のゆるし、罪からの回復を必要としています。このころのなかに罪が許容されると、それは主と私たちとのあいだの大きなへだてのかべになります。そうすると

主はもはやご自身を啓示したり、私たちを祝福なさることができなくなってしまうれます。主は私たちが祝福なさりたいのです。しかしできないのです。主はご自身を啓示なさりたいのです。しかしできないのです。主は私たちと交わりをもちたいのです。しかしできないのです。これらの事実だけでも、私たちが「このころのなかに罪を許容することのおそろしさ」がよくわかります。預言者のイザヤは、神聖な主を見たとき、自分の罪深さに絶望してつぎのように叫びました。

私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。：そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」

(イザヤ 6・1、5)

またイザヤは、罪のおそろしさをべつのところでつぎのように言っています。

あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくだらないようにしたのだ。

(イザヤ 59・2)

罪は、神からの分離です。罪は聖なる神とのあらゆる交わりを不可能にします。ひとが罪をかくそうとすれば、祝福を期待することができません。ひとが罪を告白したくなければ、そのひとのすべての祈りはまったく価値のないものとなります。ダビデはつぎのように言っています。

もしも私の心にいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。

(詩篇 66・18)

このなかにでてくるひとつひとつのことばについて、ごいっしょに考えてみましょう。

1 「もしも」

はじめにでてくる「もしも」は、仮定をあらわします。ですから主を信じる者は、かならずしもこのころのなかに不義をいだく必要はないことを言外にしめています。しかし、「もしも」ということばがでてくる以上は、その可能性がある、私たちには「このころに不義をいだく」可能性があることをしめています。このことばをしるしたダビデは、じつさいに罪をおかしましたが、「このころのなかに罪を根づかせなかった」ひとでした。ですからかれは「主が聞き入れてくださった」ことを経験することができたのです。ダビデは書いています。

私は、この口で神に呼ばわり、この舌であがめた。∴確かに、神は聞き入れ、私の祈りの声を心に留められた。

(詩篇 66・17、19)

なぜ主は、かれの祈りを聞き入れ、かれの祈りにこのころをとめてくださったのでしょうか。なぜならかれは「このころのなかにある罪を許容しなかった」からです。そしてかれは、主に聞き入れられるにはどのように祈ればいいのか、信仰の勝利の生活をおくるにはどうすればいいかを生涯とおして学びつづけたのでした。

このことは誤解のないように、はっきりさせておかねばなりません。「このころのなかに罪を許容する」者の祈りは主に「聞き入れられ」ません。しかしダビデの祈りは主に「聞き入れら

れ」たのです。ですからかれは「どのような罪をも、こころのなかに許容しなかった」のです。

イエス様は、私たちの罪を、十字架におけるご自身のあがないの死によつて解決してくださいました。そして、きょうもイエス様は生きておられ、私たちのために弁護してくださいていますのです。私たちがイエス様を私たちのこころに受け入れることによつて、主は聖霊をとおして、私たちのなかに住んでくださいます。私たちが主に活動のよちをすべてあたえ、主が私たちをすべて支配なさるならば、「罪」は私たちのなかに、どんなわずかなよちも見いだすことができません。これこそが信仰の勝利のひけつなのです。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護してくださいさる方があります。それは、義なるイエス・キリストです。

(Ⅰヨハネ 1・9、2・1)

というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。

(ローマ 6・14)

ここでも、私たちがかならずしも罪をおかさなくてもいいことが明言されています。しかし私たちが罪をおかすならば、主は私たちにたいして心配し、配慮し、とりなし、弁護してくださいさる

のです。主のご計画と目標は、私たちが「罪によって支配されない」ようにすることです。巧妙な、狡猾な、かたちに残る罪、またおそろしい力をもった罪は、とうてい私たちのころのなかに許容しておくことはできません。このように、イエス様があらゆる罪にうちかつ勝利を提供してくださっていることを、主に感謝しましょう。

2 「私」

さて、さきほどの聖句の二番めのことは「私」です。「もしも『私』のところにいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない」とあります。この「私」ということは、真理が個人的に自分自身に関係づけられなければならないことをしめています。

私たちが聖書を読むとき、「知識を得たい」と思って読むのではなく、読んだことを意識して「個人的にあてはめる」ことがたいせつです。主は聖書のみことばをとおして、私になにを語ろうとなさるのでしょうか。主のみことばをとおして、私はなにを学べばいいのでしょうか。

この聖句のなかで詩篇の作者であるダビデが言っていることは、かれのまったく個人的な証しなのです。最初にあげた聖句がふくまれている詩篇66篇のなかで、かれはなんとも言っています。「私」、「私の」、そして「もしも『私の』」ところにいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない」と。

私たちが主のまえにしまつて、くりかえしくりかえし「主よ、私にお語りください。しもべは聞きます」というたいどをとることは、とてもたいせつです。そして私たちがこのようなたい

どをとるなら、主は、主のはたらきのさまたげになっていることがなにかを、私たちにしめしてください。そして私たちもまたここから正直に、つぎのように言うことができるのではないでしょうか。「もしも私のこころにいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない」と。私たちがこのろのなかに罪を許容し、罪をかくし、罪にこのろを支配させてしまうなら、それらの罪は主との交わりを不可能にしています。ですから、この深い意味をもつ聖句を自分以外のひとびとにあてはめることはまちがいです。私たちはこのみことばをまったく個人的に、「私自身にあてはめて受けとらなければなりません」。

ですから、ひとりひとりが自分を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。

(Iコリント 11・28)

この聖句がしめすように、真剣に「私」自身のこのろを吟味することは、日曜日の礼拝のときだけにかぎらず、まいにちまいにち、一瞬一瞬に必要です。

3 「こころにいだく」

はじめに見た聖句のなかの三番めのたいせつなことは「こころにいだく」です。いだくとは、「意識して許容する」、あるいは「支配させる」ということです。「もしも私の『こころにいだく』不義があるなら、主は聞き入れてくださらない」と。したがってここでは、キリスト者が生活のなかで自分のこのろのなかに「罪を許容する可能性」、「罪に支配されてしまう可能性」があるこ

とがはつきりと書かれています。私たちは聖書のなかで、それについてたくさんの実例を見ることが出来ます。そのひとりはアカンです。かれについてはつぎのように書かれています。

私は、分捕り物の中に、シヌアルの美しい外套一枚と、銀二百シエケルと、目方五十シエケルの金の延べ棒一本があるのを見て、欲しくなり、それらを取りました。それらは今、私の天幕の中の地に隠してあり、銀はその下にあります。
(ヨシユア 7・21)

アカンは、選ばれた民であるイスラエルにぞくしていました。アカンは信者でしたが、自分でよくわかっていながら神のいましめをやぶりました。また、聖書のべつのところにはバテ・シエバと姦淫の罪をおかしたダビデの例があります。かれはその罪をかくすために、彼女の夫を戦場の最前列におくり、夫はダビデが望んだようにそこで戦死しました。これは「意識して」行なわれた殺人でした。そのときダビデは思いました。すべてはうまくいった、だれもこのことを知らない。つまり、ダビデはまったく意識して、自分のころのなかで「罪を許容」し、それを秘密にしたのです。このできごとについては、サムエル記第2の11章2節から17節までと26、27節に書きしるされています。ダビデはのちに、つよい悔い改めへと導かれます。

さらに私たちは使徒の働き5章1節から11節までに、初代教会の信者の夫婦、アナニヤとサツピラについてしるされているのを見ることが出来ます。かれらは地所を売って、その代金の一部をとっておき、のこりを持ってきて使徒たちの足もとに置きました。かれらはそのようにすることを決して義務づけられていたわけではありませんでした。かれらはもとと代金を持つてくる

必要などなかったでしょう。しかしかれらは、あたかも代金の全額を主の自由裁量にまかせたかのようにふるまったのです。それははっきりとした「あざむき」でした。かれらはこころのなかで「罪を許容」したのです。そのため、かれらはそのばつとして死ななければなりませんでした。

これらの例は「罪を許容する」ことがなにを意味するかをしめしています。盗んだものをかくすことはうそであり偽善です。また、おなじように、私たちがあたかも姦淫をおかさなかったかのようにふるまうこともうそであり、偽善です。なぜなら、イエス様は「だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。(マタイ5・28)」と言っておられるからです。主にあけわたされていないものがあるにもかかわらず、すべてを主にささげたかのように信者たちのあいだでふるまうことはうそであり、偽善です。ここに「いなく」不義とは、「罪を許容する」こと、「罪と分離しない」こと、「うその、いつわりの、偽善の生活をおくる」ことを意味し、それは主にたいする不誠実以上の、ひどいことであり、うその、いつわりの、偽善のたいどです。

罪はあかるみにだされなければなりません。罪は告白されなければなりません。そのうえで、罪とのはっきりとした訣別が行なわれなければなりません。

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。

(箴言 28・13)

あなたのこころのなかで、あなたの家で、あなたの会社で、「意識的にかくされている罪」が

あるなら、そしてあなたがまだ告白していない負いめがあるなら、それは「許容された罪」なのです。主はそのことについて、あなたに語りつづけられます。主はあなたにいかなるやすらぎもおあたえになりません。私たちは祈るとき、いつもこの罪のことを思いださされるでしょう。

「だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行つて、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。」

(マタイ 5・23、24)

もしあなたが意識的にかくされている罪、許容されている罪、まだ告白されていない負いめをもっているなら、それは主のまえに告白されなければなりません。罪とのはっきりとした訣別が行なわれなければなりません。それらは、主があなたをそこから完全に解放したいと願っておられる罪なのです。祈りが聞き入れられるかどうかは、「こころにある罪を許容するかしないか」にかかっています。

愛する者たち。もし自分の心に責められなければ、大胆に神の御前に出ることができ、また求めるものは何でも神からいただくことができます。… (Iヨハネ 3・21、22)

4 「不義」

はじめに見た聖句のなかの四番めのことは「不義」です。「もしも私のこころにいだく『不

義』があるなら主は聞き入れてくださらない」とあります。ここでは神の祝福をさまたげるものが、人間の罪にはかならないということがしめされています。イエス様は、ご自分の死によって私たちがあがなってくださいました。私たちのからだもころもすべてイエス様のものです。ですから、私たちは生活のなかで「罪を許容する」権利をもっていません。

…「主はご自分に属する者を知っておられる。」また、「主の御名を呼ぶ者は、だれでも不義を離れよ。」

(Ⅱテモテ 2・19)

この聖句によってしめされているのは、「あらゆる罪からはなれなさい」ということです。主にたいするどのような不従順も、私たちは意識的に拒否しなければなりません。主のご命令はまた、つぎのようにきわめてはっきりしたものです。

「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならぬ。」

(Ⅰペテロ 1・16)

イエス様が姦淫の女におっしゃったことは、そのまま私たちにもあてはまります。

「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」

(ヨハネ 8・11)

はじめの聖句のなかの五番めのことは、「『こころ』ということばです。『もしも私の『こころ』にいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない』とあります。主が私たちをごらんになったとき、どうしてもゆるせない、許容できない罪は「『こころ』の罪です。ひとは自分のこのろのなかの罪が、だれにもわからなければそれでいいと思いますが、主のご判断はまったく違います。ダビデはつぎのように告白しています。

ああ、あなたは心のうちの真実を喜ばれます。

(詩篇 51・6)

また、主が「『こころ』を見られることは、つぎのみことばによってもわかります。

「∴(主は) 人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」

(Iサムエル 16・7)

あなたの目はあまりきよくて、悪を見ず、∴

(ハバクク 1・13)

罪が許容されるところでは主は働かれません。主は決して罪をみのがすことをなさいません。主は罪を罰せずにはおかれません。主は罪をあかるみにだされずにはおかれません。ですからそれらの罪は、告白され、ゆるされなければならぬのです。主は決して悪を祝福することができず、罪を祝福することができません。主はそれらを罰しなければならぬのです。

6 「聞き入れてくださらない」

六番めのことは、「聞き入れてくださらない」です。「もしも私のところにいだく不義があるなら、主は『聞き入れてくださらない』のです。これについてすこしくわしく考えてみましょう。『聞き入れてくださらない』ということばは、つぎの三つの意味があります。

- ・主は聞き入れてくださらない。
- ・主は導いてくださらない。
- ・主はもちいてくださらない。

・主は聞き入れてくださらない

私たちがごろのなかに罪を許容すると、主は私たちの祈りを聞き入れてくださいません。このことは、私たちが主のまえに自分自身をひじょうにきびしく吟味するきっかけとなるはずですが、私たちがたくさんの祈りをささげたにもかかわらず、祈りのお答えをほんのわずかしきただけないことがあります。私たちは祈ります。しかしなにも起こりません。私たちはまだ救われていない家族のために祈ります。しかしなにも起こりません。私たちはこのことのためにも、あのこのためにも祈ります。しかしなにも起こりません。すべてはまえとおなじ状態です。いったいどうしてでしょうか。なぜでしょうか。ごろのなかで私たちは、意識して自分かつてな道に行ってしまっているのではないのでしょうか。私たちは「主のみこころがなる」ことを最大の願いにしているなら、私たちの祈りはまったくなんの意味もないのです。ここでたいせつな聖書のみに

ことばをいくつか見ることにしましょう。

神を敬わない者の望みはどうなるであろうか。神が彼を断ち切り、そのいのちを取り去るときは。苦しみが彼にふりかかるとき、神は彼の叫びを聞かれるであろうか。

(ヨブ 27・8、9)

神は決してむなしい叫びを聞き入れず、全能者はこれに心を留めない。(ヨブ 35・13)

「あなたがたが手を差し伸べて祈っても、わたしはあなたがたから目をそらす。どんなに祈りを増し加えても、聞くことはない。あなたがたの手は血まみれだ。洗え。身をきよめよ。わたしの前で、あなたがたの悪を取り除け。悪事を働くのをやめよ。」

(イザヤ 1・15、16)

見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

(イザヤ 59・1、2)

それで、彼らが主に叫んでも、主は彼らに答えない。その時、主は彼らから顔を隠される。彼らの行ないが悪いからだ。

(ミカ 3・4)

それなのに、彼らはこれを聞こうとせず、肩を怒らし、耳をふさいで聞き入れなかった。：「呼ばれたときも、彼らは聞かなかった。そのように、彼らが呼んでも、わたしは聞かない。」と万軍の主は仰せられる。

(ゼカリヤ 7・11、13)

これらのみことばは「もしも私の心にいだく不義があるなら、主は聞き入れてくださらない。(詩篇66・18)」という聖句の真理を、すべて証明しています。もしも私たちがごろのなかに罪を許容するなら、主はなにをなさるのでしょうか。私たちの祈りはむなしくなり、なんの答えも見いだすことができなくなるのです。

・主は導いてくださらない

多くのキリスト者は悲しいことに、自分かつてな生活をしています。私たちがすべてを主にゆだねることをせず、主をすべてのことに最優先しないならば、主は私たちを導いてくださることができません。主は、私たちがごろのなかで、また生活のなかで、どのような罪も許容しないときにだけ、私たちを導くことがおできになるのです。主は、私たちが主に導いていただきたいと思うときにだけ、私たちを導いてくださるのです。

あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

(箴言 3・6)

主を「みとめる」ということは、聖なるおかたである主とたいせつな交わりをもつことを意味します。この交わりが存在すると、ひとは主の導きを確認することができます。ダビデは詩篇のなかで、主の導きを願ひ求めるにあたつて、つぎのように言っています。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。
私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

(詩篇 139・23、24)

「私を探ってください」、これこそが主によつて導かれる前提です。私たちのこのころのなかに、知られていない、またさばかれていない、ゆるされていない罪がやどっていると、主との交わりは断たれてしまいます。私たちのこのころは、主の導きにたいして開かれていない状態になつてしまします。

ここでひとつの実例を見てみましょう。あるご婦人がとつぜんひどいアレルギー性皮膚炎にかかりました。医者はどうすることもできませんでした。ある日、医者がそのご婦人をおとずれたところ、その婦人は、ちやうどまどから顔をだしたおとなりの奥さんをにらみつけていました。「私はあのひとを殺してやりたい!」と彼女は叫んで、興奮のあまり体をふるわせました。そこで医者は忠告をあたえました。「おとなりの奥さんとなかよくなりなさい。そうすればアレルギーはきつとなおります」と。それからしばらくして、そのアレルギーはなおったのでした。

おそらくこれに似たようなことが、あなたのころをさいなんでいるかもしれません。あなたのころのなかに、人生のなかに、神の導きにたいする反抗があるならば、主はあなたを導くことができません。あるいはあなたは、夫や妻、子どもたちと一致しないままで生活しているのではないでしょうか。「私はそれを許しません」と言う信者がいます。そしてそのように言うことによって、そのひとは肉体的にも、霊的にも、だめになってしまうのです。そうではなく、「これから私は、ころのなかのどんな罪でもいっさい許容しません」というたいどをとるなら、主はゆたかに祝福してくださることでしょう。

秘密にされている罪、ころのなかに許容されている罪が、主の祝福を遠ざけているということとおそろしいことです。すべてをあかるみにだし、きよめていただくひとはさいわいです。そのひとはあらゆる重荷から解放され、主が導いてくださることを経験するにちがいないからです。

・主はもちいてくだらない

いままで見てきたように、もし私たちがころのなかに罪を許容するなら、主は聞き入れてくださいません。主は導いてくださいません。そしてさらに、主は「もちいて」くださいません。

私たちは役にたたずむだばねを折るだけの、空中で拳をふりまわすだけの者になってしまいます。

主はあなたをおもちいになれるでしょうか。あなたはこの質問に「はい、おもちいになれる」と肯定で答えられるでしょうか。それとも否定しなければならぬでしょうか。あなたの答えは、どれだけ多くのたましいがあなたをとおして主に導かれたかとは関係ありません。あなた

がどれだけ多く福音を宣べ伝えたかともまったく関係ありません。たいせつなことは、主なる神のご臨在のもとで、あなたがあらゆる意識的な罪と訣別したかどうかということです。あなたがこころの奥底にどのような罪の存在も許容しないなら、あなたは自分で知ろうが知るまいが、主によつてもちいられます。主は、私たちをうつわとしてもちいたいところから望んでおられます。それも主によつてきよめられたひとびとだけをもちいたいと望んでおられます。

大きな家には、金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。また、ある物は尊いことに、ある物は卑しいことに用います。ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとつて有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。それで、あなたは、若い時の情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。

(Ⅱ テモテ 2・20-22)

主が「きよめられたうつわ」だけしかもちいることができないことは、この聖句からはつきりわかります。ですから、主にきよめてもらいたいと願うひとは、もちいられます。主にきよめてもらいたいと願うひとは、その生活をとおして、主のみこころが現われます。主にきよめてもらいたいと願うひとは、主のために役だつものとなります。主はあらゆる信者をうつわとしてもちいたいと願っておられます。主はあらゆる信者を祝福のくだとしてもちいたいと思っておられます。しかし罪が許容されるなら、主はなにもなさることができません。主は、ただきよめられた

うつわだけしかおもちいになれません。

まとめとして、三つの聖句を見てみましょう。それらは、私たちにはげましとのぞみ、そして確信をあたえてくれる聖句です。

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。
(箴言 28・13)

私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。

(Ⅱコリント 7・1)

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。
(Ⅰヨハネ 1・9)

これらの三つの聖句はすべて、私たちにおなじことを語っています。「罪が私たちに意識される瞬間、私たちはそれを告白し、その罪からはなれなければならない。私たちはきよめていたでなければならぬ」ということです。つまり私たちはこころのなかに罪が意識されるその瞬間に、その罪を主のまえに告白し、はっきりと罪と訣別しなければなりません。私たちはこころのなかにある罪をまとめ、イエス様に負いめがあるその罪を告白し、きよめていただいて、意識し

て罪からはなれなければなりません。このようにするときだけ、主は私たちをゆるしてください、私たちをあらゆる不義からきよめてくださいます。そのときから私たちは、主が願いを聞き入れてくださり、奇蹟を行なってください、またご栄光のために私たちをもちいてくださることを経験することがゆるされるようになるのです。

いままで私たちは、「主が聞き入れてくださらない」、「主が導いてくださらない」、「主がもちいてくださらない」理由について見てきました。最後に、まえに読んだ聖句をもういちど読んでむすびといたします。

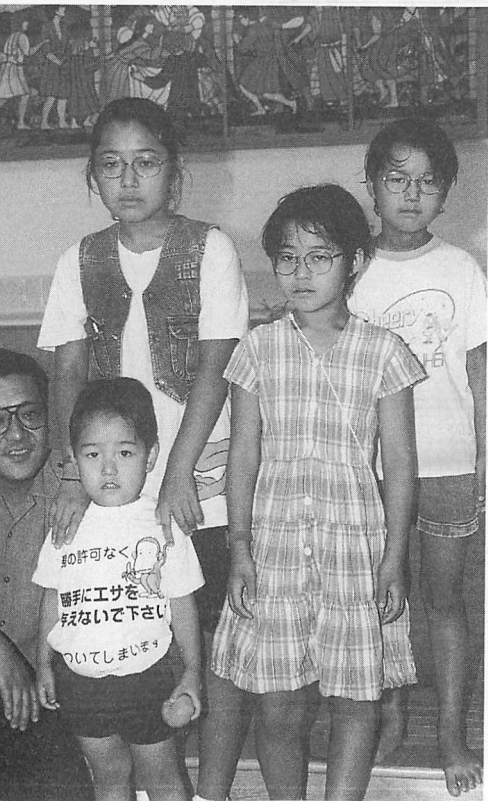
神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

(詩篇 139・23、24)



▲交通事故で長男を召され、
悲しみのうちに主にあつて平安な近藤さんご夫妻。

▼お母さんは一足先に天国へ。主に守られている成田さんご一家。



断食とむすびついた祈り

しかし、イエスは、彼の手を取って起こされた。するとその子は立ち上がった。イエスが家にはいられると、弟子たちがそっとイエスに尋ねた。「どうしてでしょう。私たちに追い出せなかったのですが。」すると、イエスは言われた。「この種のは、祈り*によらなければ、何によっても追い出せるものではありません。」（マルコ 9・27-29）

新改訳聖書の頁の下の脚注によれば、文中の「祈り」のあとの*の部分に、「と断食」を加えるものもある、とされるされています。

この章の題は「断食とむすびついた祈り」です。

マルコの福音書9章を読みますと、ペテロ、ヤコブ、ヨハネがすばらしい経験をしたことがしるされています。主イエス様はかれらを連れて高い山にのぼられました。かれらの目のまえでみすがたが変わり、御衣は白くひかりかがやきました。そしてモーセとエリヤがあらわれ、イエス様と語りあいました。弟子たちは雲のなかから、イエス様についての神のことは聞きました。「これは、わたしの愛する子である。かれの言うことを聞きなさい」と。

弟子たちをこのすばらしい経験に導かれたイエス様は、そのあとで弟子たちを山のおもとへ、すなわち罪のおもくるしい空気へ、また悪魔の支配する領域へと連れて行かれたのです。ペテロはあまりにも山上での経験がすばらしかったので、いつまでも山上にとどまり、イエス様のために幕屋をつくりたいと思ったほどだったのですが、しかしイエス様はかれらを山のおもとへ連れて行かれ、そこでかれらは大きな失望をあげわうことになったのです。

ながいあいだあらゆる手をつくしたにもかかわらず、自分の息子の病気がなおらなかったひとりの父親が、「病気の息子をなおしてください」と山にのぼらずに残っていた弟子たちにしたのみでした。弟子たちは息子をなおそうとして、せいっぱいやつてみたのですがだめでした。かれらにはできなかったのです。それを見ていたまわりの群衆は失望しました。父親も、力のない弟子たちも失望しました。そしてイエス様が帰ってこられたとき、イエス様もまた失望なさいました。それは、失望したひとびとの集団でした。

こんにち、私たちはそのような失望した集団を見いだすのに、とおくへ行く必要はありません。目のわるいひとでさえも、そういう失望したひとびとをかんたんに見つけることができます。なぜなら私たちのまわりは、そういうひとびとであふれているからです。

さて、さきほどの父親は、こんどは直接イエス様に向かってお願いしました。イエス様はその願いをことわられませんでした。イエス様は決してことわられることはありません。そして悪霊にとりつかれた息子は一瞬のうちに解放されたのです。

自分の力のなさに打ちのめされた弟子たちは、そのあとでそつとイエス様にたずねてみました。「どうしてでしょう。私たちには悪い霊を追い出せなかったのですが」と。イエス様はお答えになりました。

「この種のは、祈り*と断食によらなければ、何によっても追い出せるものではありません。」

(マルコ 9・29)

このみことばによって、私たちの主イエス様は「断食とむすびついた祈り」の必要性をしめしておられます。つまり、祈りが聞きとどけられるためには、「断食とむすびついた祈り」が必要ならば、いかにあるということです。ここでイエス様がおっしゃってられる断食ということばの意味するところはなんでしょうか。

多くのひとびとは、断食とむすびついた祈りがどのようなものかを正確には知りません。かれらは祈りの生活をし、たくさんすばらしい経験をしました。しかし、かれらは「断食」がなにを意味しているかについて、たどしく知らないのです。

「断食」が意味するもの

「断食」とはなにか。これはとてもたいせつな問題です。「断食」とは、その字のとおり、なにも食べないことだけを意味するのでしょうか。それともなにかそれ以上のことを意味するのでしょうか。

結論を言うと、「断食」とは、自発的に、一般的にも正常で正当なことがらを放棄すること、りっぱでただしいこと、ときにはやるべきことをあえて「捨てざる」こと、つまり「自発的な断念」、また、「いちばんたいせつなもの、そのほかのものを犠牲にすること」を意味します。主のまえに集中して、持続的に祈るためには、それ以外のことは重要でなくなればなりません。自分からこのころをそそぎだして祈るなら、ほかのことはとうぜん二次的な位置しかしめられないようになります。このことを聖書から学んでみましょう。

1 食事をとることを断念する「断食」

「断食」とは、ほんらいものを食べないことです。

ダビデはその子のために神に願ひ求め、断食をして、引きこもり、一晚中、地に伏していた。彼の家の長老たちは彼のそばに立つて、彼を地から起こそうとしたが、ダビデは起きようともせず、彼らといっしょに食事をとろうとしなかった。

(Ⅱサムエル 12・16、17)

ダビデはバテ・シェバとおそろしい罪をおかし、生まれた子が死になつたとき、断食をしていつさいの食事をとろうとしませんでした。聖書のべつのところでも、断食が必要であることが書かれています。エステル記によると、エステルはモルデカイあてにつぎのようなたよりをだしました。

行つて、シュシャンにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食をしてください。三日三晩、食べたり飲んだりしないように。私も、私の侍女たちも、同じように断食をしましょう。たとい法令にそむいても私は王のところへまいります。私は、死ななければならなかったのでしたら、死にます。

(エステル 4・16)

ニネベにたいするさばきの日が近づいたとき、ニネベの王は、つぎのように命令しました。

王と大臣たちの命令によって、次のような布告がニネベに出された。「人も、獣も、牛

も、羊もみな、何も味わってはならない。草をはんだり、水を飲んだりしてはならない。人も、家畜も、荒布を身にまとい、ひたすら神にお願いし、おのおの悪の道と、暴虐な行ないとを悔い改めよ。」

(ヨナ 3・7、8)

これらを読むと、まことの断食には、「自発的に食事を断念すること」もふくまれていることがよくわかります。

2 ねむりを断念する「断食」

さきほどのサムエル記第2の聖句のなかで、ダビデが食事をとらなかつただけではなく、ひとばんじゅう地に伏していたとつたえています。ダビデは自発的にねむりを断念しました。なぜなら、しなければならぬもつとたいせつなことがあつたからです。ダビデにとって、主の御声に耳をかたむけること、主のご臨在のうちにとどまることは、ねむることよりもたいせつでした。だからダビデは「自発的にねむりを断念」しました。これもまた「断食」のひとつです。

3 楽しみや快適さを断念する「断食」

断食するひとと、断食しないひとの対比は、つぎの聖句のなかに見られます。

そして人々はそれぞれ家に帰った。イエスはオリブ山に行かれた。

(ヨハネ 7・53、8・1)

だれでも、家に帰ってくつろいだり、やすんだりする権利をもっています。イエス様もまた、ゆつくりとやすみ、ねむる権利をもっておられました。そして人間としてこの地上に遣わされたイエス様は、とうぜんながらねむることを必要とされたのです。しかしここでは、イエス様は「断食するひと」でした。イエス様は睡眠を断念し、山にのぼり、そこでひとばんじゅう祈りに専念なさいました。「自発的に楽しみやくつろぎ、また快適さを断念なさった」のです。

4 男女関係を断念する「断食」

結婚生活における男女関係は、主によって望まれています。とうぜんのことながら結婚生活以外の男女関係は主によって禁止され、サタンによって望まれています。結婚までの男女関係は罪です。結婚生活以外の男女関係もおなじように罪です。さらに聖書には結婚生活における男女関係においても、「断食」、つまり自発的な断念が必要なきがあることがしめされています。

「彼らは三日目のために用意をせよ。三日目には、主が民全体の目の前で、シナイ山に降りて来られるからである。」それでモーセは山から民のところに降りて来た。そして、民を聖別し、彼らに自分たちの着物を洗わせた。モーセは民に言った。「三日目のために用意をしなさい。女に近づいてはならない。」

(出エジプト 19・11、14、15)

ここで「女に近づいてはならない」、つまり「男女関係を断念しなさい」とあるのは、主に出

会うそなえをするほうがはるかにたいせつだからです。もちろんこれはかぎられたみじかいあいだけでした。パウロはおなじようなことを、つぎのように書きおくらせています。

妻は自分のからだに関する権利を持つてはおらず、それは夫のものです。同様に夫も自分のからだについての権利を持つてはおらず、それは妻のものです。互いの権利を奪い取つてはいけません。ただし、祈りに専心するために、合意の上でしばらく離れていて、また再びいっしょになるというのならかまいません。あなたがたが自制力を欠くとき、サタンの誘惑にかからないためです。

(Iコリント 7・4、5)

これらの聖書の箇所によってあきらかなことは、私たち信者の生活には、さらにいっそう、ほんとうに主のまえに立ちつづけ、主が働いてくださることを祈り求めるために、いろいろなことが「自発的に断念する」ときがなければならない、ということです。

あらゆる信者の祈りの生活のなかに、断食するとき、つまり自発的に断念するときが必要なのとおなじように、あらゆる集会や教会が成長するためにも、断食するとき、つまり自発的に断念するときが必要です。

いつ、祈りは断食とむすびつくべきか
ではつぎに、「いつ、祈りは断食とむすびつくべきでしょうか」ということについて、つぎの七つのことをごいっしょに考えてみましょう。

1 主との交わりを深めるとき

2 祈りが力をもち、勝利へと導かれるとき

3 罪があかるみにだされ、不正がとりさられるとき

4 告白がされ、罪のゆるしがなされるとき

5 主の導きを必要とし、決断がなされるとき

6 主にたすけと力をいただかなければならないとき

7 霊的な目ざめがはじまり、なみだがながされるとき

1 主との交わりを深めるとき

「断食とむすびついた祈り」がもとめられる第一のばあいは、「主との交わりを深め」、信仰をあらたにする必要があるときです。

私たちはみな、ときどき主に無関心になったり、信仰がなまぬるくなったりすることを感ず。型にはまったような信仰の生活をおくるのはひじょうに危険なことです。私たちはみな安易な日常生活にかんたんにながされてしまい、主をもはやもえるように愛さなくなっていることを経験します。また、私たちはみなとつぜん、主のご臨在のなかに立とうとせず、主にたよらないで、自分の力にたよってその日その日をやりくりしていることを経験します。正直な信者はだれでも、このような経験をすることをみとめざるをえません。

しかし、こういったことに気がつき、私たちに主との交わりが欠けていることがわかったら、

ただひとつのことがたいせつです。

「断食とむすびついた祈り」のために時間をつくりましょう。

私たちはときに、主のみことばが信じられなかったり、私たちへの主の個人的な愛がとつぜんうたがわしく思えたり、主のご計画がまったく理解できなかったりすることがあるのではないのでしょうか。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ 8・28）

大きな苦しみになっっているひと、わずかな希望も光も見いだすことができないでくらやみにすわりこんでいるひとにとって、このみことばを信じることは、決してかんたんではありません。そのようなひとは、第一に「断食とむすびついた祈り」のために時間をつくることだけがないです。それ以外のことはたとえ重要なことであってもすべて第二、第三にしましょう。「神のご臨在を求めなさい。神のみことばに思いをひそめなさい」。その結果は「主との交わりが深められる」こと、そして信仰があらたにされることです。

2 祈りが力を持ち、勝利へと導かれるとき

私たちがイエス様のみことばについて深く考えると、「断食とむすびついた祈り」は大きな力を持ち、勝利へと導かれるものであり、このような祈りが必要となるばあいがたくさんあること

がよくわかります。

よく、私たちはなにも起こらないと、かんたんにつぎのように言ってしまうのではないでしょう。か。「いま、主は祈りにこたえてくださらぬ。でもいつかはかならずこたえてくださるとやうくしてくださっています。だから私たちは待つことにしましょう」。このたいどはかならずしもまちがっているとはいえません。しかしこのようなとき、私たちの祈りに「まことの断食」、自発的な断念をくわえなければならぬかどうかについてじゅうぶん考えてみる必要があります。私たちの主にとっては、のがれ道のない状態は存在せず、のりこえることのできない障害は存在せず、かたくなすぎるころも存在しません。

祈りは戦いです。戦いがもつとも激しいとき、だれもおやつを食べたり、いねむりをしたりするひまはありません。もつとたいせつなことがあるからです。使徒の働きの12章には、ほんとうに絶望的な状況のことがしるされています。使徒ヤコブはとらえられ、つるぎで殺されました。使徒ペテロはとらえられ、死刑を待っていました。初代教会の反応はどうだったでしょうか。

こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けた。
(使徒 12・5)

「神に熱心に祈りつづけていた」ということは、祈りと断食がむすびついていたので。初代教会のひとびとの平穏な生活は、混乱におちいりました。家庭の生活は変わりました。職場の生活も変わりました。個人的な生活も変わりました。すべては、第二、第三の地位に、優先順位を

下げられなければなりませんでした。なぜでしょうか。ペテロが牢屋に入れられたからです。

ヘロデ王は、神のことは語る者の活動を禁止しました。信者たちはみな、深い苦悩におちいりました。そしてその苦悩は、絶えることのない祈りとなってあらわれたのです。信者たちはサタンの力に対決するすべを知りませんでした。ですからすべては第二、第三のことになり、なによりもまず緊急で必要なこと、「祈りと断食」に専念したのです。

私たちは、祈りが主によって聞きとどけられることをこれから願っているでしょうか。私たちは、いままで経験したことがないほどの大きな主の勝利を経験することを、これから願っているでしょうか。それを願っているなら、私たちはもともと主のご臨在を求めなければなりません。主が私たちに語ってくださるようにしなければなりません。

そのためには、「多くのものを犠牲にする覚悟」をもたなければなりません。「断食とむすびついた祈り」がささげられなければなりません。

3 罪があかるみにだされ、不正がとりさられるとき

「断食とむすびついた祈り」はいつなされるべきでしょうか。ヨシユア記7章には重要な意味をもつできごとが記録されています。

しかしイスラエルの子らは、聖絶のもののことで罪を犯し、ユダ部族のゼラフの子ザブデイの子であるカルミの子アカンが、聖絶のもののいくらかを取った。そこで、主の怒りはイスラエル人に向かって燃え上がった。

(ヨシユア 7・1)

神の民の責任者であるヨシユアは、このことについてなにも知りませんでした。この罪はどうしてあかるみにでたのでしょうか。エリコを攻めとつたあと、つぎにイスラエルが攻めとる町はアイでした。アイはちいさな町でしたが、にもかかわらず、イスラエルは敗北してしまったのです。イスラエルのひとびとは敗れて逃げたのです。神の民が、神の敵のまえから逃げたのです。どうしてでしょうか。主はもはや、かれらとともにいることがおできにならなかったのです。主はこころならずも自分の民、神の民に敵対しなければなりません。なぜなら、罪がかくされていたからです。いまでも主は、私たちが不純な動機で動くとき、罪をおしとおすとき、罪への妥協を行なうとき、私たちに敵対なさいます。

イスラエルが敗北したとき、ヨシユアはおどろいて、まったく混乱した状態におちいりました。ヨシユアは着物を裂き、イスラエルの長老たちといっしょに、主の箱の前で、夕方まで地にひれ伏し、自分たちの頭にちりをかぶった。ヨシユアは言った。「ああ、神、主よ。あなたはどのようにしてこの民にヨルダン川をあくまでも渡らせて、私たちをエモリ人の手に渡して、滅ぼそうとされるのですか。」

(ヨシユア 7・6、7)

ここにはヨシユアが主に「夕方まで」叫んだ、と書かれています。かれはぜんぜん食べるひまがなく断食したのです。いうまでもなく食欲などまったくなくなつたにちがいありません。そして主は、ヨシユアの叫びにこたえてくださいました。

主はヨシユアに仰せられた。「立て。あなたはどのようにひれ伏しているのか。
イスラエルは罪を犯した。」
(ヨシユア 7・10、11)

それからアカンの罪は調べられ、あかるみにだされ、さばわれました。これとおなじように、私たちの生活のなかにある罪、また集会のなかにある罪は、「断食とむすびついた祈り」によってあかるみにだされ、不義がとりのぞかれます。

祈りがなされ、もつともだいじなことがたいせつにされ、ほかのことが断念されるそなえができてゐるばあいは、主はかくされている罪をあかるみにだされます。主はそのひとが謙遜になるために恵みをあたえてくださいます。かくされた罪をあかるみにだして、すべての不義を妥協せずにとりのぞくそなえ、つまり罪を「自発的に断念」する覚悟が、主によってもとめられているのです。

ある町で福音伝道の集会がありました。一週間にわたって福音が宣べ伝えられたにもかかわらず、主のもとに来て救われるひとはひとりもありませんでした。伝道者はある晩「聴衆のなかに聖霊のはたらきをさまたげるひとびとがいるので、そのひとびとは主のあかるみのもとにだされるべきです」と言いました。そうすると、とつぜんふたりの男が立ちあがり、歩みより、だまって握手しました。それがすべてでした。その瞬間からあふれるばかりの祝福がそそがれました。このふたりは、集会のなかで重い責任を負うひとびとだったのですが、それまではたいへんなかかわるく、おたがいに話そうともしなかったのです。このようにして、さまたげるものがとり

のぞかれたとき、主は働くことがおできになりました。とつぜん、天のまどが開かれたのです。私たちの集会のなかでも、おそらくかくされていることがあると思います。信者の生活のなかにも、罪が黙認されていると思います。罪があかるみにだされ、不義がとりのぞかれるためには「断食とむすびついた祈り」はどうしても必要です。

4 告白がされ、罪のゆるしがなされるとき

「断食とむすびついた祈り」は、いつなされるべきでしょうか。すばらしい例がサムエル記第2の11、12章にあります。ダビデの罪と墮落について書かれているところです。

ダビデはバテ・シエバと罪をおかし、その夫を殺そうとしました。しかし姦淫と殺人をおかしたダビデは、主のまえに「私は主にたいして罪をおかした」と自分の罪を告白し、祈り、断食し、ゆるしを求め、それをいただきました。このへりくだりの結果は、詩篇の32篇、51篇にしろされています。どうかいちど、機会をみつけて主のまえにひざまずきながら詩篇の32篇と51篇をお読みください。主はそれをとおして、私たちひとりひとりのところに語りかけてくださいます。

私たちが罪におちいっても、それを主のまえに正直に告白するならば、その罪と債務は一瞬のうちゆるされます。

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

(Iヨハネ 1・9)

私たちよりもサタンがはるかにつよくて私たちが罪をおかしてしまい、神様からはなれてしまったことを経験したとき、いそいで主のみもとに行き、ゆるしてくださるよう、きよめてひきあげてくださるよう、主にお願ひすることがたいせつです。

そしてまた、私たちはほんとうに主のまえにへりくだることがたいせつです。そうでないなら、私たちは罪というものをかろく考えてしまい、つぎのように言うことでしよう。「それほど大したことではない。また罪をおかしてもあやまれば、主はかならずゆるしてくださるのだから」と。もちろん、ほんとうに悔い改めれば、どんな罪でもゆるされるということは、そのとおりです。しかし、安易な妥協をする者はわざわいです。ふたたびおなじあやまちをくりかえさないために、私たちは主のまえに特別の時間をつくり、断食するところのそなえをもつことが必要です。

主の神聖さを見る者は、もはやかたんに罪をおかすことができなくなります。私たちにとって、罪はひじょうにおそろしい、忌むべきものにならなければなりません。

5 主の導きを必要とし、決断がなされるとき

「断食とむすびついた祈り」はいつなされるべきでしょうか。「使徒の働き」の13章には、アンテオケの集会のひとびとが福音を宣べ伝えるために、自分たちのなかから数人のひとびとを遣わす覚悟をしたことがしるされています。しかし、遣わされるのはだれがいいのでしょうか。主は集会のひとびとに、はっきりとした導きをおあたえになりました。

彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖霊が、「バルナバとサウロをわたしのために

聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。」と言われた。そこで彼らは、断食と祈りをして、ふたりの上に手を置いてから、送り出した。

(使徒 13・2、3)

私たちがたいへんな困難に直面し、重要な決断をしなければならないとき、私たちはなにをすべきでしょうか。しずまるための時間をつくること、つまり「断食」することです。あなたがいましなければならぬこと、したいことを、しないようにしなさい。主なる神のまえにせずして、主に語っていただくようにしなさい。そのためにはすこしのあいだ、まったく閉じこもって意識して主にすべてをうちあけることがたいせつです。なによりもたいせつなことは、主が私たちを導いてくださること、そして私たちがただししい決断を行なうことです。そのために必要な前提は、「断食とむすびついた祈り」です。

6 主にたすけと力をいただかなければならないとき

「断食とむすびついた祈り」はいつなされるべきでしょうか。主に仕える者は、だれでもいちどはつぎのように自分にたずねてみる必要があります。「私たちがあらゆるご奉仕にさきだつて、意識して祈り、断食したならば、主は私たちをとおしてどれだけのことをなさることができたでしょうか」。そして、だれもが正直に告白しなければなりません。「いままでよりはるかに大きなことがおできになったはずです」と。私たちはいままでたいいのばあい、主のさまたげになっていたのです。自分の力で主に仕えようとするひと、自分の能力にたよってことを進めるひとは、

主と主のご奉仕のためにはなんの価値もありません。イエス様の弟子たちは、自分の力でイエス様に仕えることをゆるされませんでした。かれらは、主なる神の力で満たされるまで待たなければなりませんでした。

このように、弟子たちは当時、主によって満たされることを待つ必要がありました。しかし、現代の私たちは待つ必要はありません。いまの時代には主ご自身が待っていてくださり、私たちに全権、知恵、勇気、感情、感情移入能力、愛をあたえたいところから望んでおられるのです。

7 霊的な目ざめがはじまり、なみだがながされるとき

主なる神のご臨在のうちにいるひとびとは、ひじょうに大きなよろこびを経験します。しかし、そのいっぽうでは、大きな悲しみをも経験します。これは逆説のようにひびくかもしれませんが、そうではありません。その一例はネヘミヤです。かれは主のご臨在のうちにいましたが、それゆえにこそ、大きな悲しみに満たされたのです。

すると、彼らは私に答えた。「あの州の捕囚からのがれて生き残った残りの者たちは、非常な困難の中にあり、またそしりを受けています。そのうえ、エルサレムの城壁はくずされ、その門は火で焼き払われたままです。」私はこのことを聞いたとき、すわって泣き、数日の間、喪に服し、断食して天の神の前に祈って、言った。

(ネヘミヤ 1・3-5)

ネヘミヤはただ祈っただけではなく、主のまえにへりくだりました。ネヘミヤは断食し、神の民の苦しみを自分のものとして泣きました。ネヘミヤのようなひとびとは、こんにち必要です。信者たちの霊的な目ざめは、どうしても必要です。ネヘミヤをとおして、当時の信者たちは霊的に目ざめ、ふたたび証しびととなることができました。どうしてでしょうか。

ネヘミヤの祈りは「断食とむすびについていた」のです。ネヘミヤは信者たちの罪を自分がおかしたかのように、一体感をもちました。ネヘミヤはかわりに祈りつづけ、すわって泣きました。そしてネヘミヤの「断食とむすびついた祈り」は、信者たちが悔い改め、断食しながら主に呼び求め、すべてが新しくされるように導いたのです。神の敵によって散らされ、みじめでよろこびのない信者たちは、ふたたびおよろこびすることができました。

立ち上がって、とこしえからとこしえまでいますあなたがたの神、主をほめたたえよ。すべての祝福と賛美を越えるあなたの栄光の御名はほむべきかな。ただ、あなただけが主です。あなたは天と、天の天と、その万象、地とその上のすべてのものの、海とその中のすべてのものを造り、そのすべてを生かしておられます。そして、天の軍勢はあなたを伏し拝んでおります。あなたこそ神である主です。

(ネヘミヤ 9・5―7)

ともに祈ることの
たいせつさ

▼札幌よろこびの集い。右から浦里さん、角田さん、清水さん、上村さん、藤本さん、赤井さん。



イエス様は、つぎのように言われました。

「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。」

(マタイ 16・18)

ここでいう教会とは、もちろん教会の建物ではありませんし、キリスト教のひとつの教派とか、宗教団体などでもありません。教会とは「イエス様を信じ、イエス様を受け入れたひとびとの群れ」のことです。ですから、よく「主のからだである教会」と言われるのです。イエス様にぞくするひとびとこそが、まことの「教会」です。そして主のみこころになかった教会の特徴が「祈り」です。私たちがもし祈らなければ、イエス様は王の王、主の主であるということの証しにならず、また私たち自身も信仰の進歩がなく、主からはなれてしまった信者たちももともどりません。イエス様を信じるひとびとにとってもっともたいせつなのは、祈ることです。「イエス様の教会」を建てることのできるのは、もちろんイエス様だけです。ですからイエス様は「わたしはわたしの教会を建てる」と言われたのです。

私たち人間にできることといえば、「主をさまたげる」ことだけではないでしょうか。けれど、そんな私たちでも、主はもちいたいと望んでおられるのです。ではどのようにして、私たちは主によってもちいられ、主とともに働くことができるのでしょうか。答えは「祈りによつて」です。初代教会の特徴は「祈り」でした。初代教会の信者たちは、聖書の知識をそんなにはもっていませんでした。けれどもかれらはいつも祈っていたひとびとだったのです。そして初代教会のひとつがともに祈った最初の記録は、使徒の働き4章に見ることができます。

彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。
(使徒 4・31)

「一同は聖霊に満たされ、神のことばをだいたんに語りだした」とあります。「一同」とあるのですから、そのとき神のことばを語る特定の「専門家」などはいなかったのです。いわゆる牧師とか神父とかはいなかったのです。初代教会では、主を信じる者ひとりひとりが伝道者だったのです。みんな、例外なくだいたんに神のことばを語りだしたのです。ですから五旬節からわずかのあいだに何千人ものひとびとがイエス様を信じ、救われるようになったのです。みんなこころをひとつにしてくださいたんにみことばを語ったからです。もちろん、みことばを語るまえにいっしょに祈らなければ、このようにはならなかったでしょう。

この章では、私たちがともに祈ることのたいせつさについて、ごいっしょに考えてみたいと思います。主を信じる者がともに祈るときの特徴はつぎのようなものです。

- 1 イエス様のよみがえりの事実にもとづいて祈る
- 2 イエス様とともに働く
- 3 天国に影響をおよぼす
- 4 ともに祈ることによる現実の結果
- 5 信仰の祈り
- 6 霊的な一致をもつてともに祈る

これらについて、順をおって考えていきましょう。

1 イエス様のよみがえりの事実にもとづいて祈る

救われたひとびとがともに祈ることの特徴の第一番めは、イエス様のよみがえり、イエス様の復活の事実にもとづいて祈ることです。もしイエス様のよみがえりがなかったなら、つまりきょうもイエス様が生きて働いていらつしやるといふ事実がなかったなら、かれらはいくら祈ってもなんにもならなかったのです。イエス様が復活なさったといふ事実にもとづく祈りこそが、たいせつです。

聖書のなかの「使徒の働き」を読むとよくわかるのですが、初代教会のひとびとは、いわゆる「キリスト教」や「キリストの教え」を宣べ伝えようとはしなかったのです。かれらはもちろん「伝道しよう」という気持ちはあったのですが、かれらが宣べ伝えたメッセージはなんであつたかといいますと、「キリストは復活なさった。私たちはその証人です」というものでした。イエス・キリストの復活こそが、かれらの宣べ伝えたメッセージの中心だったのです。

そしてかれらが直面し、体験したことは「地獄のにくしみ」でした。悪魔の攻撃の目標は、人間ではなくてイエス様です。父なる神は御子のイエス様を高く引きあげられました。だから悪魔はイエス様ご自身にたいしてどうすることもできなくなつてしまつたのです。だからイエス様のからだである教会が、悪魔の攻撃のまとなつたのです。

初代教会のひとびとは「地獄のにくしみ」を感じました。私が卒業した神学校の創立者はよく

つぎのように言っていました。「あなたがキリスト者として『地獄のにくしみ』を感じないようなら、あなたは主のやくにたない者だよ」と。主を第一にするひとはかならず「地獄のにくしみ」を感じるようになります。初代教会のクリスチャンたちは、たしかに「地獄のにくしみ」を感じました。かれらは、イエス様を知ること、イエス様にたよること、イエス様のために生きることは、もしかすると殉教の死をとげる結果になるかもしれないと、よくわかっていたのです。それがわかりながら、かれらは主をほめたたえつづけたのです。

使徒の働き4章を見ると、かれらがほんとうに主をほめたたえたひとびとであることがはっきりとわかります。しかもそこには「かれらは心配でいっぱいになり、おそろしさにふるえた」とは書いてありません。なぜでしょうか。このような情況にありながら、どうしてかれらは主をほめたたえることができたのでしょうか。そのわけは、かれらがはじめからこの戦いの結果をよく知っていたからです。だからかれらは不安やおそれをまったく感じなかったのです。かれらは祈ったとき、死を克服なさったイエス様、悪魔にたいして完全な勝利をおさめられたイエス様をほめたたえたのです。

そしてかれらの祈りをささえていたものは、「地の果て果てまでも、イエス様の絶対的な支配があきらかになる」というかたい確信でした。これこそがかれらの祈りの目的でした。信じる者がともに祈ることの特徴は、このようにイエス様のよみがえりの事実にもとづいて祈ることなればなりません。

2 イエス様とともに働く

ともに祈ることの特徴の第二番めは、「イエス様とともに働く」ことです。私たちは自分のたすけ、解放、恵み、ゆるし、きよめなどのために祈ります。しかし、自分のための祈りだけではじゅうぶんでないと聖書ははっきり語っています。私たちは「イエス様とともに働かなければ」なりません。イエス様といっしょに働くことは、イエス様の御名がためられるために祈ることを意味します。主の「信用」のために働くことを意味します。私たちはもつともつとイエス様のみこころが行なわれ、イエス様のご支配と所有がひろがるようにと祈らなければなりません。「イエス様のご支配、イエス様の勝利が地の果て果てまでもあきらかになりますように」と。

私たちの小さな生活のことなどはたいした問題ではなく、イエス様の御名、イエス様の信用こそがたいせつです。イエス様の絶対的支配が、地の果て果てまでもあきらかになることこそが問題です。そしてイエス様とともに働くこと、イエス様とともに祈ることは、私たちにあたえられたすばらしい特権であり、もちろんどうじに大きな責任でもあります。

3 天国に影響をおよぼす

信じる者がともに祈ることの特徴の第三番めは、ともに祈ることによって天国にいい影響をおよぼすことです。エルサレムでつどっていた初代教会のひとびとが詩篇の第2篇を読んでいたことはまちがいありません。というのは、かれらの祈りは第2篇の引用だからです。けれどもかれらはこの詩篇の聖句を研究したわけではありませんでした。かれらにとって、聖書のみことばは

たんなる教えなどではなく、かれらがおかれている絶望的な状態、つまり自分たちへの迫害を説明するものだったのです。かれらはただ戦いというものについて抽象的に語りあつたのではなく、かれらは現実には迫害にさらされていたのです。ですからかれらは詩篇の第2篇を読んだとき、このみことばを自分たちのこととして受けとつたのです。このように聖書のみことばは、自分のものにするからこそがたいせつです。聖書は研究するために書かれたものではなく、自分のこととして読み、受けとるべきものです。

「わたし（主）に求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与え、地をその果て果てまで、あなたの所有として与える。」
(詩篇 2・8)

初代教会のひとびとはこの詩篇の第2篇を読んだとき「わたしに求めよ。わたしはあたえる」、つまり主はあたえてくださるということを確信することができました。ですからかれらは、そのことを待ちかねて、主に祈りをささげたのです。またこの詩篇第2篇を読むと「イエス様のご支配が地の果て果てまでひろがる」ことが主のみことばであることを知ることができます。ですから主のみことばにかなう祈りとは、イエス様のご支配が地の果て果てまでひろがるようにという祈りです。聖霊が働かれる目的も、もちろんまったくおなじです。イエス様はおっしゃいました。

「御霊はわたしの栄光を現わします。」

(ヨハネ 16・14)

初代教会のひとびとがいっしょに祈つたあとで、迫害や戦いがなくなったわけではありません。

もちろんかれらはそういったことのために祈らなかったのです。かれらの祈りはつぎのようなものでした。そして、この願いたいして、主は大きくこたえられたのです。

主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください。

(使徒 4・29、30)

彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。

(使徒 4・31)

「みことばをだいたんに語らせてください」。これがかれらの祈りであり、願いだったのです。それにたいして主はこたえられました。「一同は神のことばをだいたんに語りだした」のです。ひとことと言うと、初代教会のひとびとは、復活され、高く天にひきあげられたイエス様の絶対的なご支配を証しする証しびとたちだったのです。これこそがたいせつな点です。もし私たちが「御子のご支配が地の果て果てまでもひろがるように」と祈るなら、かならず天からのお答えがあります。

悪魔のくしみや攻撃にもかかわらず、私たちが御子イエス様のご支配を証しするいきいきとした証しびとになることができたなら、ほんとうにさいわいだと思います。精神的に無力な弱い信者によっても、主からはなれた信者によっても、イエス様のご支配があきらかになりますように。

いったいなぜ、信者がともに祈ることはそんなにたいせつなんでしょうか。信者がいっしょに祈るのは、自分の考えや自分の感情を祈りをおしてほかの信者のひとびとにつたえるためなどでは決してありません。聖霊の願いは、ひとりひとりのこころのうちにあるはずです。聖霊が私たちひとりひとりのうちにあつて祈られたいのです。そして聖霊の目的はただひとつ、「イエス様の絶対的なご支配が証しされ、主の御名がたかめられ、たたえられること」です。したがって、信者がともに祈る祈りは、信者の一致からでる祈りであるはずで、ですからイエス様は言われたのです。

「御霊はわたしの栄光を現わします。」

(ヨハネ 16・14)

御霊のはたらきについて考えるとき、このみことばはもっともたいせつなものではないかと思えます。「御霊はわたしの栄光を現わします」。イエス様のご栄光が現われると、人間はほんとうにちいさなものにすぎなくなります。人間が聖霊に満たされると、どうなるでしょうか。そのもっともよい例はバプテスマのヨハネです。かれは「イエス様だけがさかんになり私はおとろえなければならぬ」というたいどをとったのです。

あの方（イエス様）は盛んになり私は衰えなければなりません。

(ヨハネ 3・30)

私たちひとりひとりのたいどをとおしても、イエス様のご栄光とご支配があきらかにされなければなりません。もし私たちが信仰によってそのためにともに祈り、感謝をささげれば、かなら

ずその結果として天からのお答えを体験するようになります。

彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のこ
とばを大胆に語りだした。
(使徒 4・31)

聖霊ご自身が、私たちひとりひとりのこころのうちに自由に祈られることができますように。

4 ともに祈ることによる現実の結果

信じる者がともに祈ることの特徴の第四番めは、ともに祈ることによる現実の結果です。初代教会のひとびとの祈りは、単純でかんたんな祈りだったのです。かれらは抽象的に、また理論的に祈ったりはしなかったのです。かれらはまず、自分の住んでいる街のために祈ったのです。

事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなた(主)が油を注がれた、あなたの聖なるしもベイエスに逆らってこの都に集まり、あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを行ないました。

(使徒 4・27、28)

当時の信者たちは、自分の住んでいる街のために責任を感じ、一生けんめいに祈ったのです。聖句のなかの「この都」というのは、もちろんエルサレムのことです。自分の住んでいる街のために責任を感じないひとは、主にもちいられません。私たちはイエス様の代表者であるべきです。

主の代表として、イエス様のご支配にたいする証しとならなければなりません。この証しはなにもましてたいせつです。しかし悪魔は私たちが住んでいる街で、なんという大きな力をもっていることでしょう。イエス様がこの悪魔の力を完全にほろぼし、イエス様のご栄光とご支配があらかになることをともに祈りましょう。

いままで学んできましたように、聖霊のはたらきの目的は、主のご栄光があきらかにされることです。また父なる神の望んでおられることも、イエス様にすべての礼拝がささげられ、イエス様がすべてをご支配なさることです。御子イエス様のご支配は、かならず私たちが住んでいる街においてもあきらかにされます。そして私たちが住んでいる街においてイエス様のご支配があきらかにされることは、父なる神のみこころです。このことを確信し、よろこびをもって主のみまえに近づきましょう。

初代教会のクリスチャンたちは、「神のみことばをだいたんに語りだした」のです。これは「自分の努力の結果」ではなく、かれらの「祈りの結果」だったのです。そしてまた、弟子たちも初代教会のひとつとも、「主ご自身がご自分の教会を建てられなければならない」ということをよく知っていたのです。私たちが自分の力で、主のために教会を建てようといくら努力しても、みじめな失敗におわります。初代教会の支配者は、聖霊ご自身でした。そして信じる者がなすべきことは、この聖霊とひとつになることだけだったのです。そしてその結果は、つまり聖霊による祈りの実際的な結果は、「福音は地の果て果てにまで宣べ伝えられる」ことでした。

福音は、どのようにしてサマリヤの地方に宣べ伝えられたのでしょうか。それは十二弟子の努

力の結果ではありませんでした。ひとりの信者であるピリポの証しをとおして、主なる神が大きなはたらきをなさり、ご栄光を現わされたのです。

5 信仰の祈り

信じる者がともに祈ることの特徴の第五番めは、「信仰の祈り」です。祈りは信仰の祈りでなければなりません。エルサレムで初代教会のひとびとは、決してあわてふためいて祈ったわけではなく、落ちつきを失って祈ったわけでもありませんでした。かれらは、悪魔に負かされるかもしれないという不安はすこしも感じなかったのです。かれらにとってイエス様の十字架とよみがえりと昇天は、イエス様こそがきりない全能の支配者であることの証明でした。ですからかれらはこの偉大なイエス様に祈ったのです。かれらはなにかぼんやりととおくにおられる神に祈ったのではなく、かれらのまんなかに臨在しておられる主に祈ったのです。

主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにもことばを大胆に語らせてください。

(使徒 4・29)

この祈りは、かれらが絶望して主になげき叫んだことばではなく、臨在しておられる主にまったく信頼しきって祈ったことばでした。私たちは大声で叫ぶ必要はありません。主は私たちのまんなかに臨在しておられるからです。私たちの主は決してとおくにはなれてはおられません。私たちは主としたしく交わりをもつ特権をあたえられているのです。主は私たちのほんの身近にお

られるのです。初代教会のひとびとの確信もそうだったのです。だからかれらはつぎのように祈りました。

主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。
(使徒 4・29)

6 霊的な一致をもつてともに祈る

最後に、第六番めになりますけれども、信者がともに祈る祈りは、霊的な一致から生まれだた祈りでなければなりません。エルサレムの初代教会のひとびとは、主に向かい、ここをあわせ、こえをあげて祈りました。その結果はつぎの聖句に示されています。

信じた者の群れは、心と意思を一つにして、だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。
(使徒 4・32)

エルサレムの信者たちは、生活においてひとつにむすびあわされていました。ですからとうぜんその祈りにおいても一致があったのです。かれらは自分のために生活するという考えはなく、いっさいのものを共有していたのでした。ということは、かれらは生活だけではなく、苦しみも、悩みも、悲しみも、またよろこびも、おたがいに分かちあい、それらを共有していたのです。

私たちはいくら「熱烈」に祈ったとしても、それによって一致を生みだすことはできません。私たちはもうすでにひとつの御霊を飲んで、主なる神によって、内在の御霊によってひとつにな

っているからです。

…そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。(Iコリント 12・13)

このことを信仰の目によく見て、はつきりと知り、主に感謝することだけがたいせつです。このことによってのみ、まことの一致が生まれてくるのです。初代教会のひとびとは、自分自身の問題をいっさい忘れ、ただ主のみさかえが現われることだけを祈り求めたのです。かれらはこのようなただひとつの目的をもっていたからこそ、あらゆる意味でまったくひとつだったのです。

かれらの祈りの目的は、高く天にひきあげられたイエス様のかぎりないご支配が現わされるようにということだったのです。かれらがころをひとつにして祈ったあの祈りの数日まえに、男だけで五千人のひとびとが信者になったことがしるされていますが、これは主のすばらしいみわざの現われでした。しかしかれらはそれでも満足しなかったのです。かれらは全世界、とおく地の果てまでも、福音が宣べ伝えられ、主のご栄光が現わされることをころから願ったのです。

まだまだ救われていないひとびとがおおぜいいるのです。それに、救われてはいるが完全に主に支配されていないために主のご栄光を現わすことができない信者たちもおおぜいいるのです。

主の目的は、ご自身の御子イエス様のご支配が、私たちのうちに、また私たちをおして、私たちの家族をおして、集会ぜんたいをおして、ゆたかに現わされることです。

エルサレムの信者たちは、このためにころをつくして熱心に祈ったのです。ですからかれらは、霊による祈りができ、また天国をも動かすことができたのです。

「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てます。」

(マタイ 16・18)

このためには、主を信じる者たちが、イエス様の復活の事実にもとづいてともに祈ることがたいせつです。また、御子イエス様がご自身をあきらかにされるために、ひとびとが御霊によってともに祈ることがたいせつです。この祈りによつてはじめて、私たちは主とともに主の教会を建てることのできるのです。



▲がんで召された小川泰徳さんの病室で。
左から松見さんご夫妻、小川さん、近藤さん、奥さんの麗子さん。



◀清水・家庭集会で階段にまであふれたひとびと。

「祈る教会」の力

釈放されたふたりは、仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。あなたは、聖霊によつて、あなたのしもべであり私たちの先祖であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。』事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らつてこの都に集まり、あなたの御手とみこころによつて、あらかじめお定めになったことを行ないました。主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によつて、しるしと不思議なわざを行なわせてください。」彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。

(使徒 4・23-31)

「祈る教会の力」、これがこの章のテーマです。

初代教会は「祈る教会」でした。あなたはイエス様を信じるひとびとの群れのなかで、主の御力、主のご栄光があきらかに現わされたことを体験したことがあるでしょうか。あなたがそれを体験したのなら、私はそれがどうしてそうなったのかを言いあてることができます。その信者の

群れのなかに、真剣に祈ったひとびとがいたからです。神の力は、ただ「祈る教会」のなかだけにあきらかにしめされるのです。

はじめに引用した聖句のなかで、とくにたいせつなところをもういちどよく見てみましょう。

釈放されたあたりは、仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。」

(使徒 4・23、24)

この聖句は、初代教会のひとびとがいかに祈ったかを私たちにしめています。私たちがおなじように祈ると、おなじことを体験することができます。ここではとくに、「ともに祈ることのたいせつさ」が強調されています。

日曜日の礼拝にできれば自分の義務をはたしたとと思っている信者がいます。これらのひとびとは、祈り会がそれほどたいせつであるとは思っていません。しかしそれはたいへんな考えがいです。もちろん多くのご婦人がたにとつては、夜に開かれる祈り会にでることは不可能です。とくに夫がまだ主を信じていないばあいはひじょうにむずかしいことです。ですから婦人がたがときにおうじていろいろなところで祈りのために集まり、おたがいひびをかがめて祈ることはたいへんいいことです。

現代はたいへん困難な時代です。しかし、過去の時代もまた、多くの困難がありました。イエ

ス様を信じる者たちは、いつの時代にもたいへんな困難を経験しました。そして多くの信者は、信仰のゆえに命を失いました。

現代の教会や集会は、多くの問題に直面しています。

どうすれば神からとおくはなれているひとびとがイエス様に出会い、救われることができるでしょうか。どうすれば私たちのご奉仕をおしてまことの實が結ばれるのでしょうか。どうすれば信者が成長し、どうすれば教会や集会の責任を負うことができるようになるのでしょうか。どうすれば必要な資金が調達されるのでしょうか。どうすれば分裂している信者たちが一致するようになるのでしょうか。問題につぐ問題です。しかもこれらは、多くの問題のうちの、ほんのひとにぎりにすぎないのです。

これらの多くの問題の根本にある原因はただひとつ、「祈り」があまりにもすくないことにあります。主にあるひとびとがそこをひとつにして集まり、主の御名を呼び求め、祈り、大きなことを主に期待するなら、これらの問題はひとりでに解決されます。

教会や集会が「祈る教会」になるとき、のりこえることができなかつた困難は消えてなくなり、障害物はとりさられ、奇蹟がすぎつきと経験されるようになります。「祈る教会」は、やがて「生かされた教会」になります。「祈り」は「存在しているいのちの現われ」です。

祈りは、主をあがめる真の原動力となります。祈りは、主へのご奉仕の真の源泉となります。つきつめていうと、どんな教会にも、どんな集会にも、ただひとつの問題があります。「祈りがたりない」ことです。ですからすべての信者が、主のまえにともに祈って悔い改めなければなり

ません。教会は「祈る教会」とならなければなりません。

その後、神である主は、土地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

（創世記 2・7）

万物の造り主である主が、アダムに息を吹きこまれてからというもの、人間は空気を呼吸することが必要になりました。空気がなければ人間は生きていけません。空気は酸素と窒素からできていますが、酸素を人工的に供給する技術が化学者によって確立してからは、人工呼吸法によって多くの病人の命が救われるようになりました。患者が自力で呼吸できない状態におちいても、人工的に酸素を供給することによって、生命を維持することが可能になったのです。もちろんこの人工呼吸装置を停止すると、患者はすぐに死んでしまいます。

こんにち、世にある多くの教会は、いきいきしたところがなく、なまぬるく、力つきはてえます。よく「この教会は死んでいる」と言われます。というのは、真のいのちのしるしがほとんど見られないからです。全能である主のはたらきがまったく見られないからです。主のご臨在も、主からの啓示も、そこにはまったく見ることができません。

霊的な酸素は聖霊です。この聖霊が働かれるために、ほんのすこしのよちもあたえられていないとしたら、すべてのいのちがなくなり、おとろえるのはとうぜんです。しかし聖霊が働かれるよちがあれば、ひとびとは祈らざるをえなくなります。そしてひとびとが祈るところでは、主のいのちがいいきと現われ、信者たちは活気と活力にあふれることを体験します。

教会が「祈る教会」でなければ、霊的な実はありません。どれほど多くのひとびとが教会に
つどったとしても、どれほど信者たちがけんめいにがんばったとしても、どれほど熱心に主のた
めにご奉仕したとしても、教会が「祈る教会」でなければ、霊的な実を結ぶことはできません。
主が祝福してくださらないなら、すべての努力はむなしい結果におわります。主が祝福してくだ
さらないなら、私たちはやめたほうがいいでしょう。そして主は、私たちがここをひとつにし
て集まり、主の御名を呼び求め、真剣に祈るときにだけ、祝福してください。

では、「祈る教会」の特徴とはなんでしょうか。使徒の働き4章の23節から37節までに、七つ
の答えが私たちにあたえられています。

- 1 祈りの重要性がみとめられていること
- 2 信仰の目は期待に満ちて主に向けられていること
- 3 この世をべつの目で見ることに
- 4 しるしと奇蹟をこれから待ち望むこと
- 5 聖霊が主イエス様を啓示なさること
- 6 神のみことばが力づくよく宣べ伝えられること
- 7 大きな恵みが現わされること

1 祈りの重要性がみとめられていること

「祈る教会」の第一の特徴は、「祈りの重要性がみとめられている」ことです。つまり、自発

的に祈りたいという要求が、よく存在していることです。

ペテロとヨハネは牢獄に投げこまれました。なぜならかれらは、妥協しないで主に従い、どのような状況にあってもイエス様の福音を宣べ伝える決心をしていたからです。釈放されたあと、かれらはほかの信者たちのところにいそぎました。そして自分たちが体験したことを報告しました。もういちど23節を読んでみましょう。

釈放されたふたりは、仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。

(使徒 4・23)

エルサレムの教会の信者たちは、ペテロとヨハネが体験したことを聞いたとき、どのようなことをしたのでしょうか。つぎの24節を見てみましょう。

これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。」

(使徒 4・24)

かれらは祈ることがいかにたいせつであるかを確信していました。ですからかれらはすぐ、自発的に祈りはじめたのです。かれらはそうせざるをえなかったのです。かれらは主をほめたたえ、主に自分たちの願いをうちあげました。

信者たちが祈ることの重要性を信じていず、自発的な祈りの要求をもっていないとすれば、とうぜん、まわりのひとびとは救われず、主が祈りを聞きとどけてくださるかただと信じることは

ありえません。私たちがところをひとつにして、真剣に、忍耐よく主のみまえに立ちつづけ、祈りつづけるときにのみ、あふれるばかりの祝福がながれでるくだになるのです。そしてそのとくにだけ、主のみこころが実現されます。

2 信仰の目は期待に満ちて主に向けられていること

「祈る教会」の特徴の第二番めは、「信仰の目は期待に満ちて主だけに向けられていること」です。「祈る教会」の信者たちは、「主にだけ信頼したい」という自発的な決心によって特徴づけられています。

これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。」

(使徒 4・24)

つまりかれらは、人間から目をそらし、現在のこまった状態から目をそらし、ただ主だけを見あげていたのです。かれらが見あげた主は、あらゆる悩みを克服してくださり、どんな状況をも完全に支配してくださるおかたです。かれらのたいどはまた、ダビデが詩篇に書きのこしたたいどでもありました。

神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私はゆるがされることはない。

(詩篇 62・6)

私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の望みは神から来るからだ。

(詩篇 62・5)

私たちがどのような苦しみのなかにおかれようとも、私たちがどのような問題に直面しようとも、私たちがどのような攻撃を悪魔から受けようとも、ただひとつたいせつなのは、私たちと主とのむすびつきです。私たちと主との交わりです。そしてまた、「私たちのなかで、私たちをとおして、主のみこころだけが行なわれますように」という私たちのこころからの願いです。そのとき主はぞんぶんに働くことができ、全能の力を現わすことができるのです。

私たちがおかれる状況は、ときとしてまったく絶望的で、めちやくちゃで、なぐさめようがないように見えるかもしれません。しかしそういう状態から目をそらし、主を見あげる者は、主のご臨在を、ご栄光を、あきらかに経験することができます。「祈る教会」の目は、はっきりと主だけに向けられています。ではつぎに、私たちが見あげる主とはどういうおかたなのかを、ごいっしょに考えてみましょう。

・主は「主権者」である

・主は「ご自身を啓示なさる」おかたである

・主は「すべてをごらんになる」おかたである

この三つは、私たちにとってひじょうにたいせつなことです。つまり、すべてを御手におさめておられる「主権者」である主を見あげること、「ご自身を啓示」なさり、おやくそくをすべて

成就なさる主を見あげること、そして「すべてをござらんになる」主を見あげることです。

・主は「主権者」である

24節と28節を見ると、主がいかにおいなる支配者、また主権者であられるかがわかります。

これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。」

(使徒 4・24)

あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを行ないました。

(使徒 4・28)

そして初代教会の信者たちは、このことをよく認識して祈りに専念したのです。主権者である主をあおぎ見ることはひじょうにたいせつです。

・主は「ご自身を啓示なさる」おかたである

つぎに、主は「ご自身を啓示なさる」おかたです。この「ご自身を啓示なさる」主をあおぎ見ることはたいせつです。25節を見ると、そのころの信者たちが旧約聖書の預言を思いだし、また主がかつてなさったことを思いだしながら祈ったことがわかります。

あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの先祖であるダビデの口を通し

て、こう言われました。「なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。」

(使徒 4・25)

そして26節から28節を見ると、主が御子イエス・キリストや預言者をおしてどのようにご自身を啓示なさったか、初代教会の信者たちが、主にどれだけより頼み、信仰を守りとおしたかわかります。

「地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。」事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを行ないました。(使徒 4・26―28)

・主は「すべてをごらんになる」おかたである

それから、三番めに、「すべてをごらんになる」主を見あげることです。

当時の信者たちは、主にたいしてつぎのように語りかけました。

主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。

(使徒 4・29)

「あなたのしもべたちにみことばをだいたんに語らせてください」。そのころの信者たちは、

自分たちの苦しみを見ようとはしませんでした。支配者の力も見ようとはしませんでした。ペテロとヨハネがふたたびつかまえられるという可能性、危険性を見ようとはしませんでした。かれらはこころをひとつにして、主が関与してくださり、不可能なことを可能にしてくださることを期待しながら、主の御名を呼び求めたのです。

私たちがおなじように行動するとき、なにが起きるのでしょうか。

私たちには解決できない問題が、たくさんあります。しかし主は、私たちがこころをひとつにして主の御名を呼び求め、主のまえに立つて、主がこたえてくださるまで祈りつづけることを待ってられます。

3 この世をべつの目で見る

「祈る教会」の特徴の三番めは、「この世をべつの目で見る」です。つまり、イエス様のことを知らずにほろびに向かうひとびとに福音を宣べ伝えたいという自発的な願望をもち、この世を福音をつたえる対象として見るのが、信者たちの特徴となつてゐることです。つぎの29節は「大きな挑戦」です。

主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにもことばを大胆に語らせてください。

(使徒 4・29)

初代教会のひとつとは、ペテロとヨハネが釈放されたという奇蹟を見て、ともに主を賛美しま

した。その賛美はつぎのような願いへと進んでいったでしょうか。「おお主よ。どうかペテロとヨハネをお守りください。二度とかれらがとらえられないようにしてください」。いいえ。決してそうではありません。かれらの願いはべつのことに向かつていったのです。「主よ。私たちがいままでよりもっとだいたんに福音を宣べ伝えることができるようにしてください」と。

また、かれらは決してつぎのようにも願い求めませんでした。「主よ。こんなおそろしいことはもうなさらないでください。二度とこんなことが起こらないようにしてください」。そうではなく、かれらのところからの叫びはつぎのようなものでした。「あなたのしもべたちにみこばをだいたんに語る力をあたえてください」。

これこそが「祈る教会」の最大の願いであり、特徴です。

なによりもたいせつなことは、「多くの失われたたましいが救い主の福音を聞くこと」です。ひとりでも多くのかたがたにイエス様のことが宣べ伝えられることです。イエス様をまだごぞんじないかたがたは、いちにちもはやく、ひとりでも多く、イエス様の救いに導かれなければなりません。この願いが信者のところを満たしていないようなら、そのひとの信仰生活は主によるこばれることができません。

現代の教会や集会は、失われているたましいをイエス様のみもとに導くことが、ここからの願いになっているでしょうか。失われているたましいを暗闇からイエス様の光のなかへ導くことが、ここからの願いになっているでしょうか。それとも私たちは、福音を宣べ伝えるよりも「組織づくり」をしたいのでしょうか。「会員をふやしたい」のでしょうか。たいせつなことは、

ひとびとが「教えを受ける」ことではなく、主イエス様を「知り」、イエス様との交わりにはいることです。

「祈る教会」の特徴とは、どんな犠牲をはらってでもひとびとを主イエス様のもとに導きたい、どんな代価をはらっても絶望しているひとびとに福音を宣べ伝えたい、イエス様を知らせたいと望んでいるひとびとの群れであることです。

4 しるしと奇蹟をこころから待ち望むこと

「祈る教会」の四番めの特徴は「しるしと奇蹟をこころから待ち望むこと」です。しるしと奇蹟を願い求めて自発的に祈り、それを経験することは「祈る教会」の信者たちの特徴です。

聖書は、真剣な祈りがなされるところでは、主がかならず奇蹟を現わしてくださると、はっきりしるしています。祈りにたいする主からのお答えはすべて、私たちには理解できない奇蹟です。私たちが真剣に祈るならば、主は大きなみわざをもつてこたえてくださいます。エルサレムの初代教会の信者たちも、おなじことを経験したのでした。

御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください。
(使徒 4・30)

この祈りは聞きとどけられたでしょうか。たしかに聞きとどけられました。主は奇蹟をなしてくださいました。

よく「奇蹟のときはすぎさった」、つまり現代ではもはや奇蹟は起こりえない、と言うひととがいます。しかしこれは大きなあやまりです。私たちの祈りにたいする主のお答えは、すべてが神の奇蹟なのです。主が行動してくださるから、こんにちもなお奇蹟が起きるのです。

四つの福音書と使徒の働きで、私たちは多くのしるしと奇蹟について読むことができます。主イエス様がたしかにやくそくされた救い主であり、イエス様の弟子たちがほんとうの弟子たちであることを証明するために、多くの奇蹟が行なわれました。ですから、使徒の時代はしるしと奇蹟の時代だったのです。では、私たちの時代はどうでしょうか。私たちの時代はつぎのことばによって特徴づけられています。

確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。

(Ⅱコリント 5・7)

たしかに私たちは、見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。主は私たちを、「あらゆる苦しみから奇蹟をとおして解放したい」と思っておられるのではなく、「あらゆる苦しみにもかかわらず私たちをたかめ、つよめ、それによって主に近づきたい」と願っておられるのです。しかし、もし主が私たちの不信仰と、祈るのをやめることによって両手をしばられてしまうようなことがあれば、奇蹟を行なうことがおできになりません。私たちがこころをひとつにして祈ると奇蹟が起こります。私たちが祈るとき、ひとびとは罪をみとめざるをえなくなり、イエス様のみもとにさげどころを求めようになります。私たちが祈るとき、まったく不可能なこと

が可能になります。

「祈る教会」の特徴はなんでしょうか。

祈りながら「しるしと奇蹟をここから待ち望むこと」です。そこには、恵みの奇蹟を経験する自発的な祈りがあるのです。また主は、霊的な領域においてだけではなく、物理的な領域においても奇蹟をなさりたいのです。主にとって、しるしと不思議なわざをなさるのは、ほんのちいさなことです。

「主に不可能なことがあるのか。…」

（創世記 18・14）

主に不可能なことがあるのでしょうか。いいえ、決して決してありません。主はなんでもおできになるおかたです。主にとって不可能なことはありません。主を完全に信頼しましょう。私たちが祈ると主はかならずこたえてくださり、大きなことを行なってくださいます。主は生きておられ、こたえてくださるとやくそくしてくださっています。

5 聖霊が主イエス様を啓示なさること

「祈る教会」の五番めの特徴は、「聖霊が主イエス様を啓示なさる」ことです。祈る教会の信者たちは、ただ主イエス様だけによるこばれたいという自発的な行為によって特徴づけられます。初代教会の信者たちはここをひとつにして祈りました。すると予想もなかったことが起こりました。

彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のこ
とばを大胆に語りだした。

(使徒 4・31)

神の御霊に満たされたことは、かれらの祈りの結果でした。しかしかれらは、聖霊に満たされ
ることを目的に祈ったものではありませんでした。かれらの祈りの目的はつぎのようなものだった
のです。「もつともつと、あなたのみことばを宣べ伝える勇気を、私たちにあたえてください」。
また、かれらのところからの願いはつぎのようなものでした。「主よ、あなたに従順であるこ
とができますように、あなたによろこばれることができますように、私たちをお助けください」。
神の御霊の目的はつぎのようなものです。イエス様は言っておられます。

「御霊はわたしの栄光を現わします。」

(ヨハネ 16・14)

この御霊とひとつにされている者は、御霊とおなじ目的をもっています。つまりそれは「主イ
エス様おひとりだけが中心であられ、私たちはどんな代価をはらってでも主イエス様にだけよろ
こばれたいのです」という目的です。主イエス様のご栄光が現わされることだけがたいせつです。
ですから主は、ひろく知らされなければなりません。しかもできるだけはよく知らされなけ
ればならないのです。できるだけ多くのひとが福音を聞くべきであり、できるだけ多くの永遠の
実が結ばれるべきです。

6 神のみことばが力づくよく宣べ伝えられること

「祈る教会」の六番めの特徴は「神のみことばが力づくよく宣べ伝えられる」ことです。まだイエス様を知らないかたがたがひとりでも多く、どうしても救われてほしいという自発的な祈りが信者たちの特徴となっていることです。神のみことばが力づくよく宣べ伝えられ、その背後に「祈る教会」が立つとき、多くの罪人が悔い改めるようになり、救いの確信をもつようになります。

最大の伝道者のひとりC・H・スポルジョンは、不思議な方法で主にもちいられ、かれをとおして多くのひとびとが救われました。それはなぜだったのでしょうか。じつは何百人という信者たちが日曜日ごとにかれの伝道活動の最中に祈りつつけていたのです。つまり、多くのひとびとが信仰に導かれ救われたのは、その教会が「祈る教会」だったからです。

たいせつなことは、私たちがもつと「主のみことばを宣べ伝えるひとびとのために祈りつつける」ことであり、主がそのひとびとをもちいることがおできになることであり、奉仕するひとびとが自分自身のための栄光をもとめないことであり、かれらが意識して「主により頼みたい」と願うことです。

私たちは日曜日ごとに、どのようにして集まればいいのでしょうか。「祈りながら、また主から大きなことを期待しながら」集まるべきです。

7 大きな恵みが現わされること

最後に、「祈る教会」の七番めの特徴は、「大きな恵みが現わされる」ことです。

…大きな恵みとそのすべての者の上にあった。

(使徒 4・33)

「大きな恵み」は、「キリストに似た者にされる」と言いかえることもできます。というのは、恵みによって信者たちが造りかえられるからです。「自分から祈って造りかえられること」は、「祈る教会」の信者の大きな特徴です。かれらはこころをひとつにして祈りました。その結果、かれらは聖霊に満たされました。33節には「大きな恵みとそのすべての者のうえにあった」と書いてありますが、その大きな恵みは、三つのことをとおして経験されたのです。

・ひとつになる恵み

はじめに、「ひとつになるための恵み」が経験されたのです。

信じた者の群れは、心と意思を一つにして、…

(使徒 4・32)

かれらの祈りの結果は、「御霊の一致」でした。

平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

(エペソ 4・3)

ここで聖句のおわりのことばに注意してください。御霊の一致を「一生けんめいにつくりだしなさい」ではなく、「たもちなさい」となっています。なぜなら、「御霊の一致」はもうすでにあったえられているからです。

ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隸も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあつて、一つだからです。

(ガラテヤ 3・28)

ここには「あなたがたはみな…ひとつだからです」とあります。「ひとつになるべきだ」ではなく、もうすでに「ひとつだから」と書いてあるのです。初代教会のひとびとがじつさに経験したことは、まさにこのとおり、イエス・キリストにあつてみながひとつとなったことでした。イエス様を信じるひとびとの「一致」よりもすばらしいものがあるでしょうか。教会のかしらである主イエス様が、信者の不一致のゆえにどれほど苦しんでおられるか、私たちは考えてみたことがあるでしょうか。「ひとつになる」ためのひけつは、まことの、ここからなる、正直な、ともに祈る「祈り」にあります。私たちはみな、主のまえにまったくちいさな者になるからです。主のまえにはもはや、ほかのひとを批判したりさばいたりする勇気をもつひとはだれもいません。

・断念する恵み

つぎに「断念する恵み」があきらかにされました。

…だれひとりその持ち物を自分のものと言わず、すべてを共有にしていた。

(使徒 4・32)

初代教会の信者たちは、主の愛をいただき、その愛をどうしてもまわりのひとびとと分かちあいたいと思ったのです。このようにイエス様の愛をまわりのひとびとと分かちあうことが、こんにち、なによりたいせつです。私たちのまわりのひとびとは、なにかを「教えられたい」のではなく、「愛されたい」のです。

私たちは「断念する」覚悟があるでしょうか。私たちはつぎのようなたいどをとる覚悟があるでしょうか。「私や、私が持っているものなど、どうなってもかまいません。イエス様が栄光を現わしてください、イエス様の恵みが私たちの生活をとおしてあきらかになるのだったら、私はなんであろうとよろこびます」と。私たちがともに真剣に祈ることによってこの霊は私たちにあたえられます。

・寛大さの恵み

三つめは「寛大さの恵み」です。

∴すべてを共有にしていた。

(使徒 4・32)

このような思いは人間の生まれつきものではありません。このような寛大さは、聖霊に満たされたことの結果なのです。

彼らの中には、ひとりも乏しい者がなかった。地所や家を持っている者は、それを売り、代金を携えて来て、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に従っておのおのに分け与え

られたからである。

(使徒 4・34、35)

私たちは「祈る教会」の特徴について、ごいっしょに考えてきました。教会とは聖霊によって生まれ変わったひとびと、また聖霊によって主イエス様のからだにぞくするようになったひとびとの集まりであり交わりです。「祈る教会」とは、ともに祈るひとびとのことです。私たちのキリスト集会もまた、主によるこばれる「祈る教会」であるために、すべてのことをしようではありませんか。主によるこばれる「祈る教会」とは、決してあれやこれやをすることではなく、また聖書を勉強して精通することではありません。ただ「祈る」ことよってのみ、それが実現されるのです。私たちがみな、いままでよりもっと祈りに専念するようになれば、さらに多くの主のはたらきと奇蹟を経験するようになります。

聖書のみことばと

全国にひろがる家庭集会

今は恵みの時、今は救いの日です。

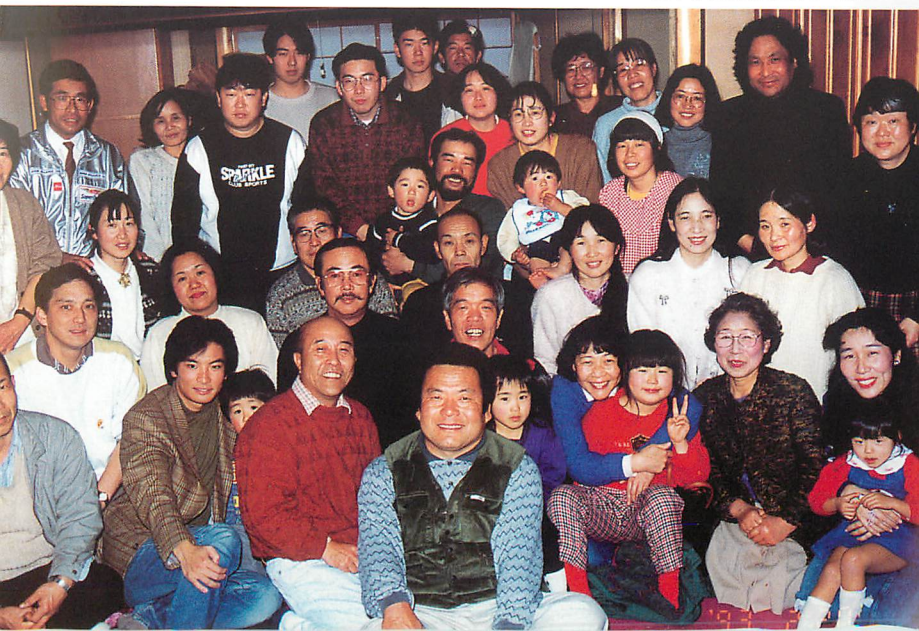
(Ⅱコリント 6:2)

家庭集会は、イエス様を中心にした、あたたかくよろこびにあふれた自由な集いです。みことばがとりつがれ、証しがされ、聖歌が歌われ、なかよく語りあい、それらをとおしてイエス様に出会い、多くのかたがたが救われます。

イエス様をまだごぞんじないかた、お気軽にどうぞ。

※なお、各地の家庭集会の住所・電話番号は、巻末の「キリスト集会のご案内」をごらんください。

▼児島・家庭集会(森正樹さん宅)



「私と私の家とは、主に仕える。」すると、民は答えて言った。「私たちが主を捨てて、ほかの神々に仕えるなど、絶対にそんなことはありません。：私たちもまた、主に仕えます。主が私たちの神だからです。」

(ヨシユア 24 15、16、18)



▲春日部・家庭集会(吉田浩さん宅)

「家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったかを、話して聞かせなさい。」そこで彼は出て行って、イエスが自分にとどんなに大きなことをしてくださったかを、町中に言い広めた。

(ルカ 8、39)



▼西条・家庭集会(渡辺初美さん宅)

彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて、「私たちはメシヤ(訳して言えば、キリスト)に会った。」と言った。彼はシモンをイエスのもとに連れて来た。



▲坂出・家庭集会(内田厚純さん宅)

それで父親は、イエスが「あなたの息子は直っている。」と言われた時刻と同じであることを知った。そして彼自身と彼の家の者がみな信じた。

(ヨハネ 4:53)

そして、彼女も、またその家族もバプテスマを受けたとき、彼女は、「私を主に忠実な者とお思いでしたら、どうか、私の家に来てお泊まりください。」と言って頼み、強いてそうさせた。

(使徒 16:15)

▼相模原・家庭集会(神沢毅さん宅)



(ヨハネ 1:41, 42)



▲八王子・家庭集会(古田稔さん宅)

ふたりは、「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」と言った。そして、彼とその家の者全部に主のことは語った。看守は、その夜、時を移さず、ふたりを引き取り、その打ち傷を洗った。そして、そのあとで、彼とその家の者全部がバプテスマを受けた。それから、ふたりをその家に案内して、食事のもてなしをし、全家族そろって神を信じたことを心から喜んだ。

(使徒 16: 31-34)

▼病院でも福音が宣べ伝えられて



イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。」

またその家の教会によく伝えてください。

(ローマ 16:5)



人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

(ルカ 19:9、10)

そして毎日、心一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事をともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。主も毎日救われる人々を仲間に加えてくださった。

(使徒 2:46, 47)



▲伊那・家庭集会(宮城昭代さん宅)

そればかりか、主を信じる者は男も女もますますふえていった。

(使徒 5:14)



▼上福岡・家庭集会(岡崎龍夫さん宅)



▲小田原・家庭集会(香川哲さん宅)



こうして神のことは、ますます
広まって行き、エルサレムで、弟子
の数が非常にふえて行つた。

(使徒 6:7)

そして、主の御手が彼らとともに
あったので、大ぜいの人が信
じて主に立ち返った。

(使徒 11:21)

わたしは主によつて大いに
楽しみ、わたしのたましい
も、わたしの神によつて喜
ぶ。主がわたしに、救いの衣を着
せ、正義の外套をまといわせ、花婿の
ように栄冠をかぶらせ、花嫁のよ
うに宝玉で飾ってくださいるから
だ。

(イザヤ 61:10)



私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。

(エレミヤ15:16)

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれ



▲成城・家庭集会(上野亘さん宅)

▼神戸市東灘区のキリスト集会(田中公会堂で)



ども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。

(Iベテロ1:8)

「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。」

(マタイ18:3)

▼盛岡・家庭集会(深沢門太さん宅)



「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によって、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる。」

(ルカ24:46, 47)



主のご栄光を本を通して証しする。
ベックさん、酒井さん。

▼ディレンブルグ大会の関係者、司会者のかたがた。



よろこびの榊上さんご夫妻。



アメリカから参加のグレイス・リンさん、
リョオ・アキオさん。

ドイツ 第1回 よろこびの集い

シュトゥットガルトの東南、美しい大自然に囲まれたミヘルスベルグの宿泊施設で、日本からA、Bグループそれぞれ二百名、合計四百名が参加し、「ドイツよろこびの集い」が開かれました。アイドリゲンゲン・ムッターハウス、ミヘルスベルグ、ディレンブルグ(大念、ビベラッハ、シェーンアイヒなど各所で集会が開かれ、ドイツのかたがたとひとつになって、主を証しし、賛美しました。Aグループでは自由参加でできた約百名の管弦楽団、合唱団が、各集会のホールでヘンデルの「メサイア」から5曲を賛美しました。帰国

からだは一つ、御霊は一つです。

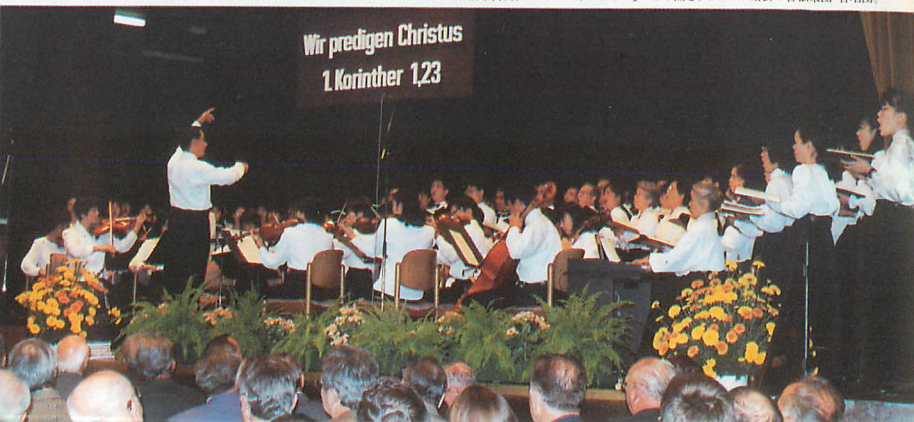
(エペソ4:4)



チロリアン・ハットの松見さん、
藤本さん、福島さん。

A グループ 1994 10・3 ～10 / B グループ 10・10～17

こころをひとつに主を賛美。ヘンデルの「メサイア」から5曲を。キリスト集会の管弦楽団・合唱団。





◀祈ってくださっている姉妹がた。



▲ミヘルスベルグ(宿舍)で奉仕してくださった姉妹がた。



▼なかよくドイツのみなさんと。

▼ミヘルスベルグのホールにひびくメサイア。



そのとき、私たちの口は笑いで満たされ、私たちの舌は喜びの叫びで満たされた。そのとき、国々の間で、人々は言った。「主は彼らのために大いなることをなされた。」…私たちは喜んだ。

(詩篇 126:2,3)

の日、私たちを暖かくもてなしてくださった宿舍の姉妹の前で歌った「ハレルヤ」は、草原と森にこだましました。その一部を写真でご紹介します。

(写真撮影・遠定G・ベック他)

◀Aグループの200人のみなさん。シュトゥットガルトで。

▼「お話しください。しもべは聞いております。」(1サムエル3・10)の額のまで。



それで、私はすぐあなたのところへ人を送ったのですが、よくおいでくださいました。いま私たちは、主があなたにお命じになったすべてのことを伺おうとして、みな神の御前に出ております。



おいしい朝食。ベックさんをかこんで。



ノイシュバンシュタイン城で。荒井さん。



▲ブレッジさんご夫妻、ローゼさんご夫妻とともに。

▼Bグループの200人のみなさん。ミヘルスベルグのホールまで。





81歳のゴース・ブルー
姉と宮原さん。



ミュンヘン空港でのお出迎え。



シェーンアイヒでのあたたかい集会。



ローテンブルグにて。



▲ルツ姉をかこんで。松代のみなさん。



熊ちゃんとなかよく。吉田さん。

▼左からマリア姉、アイドリゲンの責任者ベルタ姉、吉田さんご夫妻。



「わたし（イエス様）はこの民と異邦人の中からあなたを救い出し、彼らのところに遣わす。それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によって、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中にあつて御国を受け継がせるためである。」

平井さんご夫妻。シュトゥットガルトで。



芝田さんご夫妻。



ディアコニッセン・ムッターハウスの建物。

「この天地は滅びます。しかし、わたしのことは決して滅びることがありません。」

(ルカ 21:33)



よろこんでいる浅利さん。



カーリン姉。



▲アイドリゲンでのメサイアの賛美。

▼銀行支店長で著作もあるカウフマンさんご夫妻と坂井さん、南原さんほか。





ドイツのかたがたのコース。



ルツ姉といっしょに。



野口さんご夫妻。



▲子どもたちもおおよろこび。

▼祖国の日、ミヘルスベルグの門のまえで。草原と森に「ハレルヤ」がこだまして。



◀ 小さい日本人と大きいドイツ人。



▼ベックさんの弟ディーターさんと松見さん。

主を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。

(イザヤ 55・6)

「来てください。」と言いなさい。渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。

(黙示 22・17)

「だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」

(ルカ 11・10)



▲ティディ湖にて。



Bグループの女声コーラス。ここをひとつに主を賛美。



タベヤー姉と桜井さん、和田さん。

▼救われて65年の91歳と、救われて1年の93歳。



▲「この旅は生涯の冠、いつ召されても感謝です」と謙さん。



お別れの日に。ルツ姉と水内さんの奥様と。



水内さんご夫妻。



聖歌の五重唱。

" Wir sehen uns wieder."

「またお会いしましょう」

ティディ湖を船で。



祈りにささえられて 三つの集いのご紹介

祈りにささえられたキリスト集会の3つの集いをご紹介します。

1 ともに祈り、ともに働くよろこび、ドルカス会

また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。

(ピリピ 4・19)

みなさまの祈りにささえられて、ドルカス会のささやかなご奉仕もはや四年がたちました。ほんのささやかなものをイエス様にささげたいと、みなさまと祈りあつてはじめたご奉仕でしたが、私たちはこれらのご奉仕をとおして、こころをひとつにして主に頼り、ともに祈ることのすばらしさ、ともに働くことのよろこびなど、たくさんのごことを主からいただきました。そして主は、この一年間のあいだも、私たちの祈りにこたえて、かずかずのすばらしいみわざをしめしてください、ご栄光を現わしてくださいました。その恵みのかずかずをひとりでも多くのかたがたに知っていただきたいと願って、そのうちのいくつかを証しさせていただきます。

・ウエディング・ドレスをとおしていただいた主のお答え

キリスト集会では数多くの結婚式が行なわれ、主の祝福にあふれた幸せなカップルがつつぎつつぎに誕生しています。が、挙式の日に着るウェディング・ドレスが少ないという悩みがありました。去年の春、ウェディング・ドレスが一着、キリスト集会に献品されました。またドルカス会で二着のウェディング・ドレスを制作させていただき、それを着た花嫁さんから、キリスト集会の結婚式に必要なかたがあればいつでもお使いくださいという申しでいただきました。月曜日のドルカス会るとき、私たちは三着のウェディング・ドレスをまえにしてここをひとつにして祈りました。

「イエス様、ウェディング・ドレスがたりないのです。みなさまが使われるのでしたら、三着では少なすぎます。十着か、できれば十二着、ドレスがそろいますように導いてください」。この祈りは、つぎの火曜日にはやくもこたえられました。学び会のあとで、ある年配の奥さまがウェディング・ドレスを持ってこられ、主にささげたいとミンヘンさんにわたしてくださいましたのです。それにつづいて、つぎからつぎへと思いがけない方法でドレスが集まってきました。それも、一着一着が美しい、すばらしい物語をとおして。なかにはしみがあるものもありましたが、主に祈って、キリスト集会に来ておられるクリーニング店のかたにお願いしましたら、一着もむだにならずに美しくまっ白にしみぬきすることができました。また、これらの利用についても、ただ「もちいられますように」とみなで祈るだけでしたが、なんの宣伝もしないのにつぎつぎに利用するかたがたがあらわれ、すべてがイエス様によつてそなえられているのでした。

この春結婚したあるかたは、福音センターで式を終えたあと、クリーニングのことを相談して

いるうちに、ご自分で買った豪華なドレスをきゅうに献品する気になりました。「こんなデザインのドレスが着たくてやつと見つけたものだけど、主にささげたほうがずっとイエス様によろこばれるものね。手もとにおいておきたかったけど、見たくなったらセンターに来るわ」と、はればれとしたお顔でよろこんでおられました。

こうしてこの春までに、ウェディング・ドレス十二着、男性用フォーマルウェア五着、花撒きの女の子用ドレス八着、男の子スーツ一着が私たちの祈りへのお答えとして、主によってあたえられました。この一年にこれらのドレスやウェアをご利用になった件数は、二十六件でした。

・新しいミシンをとoshiteいただいた主のお答え

四年まえ、このご奉仕をはじめたとき、行きつけのミシン屋さんから中古のミシン三台をただでいただきました。そのときはみなでおおよろこびしたのですが、いざ使ってみるとたいへん不便で使いづらいミシンでした。仕事のしづらいいじめな日々でした。去年の夏、とつぜん決まったあるかたの結婚式の花嫁さんのドレスをつくったことで、イエス様の愛のそなえに感動なされた花嫁さんのご両親がドルカスにいらっしゃいました。そのときちつとも思うように縫えないミシンをあいてに作業している私たちを見て、いいミシンがあたえられるようにと家で祈られたのです。主はこたえてくださり、職業用ミシン一台、巻きロックつきミシン一台が感謝献品されることになりました。おなじころに、地方に住んでおられるあるかたからも職業用ミシンとロックミシンの二台が送られてきました。このかたは目をわるくして好きな洋裁ができなくなり、買っ

たばかりの二台のミシンをどうしたらいいか、いく日も祈られたそうです。私たちのみじめな作業は、よろこびにあふれた感謝の作業に変えられました。

・献品保管のプレハブをとおしていただいた主のお答え

ドルカスには多くのかたがたから布地や毛糸、苳、ひもなどたくさん献品があります。それらを保管する場所がなくて長年悩んでいました。あるかたの庭にある六畳のプレハブを、ご好意でお借りすることができましたが、集会からとおく、急な坂道があつて、重い布地をはこぶたびにつらい思いをしておりました。どうか集会のちかくに保管場所をそなえてくださいと、みんなで三年のあいだ祈りつづけていました。

去年の七月に吉祥寺キリスト集会を改装することになり、その費用のためにみんなでバザーをし、主の恵みを大きく受けることができました。そのときに、屋上にキリスト集会の出版物を入れておくプレハブの倉庫を建てることになり、私たちもドルカスの献品保管のスペースを主からいただけるようにお祈りをしました。この祈りはすぐにこたえられました。プレハブができるまでの一カ月ちかくのあいだに、いろいろなかたがたからの献金がよせられ、プレハブ一棟ぶんの費用がびつたりとできたのです。

いまでは、月曜のご奉仕のとちゅうでも、たりないものをきがるに屋上にとりに行き、品えらびができるようになり、夢のようだとよるこんでおります。

ほかにも主が私たちの祈りにこたえてくださったことは、ほんとにたくさんあり、ひとつひとつ

つをご紹介していくと、どんなにページがあってもたりません。

ほんとに、主が私たちの祈りにすぐこたえてくださるお答えも、また、ちいさな苦難をとおしてちよつと時間をかけてこたえてくださるお答えも、ともになんとうるわしく、美しいものでしょうか。私たちの祈りとおして、ご奉仕をとおして、このたびもはかりしれない主のあわれみと恵みを、いっばい、いっばいいただきました。

(記 佐々木サチ子)

2 苦しむ子どもたちと家族をとおして、主のご栄光が現されることを祈る集い。

「苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。」(詩篇 50・15)

「もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」(マタイ 18・19、20)

私たちは、悩みや苦しみ、心の病をもつ子どものことで、日々問題に直面している母親の集まりで、吉祥寺キリスト集会の火曜日の学び会のあとで部屋に集まり、ごいっしょに祈っております。悩みや苦しみ、心の病とは、登校拒否、いじめ、非行、暴力、浪費、虚言、拒食、過食、不

潔恐怖症、いわゆるノイローゼ、鬱病など、そのあらわれかたはおひとりおひとりによって、みなちがいます。

この祈り会にはじめてこられるかたは、子どもの苦しみについていろいろなところをめぐり歩いたあげく失望落胆し、おみえになることが多いのですが、まず聖書のみことばとイエス様に出会われ、いままでイエス様を無視して生きてきた罪をしめされて悔い改め、主を受け入れて救われます。そしてそのけっか聖霊が働かれ、そのお母さま自身がうちがわから変わってこられます。イエス様に出会うことは大きな喜びであり、すべてはそこから変わっていきます。

主にある家族の姿は、聖書のつぎのみことばのとおりです。

不品行、汚れ、情欲、悪い欲、そしてむさぼりを殺してしまいなさい。…神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。…キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌により、感謝にあふれて心から神に向かつて歌いなさい。…妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。夫たちよ。妻を愛しなさい。つらく当たつてはいけません。子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。

ん。彼らを氣落ちさせないためです。(コロサイ 3・5、12、14、16、18、20、21)

家庭のなかのいろいろな問題のほんとうの原因は、たったひとつ、イエス様が家庭の中心におられず、イエス様がその家庭を支配なさっておられないところにあります。イエス様を知らなかったため、またイエス様をこばんだために崩壊した家庭はかずしれません。

子どもの登校拒否、非行、暴力、浪費、心の病、いわゆるノイローゼなどのほんとうのみなもととは家庭のなかのイエス様の不在にあります。つまりそれらの問題の根源は、子ども自身がイエス様を知らないため自分を神として自分かつてにふるまう「わがまま」であり、イエス様なしに生きる「孤独」であり、そしてたしかな土台なしに生きている「不安」です。子どもは反抗、非行、ばあいによつては病氣というかたちでしか自分たちの不満を表現できなくなっているのです。イエス様を知れば、子どもは「自分を神とするわがまま」から解放され、自分を愛してください。イエス様を知って、孤独から、不安から解放されます。

子どもたちは心のなかで、いつもなかがよくて一致している両親、断固として変わらない、信頼できる両親、いつも自分を見つめてくれ、まちがうとしかたつくれる両親を求めています。

しかし、このような両親、このような家族関係は、イエス様なしでは実現されえません。両親の人間的能力、つまり人間の能力や努力によつてはこのような家庭をつくることはできません。ただイエス様に従っている両親のみが、イエス様に従っているがゆえに、しっかりした土台に立つことができ、主がしめされた家族関係に立つことができます。

イエス様を信じ、救われた親は、いままで問題だと思っていたことが問題ではなくなり、自然に子どもにたいする接しかたが変わってきます。ある場合には、よく祈ったきっかけ、自分を神としてしまい、自分を制御できないでこまっている子どもに、その限界とあやまりに気をつかせ、まずイエス様に出会ってもらうために、あえて子どもにきびしくすることも必要になります。私たちを愛してくださる主は、愛するものを、愛するがゆえに懲らしめられるおかたでもあります。「わたし（主）は、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。」

（黙示 3・19）

…主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。

（ヘブル 12・5、6）

むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる。

（箴言 13・24）

私たちがどうすればよいかを主に祈り求め、主にあつて妥協しないでみことばだけに従ったとき、祈りへのお答え、みことばのお約束が現実のものとなります。私たちはその多くの実例を見せていただきました。

「時が来くれば、わたし、主が、すみやかにそれをする。」

（イザヤ 60・22）

また、私たちの祈りへのイエス様のお答えは、まことにすばらしく、想像もできない方法でこたえてくださいます。主の、私たちひとりひとりにたいするおとりはからいのみながいます。じつにふしぎな方法でみこころを現わしてください。

また主は、子どものことをとおして、あなたを、あなたの家族を、みもとにくるように導いてくださっておられます。子どものことをとおして、母親、父親、兄弟姉妹、親戚、知人などの多くのかたがたに福音が宣べ伝えられ、多くのかたがたが救われます。それを見るにつけても、主のご計画のふしぎさに、ただ主をおそれ、感謝するのみです。

もちろん、日々の生活のなかで問題がなくなるわけではありません。状況が変わるたびに私たちはつい動揺してしまいますが、祈ることができるから、みことばにより頼むことができますから、イエス様がいらっしゃるから、立っていられます。耐えていきます。一瞬一瞬の戦いはいぜんとして続いていたとしても、祈りによってそれらはすでにイエス様の御手のうちにあつて、すべてはいちばんいいときに、いちばんいい方法で解決してくださいますから、それを確信し、信頼して日々戦っていくことができます。

子どものために、親にとつてできることはたったひとつ、最善なことはたったひとつしかありません。子どもをイエス様のもとに導くことです。問題の真の解決は、イエス様のもとにしかありません。すべての問題は、イエス様によって、根本的に、永遠に解決されます。どうか私たちの祈り会にきて、イエス様に会ってください。

「わたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。」 (ヨハネ 6・37)

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。

(使徒 16・31)

(記 江藤恵子)

3 現代病からの解放と回復を。A・Aのご案内

またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。」 (ヨハネ 9・1-3)

私たちのA・A (武蔵野グループ) は、毎週火曜日午後七時から、吉祥寺キリスト集会の一室で開いています。

A・Aとはアルコール・アノニマス (無名のアルコール中毒者たちの意) の頭文字から名づけ

られたように、アルコール中毒者、およびその家族が、悲惨な状況から、身体的にも精神的にも回復していくための場です。私たちのA・Aは、アルコール中毒者たちだけではなく、薬物依存、ノイローゼなどあらゆる精神こころの病の者たちとその家族、関係者たちが自由に集うことができ、現代病と呼ばれる精神病からの解放と回復を経験することができるのです。

いまの時代のもっとも恐ろしい病気とは、孤独という症状の精神病です。アルコール中毒も、薬物依存も、ノイローゼも、あらゆる精神病の原因と結果は、孤独です。現代の医学も、哲学も、心理学も、人間の孤独という病気にたいして無力です。孤独の症状とは、精神こころの盲目です。目は開いているけれども見えない盲人です。暗黒の世界です。

イエス・キリストは、孤独な人に向かって、「わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。(ヨハネ14・18)」と言われました。

イエス・キリストは、盲人に向かって「この病気は、あなたのせいでもありません。両親や家族のせいでもありません。神のわざが現われるためです」と語られました。

これは、全能者なる神の約束です。唯一、真理まことの神であるイエス様の永遠に変わらぬ約束です。暗黒の中の光です。

私たちのA・Aは、この全能なる神、イエス様に出会う場所です。A・Aの「12の伝統」は、つぎのように宣言しています。「われわれのA・Aの唯一の權威は、A・Aのうちにご自身を現わしてくださる愛なる神である」と。神の愛とは、神の約束であり、イエス様ご自身です。

アルコール中毒で苦しんでいる人たち、薬物依存で泣いている人たち、ノイローゼで呻いてい

る人たち、どうか、ありのままA・Aに来てください。そこで、あなたが正直にその苦しみを告白するなら、あなたはイエス様に出会えます。

イエス・キリストは断言しておられます。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。(ヨハネ14・6)」と。そして「…真理はあなたがたを自由にします。(ヨハネ8・32)」と。

現代の医学が無残にも放棄したこの病からの回復と、自由への解放は必ず成る神の約束です。A・Aの中心におられる、愛なる神、イエス様は、今日もあなたを待っております。あなたのために神のわざ、神の救いを用意して、待つておられます。

(記 染野茂夫)

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

一 みことばの大切さ

ヨハネ 17・17 エレミヤ 15・16 Iヨハネ 5・13 Iペテロ 1・23 詩篇 119・105、160、162

二 悔い改めと信仰

Iヨハネ 1・9 箴言 28・13 詩篇 32・1、5 イザヤ 55・6、7 ヨハネ 6・37

三 私たちの身代わりとなられたイエス

イザヤ 53・4、6 Iペテロ 2・24 IIコリント 5・21

四 血潮の価値

イザヤ 1・18 ローマ 3・24、25 Iヨハネ 1・7 エペソ 1・7 Iペテロ 1・18、19
黙示 12・11

五 確信の根拠

イザヤ 43・1、25 イザヤ 44・22 ルカ 7・48 ヘブル 8・12 ヘブル 10・17
詩篇 103・12 ヘブル 13・5、6

六 思いわずらうな

マタイ 13・22 マタイ 6・25 } 32 ピリピ 4・6、7 Iペテロ 5・7 } 9 詩篇 55・22

七 試験の時

ヤコブ 1・12 ヤコブ 4・7、8 Iコリント 10・13 Iペテロ 5・8 } 10
Iペテロ 1・5 } 7 IIコリント 12・9、10 ローマ 5・3 } 5 ローマ 8・28
イザヤ 40・29 } 31

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇跡であり、神の実在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」
(エレミヤ 31・3)

リンデの、主に従い通す態度は、吉祥寺キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起し、多くの人々が自分の支配権をイエスさまに明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ拠り頼む者へと変えられています。

なおこの本は韓国語版、ドイツ語版が出版されました。さらに病床にあつて本の読めない方々のために、PBAのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ(8本1組)があります。

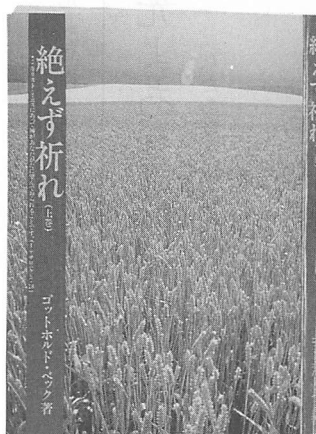


ゴットホルド・ベック編著

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

価三三〇円

お申込みはハガキに本の名前(第何集、上下巻の別)、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。10冊以上は特別価格でご協力します。



絶えず祈れ(上巻)

ゴットホルド・ベック 著

価四〇〇円

お申込みはハガキに本の名前(第何集、上下巻の別)、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト教会まで。
代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

絶えず祈れ(上巻)のおすすめ

ゴットホルド・ベック 著

主なる神は私たちが祈ることを望んでおられます。なぜなら主なる神はあふれるばかりの祝福を私たちにそそぐとしておられるからです。祈りこそ神の富のための鍵なのです。そして信仰は、祝福が私たちのうえにそそがれるとびらをあけるのです。祈りのほんとうのたいせつさをよく知ることができれば、まだ救われていないかたがたはイエス様のみに導かれ、また、すでに救われているかたがたは、いまよりもさらにさらに何倍も何倍もイエス様に祈るようになるにちがいありません。そして、私たちが主に祈るためのはげましとなるのが、この「絶えず祈れ」の上巻であり、今回刊行された下巻です。この上巻には、「絶えず祈れ」、「まことの祈り」、「祈りへのまねき」、「真剣な祈り」、「祭司としての奉仕」、「イエスのみ名によって祈る」、「祈りのかぎらない可能性」の七つのメッセージがおさめられています。

光よあれ「私たちは主のもの」証しシリーズのおすすめ

光よあれ

「私たちは主のもの」

第1集

25人の証し

価三三〇円

山本孝子さんの「み翼のかげで」、野口広教授の「Klein a. ber mein 从小 Klein aber Dein へ」、野田繁さんの「虚しさからの脱出」、染野待子さんの「主が語られたことは必ず実現する」、池田傳一さんの「光の中に移されて」など、またベックさんのメッセージ「神は愛です」を収録。

第2集

25人の証し

価三五〇円

松見敬三さんの「曙からお昼過ぎまで」、古田稔・康子夫妻の「すべてを主の御手に」、アルコール依存症から脱出した染野茂夫さんの「駆けのほりし主の道」、重田定義教授の「主の御名はほむべきかな」など、巻末にはベックさんの「無限の宇宙にある神」が掲載されています。

第3集

42人の証し

価三三〇円

江藤善清・恵子夫妻の「天国を望み見て」「主に導かれて」、蘇畑卓郎さんの「とこしえの磐」、納富信子さんの「主のご真実に支えられて」、武井達郎・生子夫妻の「主のよくしてくださったことを何一つ忘れるな」など。ベックさんの「みこころが地でも行なわれますように」を巻末に収録。

光よあれ

「私たちは主のもの」

第4集

66人の証し

価三五〇円

ニュースキャスター山川千秋さんの夫人穆子さんの「ここに、主がおられる」、故笹川郁夫・公子夫妻の「もはや私ではなく、キリストが私の中で」「走るべき行程を走り終えた夫」、竹本誠一さんの「主に導かれて七十年」、大塚二郎助教授の「高慢を砕かれて」などが掲載されています。

第5集

67人の証し

価三八〇円

吉屋和子さんの「その栄光は地に滴ちわたれ」、村上誠弁護士と夫人の「主とともに歩む」「キリストにはかえられません」、田中順治・節子夫妻の「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした」「数えてみよ、主の恵み」、大城紀美子さんの「今日まで灯し続けた信仰の灯」など。

第6集

70人の証し

価三八〇円

玉城新正さんの「恐怖から解放たれて」、新井稔さんの「妻の安らぎとともに救われて」、岡本広海・基子夫妻の「キリストにある愛、喜び、平安」「今あるは神の恵みです」、森島左武郎・久仁子夫妻の「あなたは豊かなところへ…」「栄光と支配がキリストにありますように」ほか。

お申し込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号（記入の上、〒一八〇武蔵野市吉祥寺本町四一九一一吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込を。なお一部品切れの節はご容赦ください。

光よあれ 「私たちは主のもの」証しシリーズ 第7集のおすすめ

イエス様がいらっしやるころには、あふれるばかりのよろこびと平安があります。「わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことがありません。」(ヨハネ6・35) なんと多くのかたがたが、このみことばの真理を体験的に知るようになったことでしょうか。この7集は、愛する子供を召されて平安のうちにある神竹さん夫妻、苦しみのすえ主にあるやすらかな生活にみちびかれた上野(セツ)さんご夫妻、東大の社会心理学教授の鮑戸弘さんと奥様、また沖縄の友野さん夫妻など六十九人のかたがたの証しにあふれ、カラー特集には「日本に、世界にひろがるよろこびの集い・バイブルキャンプ」、また巻頭と巻末にはベックさんのメッセージがおさめられています。「光よあれ」シリーズの最新刊ですので、ぜひお読みください!



光よあれ 「私たちは主のもの」 第7集

「私たちは主のもの」
69人の証し

価四〇〇円

お申込みはハガキに本の名前(第何集、上下巻の別)、冊数、氏名、住所、電話番号(記入の上)〒180武蔵野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト教会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。



なにももの私たちが神の愛から引き離すことはできない（上・下巻） ゴットホルド・ベック著

吉祥寺キリスト教会でのベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙」1章から8章までを上巻に、9章から16章までを下巻にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

私たちが神様のみことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためにではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

なにももの私たちが

神の愛から引き離すことはできない（上・下巻）

ゴットホルド・ベック著

各巻とも価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト教会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。

キリスト集会のご案内

・牧師制度がありません……キリスト集会には牧師制度はありません。いろいろな職業のかたが自発的に責任を分かちあい、いっさいの強制はなく、純粹に聖書のみことばのみに立ち、主だけを中心とする交わりを大切にするとびとの集いです。

・組織も、会則もありません……キリスト集会には役員会も、総会も、定例会議も、会則もありません。みなが助けあつて重荷を分かちあい、すべてが自発的によろこびをもつてなされます。・会員制度がありません……会員として登録されるようないわゆる会員名簿にあたるものはありません。出入りは自由であり、宗教団体的な制度はいっさい排除して、主ご自身のみを頭とし、主ご自身のみが満ち満ちておられることを祈り求めている集会です。

・献金制度がありません……月定献金、年定献金などの献金制度はなく、すべての献金は自発的に行なわれ、無記名ですからだれがいくらささげたかは主のみがごぞんじです。

・日曜礼拝……祈りと賛美がつぎつぎにささげられ、主の十字架のあがないの血潮を覚え、パンとぶどう液にあずかります。あらかじめ決められたプログラムはなく、主に示されるままに各人が祈り、賛美します。礼拝の後は福音集会で、兄弟によつて主のみことばがとりつがれます。・家庭集会……家庭でひらかれる集会で、兄弟によるメッセージ、兄弟姉妹による証しがあり、福音の喜びをつたえる集いです。世界で百箇所以上あり、多くの所で日曜礼拝が行なわれます。・よろこびの集い……西軽井沢国際福音センターはじめ世界各地で開かれ、全国のひとびとが集まる大きな集会です。快適で経済的な宿泊設備を利用し、ほとんど毎週どこかで開かれます。

吉祥寺キリスト集会のご案内

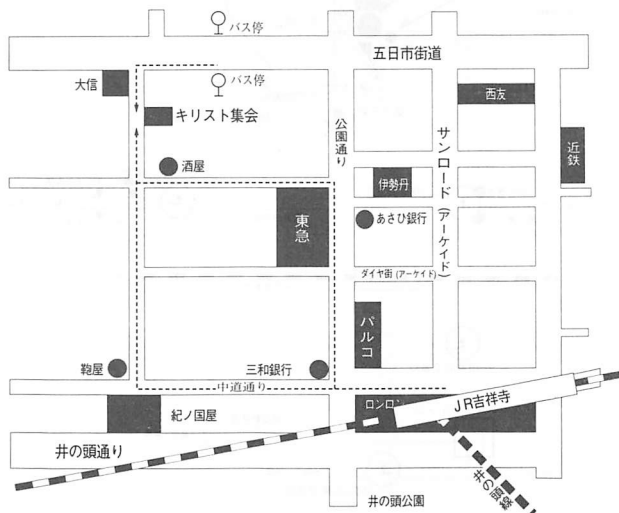
吉祥寺キリスト集会のご案内

私たちは、純粹に聖書の真理だけを学び、伝える者の集いです。会員制度を持たず、出入りは自由であり、いかなる党派、組織にも属していません。この本をお読みになって聖書と福音に関心のある方は、ぜひお気軽においでください。お電話をお待ちします。

吉祥寺キリスト集会

G. ベック 0422-22-2016 東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11 〒180

日曜礼拝	10:30	14:00	19:00	火曜学び会	11:00
日曜メッセージ	12:00	15:00	20:00	木曜祈り会	19:00
子供日曜学校	9:00				
中高生日曜クラス	9:00				



● AAミーティングへのご案内

AA武蔵野グループは、吉祥寺キリスト集会において、毎週火曜日午後7時よりAAグループ・ミーティングを開催しています。アルコール・薬物などの依存症で悩ま苦しんでおられる方、またそのご家族の方、知人の方、参加は自由です。AAミーティングは、希望と信仰による回復のステップです。すでに悲惨な依存症から解放され、家族と共に希望と平和に満ちた生活を送っている大勢の人々が心から歓迎いたします。

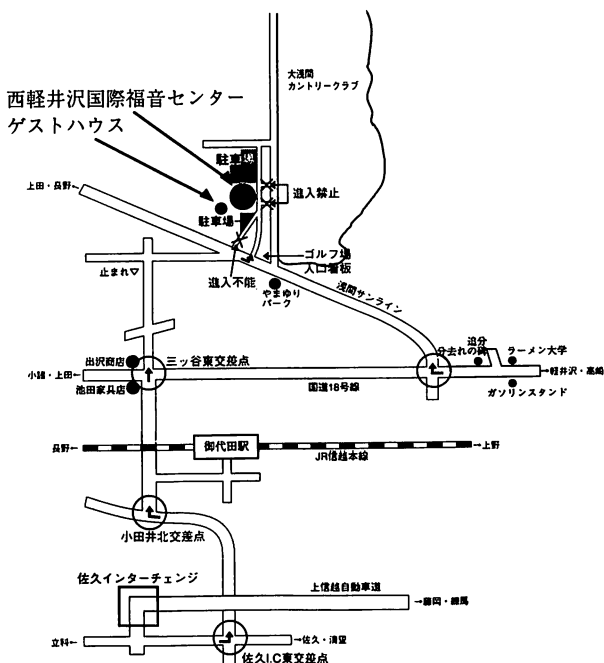
西軽井沢国際福音センターのご案内

西軽井沢国際福音センター

0267-32-6400(代) 長野県北佐久郡御代田町塩野450-15 〒389-02

西軽井沢国際福音センター・ゲストハウス

0267-32-6444 長野県北佐久郡御代田町塩野450-33 〒389-02



- J R 信越線で御代田駅下車。タクシーで約5分=800円程度。徒歩約45分=3km。
御代田へは東京上野駅から信越線特急「あさま」で軽井沢乗りかえ、普通で3つ目の御代田駅下車。
- 国道18号線で軽井沢から追分信号を越えて1.5km先、2つ目の追分宿の信号を越えて10km先、左に ESSO のガソリンスタンド、右に「分かれの碑」を右折して約3km。
- 道路は禁駐車周辺の道路に車を駐車させることは禁止されていますので、厳重にお守りください。

絶えず祈れ
(下巻)

1994年12月15日初版

編 者 ゴットホルド・ベック

装幀・デザイン 飯守恪太郎・上野文子・小林珠美
高橋美代子

編 集 酒井千尋・黒見鮎子・
石塚優子

聞き書き草稿 藤本淳之助

編集連絡 飯守節子・坂口寛子

発行所 キリスト集会

〒180 東京都武蔵野市吉祥寺本町4-9-11

電話 0422-22-2016(ベック宅)

振替 東京 0-56116

定価250円
(本体243円)

撮影・高橋金三

(西軽井沢国際福音センターの夕景。車の屋根に映えて。)



250円
(本体価格 243円)